

転生したら猫かぶりの
あの子になっていた

秀吉組

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天使の手違いで死ぬ「運命」を辿ってしまった私。その為第二の人生を送る世界として選んだのがバカテスの世界だった。そして転生した自分は木下優子になっていた

このお話の優子は原作に比べてかなりバファリン（優しさ）が加えられています。こんな優子じゃない！という方は戻るを押してください

それでもいいよという方は宜しければどうぞ

以前にジファンにて書いていたものです。同名義でPixivの方にも載せています。マルチ投稿になります

あと面白くないと感じたら理由もつけて評価してもらえると嬉しいです

目次

木下姉弟の日常 (休日編)	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
101	81	72	63	54	47	40	33	27	16	10	1

第25話	第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話
227	215	207	200	179	170	162	154	138	129	120	113	107

第37話	木下姉弟の日常 (学校編)	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	260	木下姉弟の日常 (休日編)	第28話	第27話	第26話
354	347	337	327	304	297	287	274		その2	253	242	237

第49話	446	ちよこちよこ気になるあの日の出来事	第47話	木下家のクリスマス	第45話	第44話	第43話	第42話	第41話	第40話	第39話	第38話
456			440	430	422	416	410	403	395	379	368	359

第60話	575
第59話	567
木下姉弟の日常 支え	555
第57話	547
541	
木下姉弟の日常 女子会編その2	532
532	
木下姉弟の日常 女子会編その1	511
第54話	495
第53話	484
第52話	475
第51話	467
第50話	

第62話	591
第61話	584

第1話

私は死んだ。それはもうアニメや漫画出てきそうな誰かを庇って死んだり、とんでもない怪物と戦ってしんどりとかではなくただ本屋で目に止まった小説を読みながら家に帰る途中小説を読むことに夢中になりすぎた余りに前方不注意で気がついた時には遅く車にはねられたという余りにも間抜けな死に方だった

しばらくし目覚めるとそこは真っ白ななにもない所だった。身体を見ると無傷だった

ここは天国？それとも地獄？などと考えていると誰かがこちらに向かって歩いてきた。私の所にやってきた人物は

白いスーツを着た何故か紙袋を被っている長身の変態（？）だった

「ご気分はいかがですか？」

「気分？まあ気持ち悪かったりとかもないし平常ってところかしら？ってここはどこ？」

「驚かないで頂きたいのですがここは天国です、って余り驚かれていませんね？」

「まあ車であれだけ派手にはねられて気がついたら見知らぬ所にいるんだものここは天国？とか考えたりもするわ。まあ超能力者が間一髪のところまで救ってくれた！なくてことだったらいいのになとは思ってたけどね」

「は、はあ…そうなのですか」

「ところで貴方は誰？」

「ああ、申し遅れました私天使のクロイツと申します」

「……え？今この人物なんて言った？天使？…これが？」

「おや？どうかなされましたか？」

紙袋の男が心配そう（？）に空いた穴からこちらを見ていた。どうやら突然の事に意識がそっちにいつていたようだ

「え、ええゴメンナサイ。ちよつとイメージしてたのはちよ、いやかなり違っていたものだったから驚いちゃって」

「それは無理もないですね。天使には色々なタイプがいますからね。子供のようなのも入れば中年のようなのもいますし」

知りたくもなかったことを知ってしまったような気がする…

「と、ところで私は一体どうなるの？」

私がそう聞くと紙袋の天使（？）は気まずそうに話を切り出した

「実は本来なら貴方はまだ死ぬべき「運命」ではなかったのです」

「「運命」ではなかった？ どういうこと？」

「はい、人の人生は神が書き示した「運命」に沿って生きており、私達天使は人の姿に変え人がその「運命」に沿っていけるようにサポートする役割なのですが今回私共の手違により貴方は本来の「運命」とは別の「運命」を辿ってしまったのです」

「と言うことは私は本来とは違う「運命」の為に死んでしまった、と？」

「はい・・・。今回のことは私共の不手際によるものなので神に頼み貴方には第二の人生を歩んで貰うことになりこうしてここに来ていただいたと言うことなのです。今までの話の内容をご理解いただけましたか？」

「・・・話が余りにも突拍子すぎて頭がついていけないのが正直なところね・・・。ところでさつき言っていた第二の人生ってどういうこと？」

「第二の人生それは簡単というと転生ですね。貴方がいた世界とは違う世界でもう一度生を受けその世界の住人として生きてもらうと言うことです」

「私がいた世界での転生はダメなの？」

「はい……。大変申し訳ないのですがそればかりは……。あ、で、でもそれ以外なら貴方の希望する所にできますので」

「そう、か」

心の何処かで生き返って本来の世界に帰れるとそんな有り得ないことを考えていたのだろうか悲しみに沈みそうになったがいくら泣いても状況が変わる訳もない、ならその第二の人生を楽しむのも有りだろうと気持ちを切り替えることにした

「その希望する世界なんだけどそれはどんなの？例えば小説の世界でも？」

「はい！だいじょうぶですよ」

「ならば私が死ぬ前に読んでいたやつの世界にお願い」

「はい、……「バカとテストと召喚獣」ですわかりました、今すぐにも転生なさいますか？」

「転生する前に二つ聞いておきたいことがあるんだけど？一つはその世界でもその言っていた神様の「運命」に沿って生きることになるわけ？それともう一つはその世界の住人を演じないといけないわけ？」

「普段ならそうなのですが今回は特例としてそれはありません。今回は私共の不手際のために起こったことです。それから貴方の思うままに第二の人生を送ってください。結構です。それとオマケも付けさせて貰う事になりました」

「おまけ？」

「はい、貴方が亡くなるまでの知識はそのままの状態で転生して貰います。簡単に言う
と体は子供頭脳は大人みたいな感じですよ。強くてニューゲームですね！」

まるでどこかの漫画みたいな設定だな…

「他に何か質問はございますか？」

「いいえ、もういいわ」

「そうですね。では転生を開始しますね」

そういうと天使(?)は被っていた紙袋を掴むと

「フラーシーシュ!!」

そう言って紙袋を取ると中から閃光が飛び出した

「えええ!? そんなやり方なの?! っていうかアンタ、ハ」

私が言い切る前に私の周りが閃光に包まれその眩しさから目を閉じた

目を閉じてしばらくすると閃光は止み目をあけようとするが目がなかなか開かない! というかあの前に身体もまるで自分の身体ではないかのように動かさなかった

しばらくそうやっていると突然光が差し込んで来てそして暖かい感触に包まれた

そしてようやく目を開けるとそこには優しげな顔をしている男性が現れ、自分はタオルのような物に巻かれていた。こ、これはもしや…

「おめでとうございます! 元気な女の子と男の子の姉弟ですよ!」

「よく頑張ったな、ママ」

「フッフ、ありがとうパパ♪とところでお願いしてた名前考えてくれた?」

「ああ！もちろんだ！」

そう言う私を抱いて

「この子は今日から木下優子、そして弟は木下秀吉だ！」

ええええええええ!!?

そうして私はこの世界で木下優子として生きることになったのだった

第2話

私が木下優子として生を受けて時が過ぎ小学6年生になっていた

転生する時にオマケとして付いてきて前世の知識のおかげでこの頃から常に成績優秀、品行方正の社交性に富んだ模範的な優等生をやっていた。転生してたのに原作と同じことやってるなと思わず苦笑してたりもする

同じく弟の秀吉のほうもこの頃になると演劇に興味をもち演劇のクラブのようなものに入り演技力を磨いていた

そんなある日クラスの子から秀吉が放課後によく男子に虐められているという噂を聞いた。双子の私達は容姿も瓜二つなため秀吉のことを女の子と馬鹿にされているという話だ

私は心配になり放課後秀吉がいるクラスに行ってみると噂通り何人かの男子が秀吉

の周りを囲み虐めが行われている所だった

「女のくせに男物の服着るんじゃないやねよ、この変態」

「違う！ワシは男じゃ！」

「自分の事をワシって変なの！それに知ってるんだぞ、お前この間女物の服着てたろう？男ならなんでそんなの着るんだよ？」

「それは演技の為に着ていたからじゃ！」

「嘘付け！この変態！変態！」

この男子達の心無い行動に見て私は気が付くと駆け出していた

「貴方達!!うちの弟に何やってるの!!」

「やば！姉が来たぞ！逃げるぞ！」

私が秀吉の所に駆けつけた時には男子たちは散らばって逃げた後だった

「大丈夫だった？秀吉、ケガとかない？」

私がそう聞くと力ない声で

「あねうえ、わ、わしはおかしいのかの？わしはへんたいなのかの？」

よく見ると目から涙が溢れていた、けして泣くまいと声はこらえていた

そんな秀吉をみて私は座り込んでいる秀吉と目線を合わすようにしやがみ、そして抱き寄せた

「あ、姉上!!」

「アンタさ確か幼い頃に見た演劇に感激して「ワシもあんな役者になりたいのじゃ！」って言つてそれからずっと勉強そつちのけでやってきたよね」

「……」

「確かに他人の目から見ればアンタは変に見えるかもしれない。だけどね私は知つてるわ、アンタがどれだけ夢に向かって努力しているのか。だから私は笑わない」

「姉上……」

「だから胸を張つて堂々してればいいのよ♪もうこうなつたら極めるところまでいっちゃいなさい！さっきの奴らみたいなのがぐうの音も出ないくらいだね！…例え周りがどうこう言つたとしても私だけはアンタのこと応援していてあげるからさ、ね？」

「あ、あねうえ…うわああああん!!!」

とうとう我慢出来なくなつたのか泣き出してしまつた秀吉

「ちよ、ちよつと!!なんで泣き出すのよ?私何か不味いこと言った?」

「ち、違うのじゃ、う、嬉しいから、な、泣いておるのじゃ」

「…やれやれ、…しばらくこうしといてあげるから溜まつてる涙全部出しなさい」

こうして秀吉が落ち着くまで抱きしめて落ち着いた頃には外は夕暮れになっていた

「あ、姉上、そ、その、さつきはありがとうなのじゃ (〃〃〃〃)」

抱きついて泣いていた自分を恥ずかしく思ったのか顔を真っ赤にしてお礼を言ってきた

「別にいいわよ♪可愛い弟の泣き顔拝めたしね」

「な!?!わ、忘れるのじゃ!!姉上!!」

「さあ〜どうしようかな〜♪」

そう秀吉をからかいながら家に向かって駆け出した

「ま、待つのじゃ!!姉上〜!!」

姉のいきなり駆け足に驚くが必死についてくる秀吉

でもその表情に悲しみは既になくあるのは夕日に照らされた笑顔だけであった

第3話

秀吉が虐めにあつていた事件からまたしばらくの時間が経ち、小学校の卒業式が近づいてきたそんなある日のこと。その夜自室で勉強をしていると何やら不安そうな表情で秀吉が私の部屋にやってきた

「姉上、少しいいかの?」

「うん?…何かあつた? 秀吉」

私がそう言うとき少し驚いた様子で

「ど、どうしてそう思うのじゃ?」

「わからないならその鏡で自分の顔を見てみなさい、凄い不安そうにしていて泣きそうな顔になってるから」

私にそう言われて鏡をのぞき込む秀吉。これは何かあったな

「どう？見てわかったでしょ？…それで？一体何があったわけ？」

「…もうすぐワシらの卒業式があるじゃろ？その卒業式にワシが歌を歌うことになって
の」

「へへ、凄いいじゃない！でもそれがどうかしたの？」

秀吉は演技の一環として歌唱力も磨いおりそれはそこらの合唱団が束になっても叶わないほどのモノで音楽の先生も舌をまくほどのモノだったはずだけど何か問題でもあったのかしら？

「歌うということはそれは、…皆の前で歌うことになるじゃろ？もし歌って変に思われ
たら…」

「また前のように虐められるかもしれない、と?」

私がそう尋ねると黙って小さく頷いた

秀吉が虐めにあっていた事件の後はこちらの励ましによりなんとか落ち着きを取り戻していたのだがやはりまだあの時のことが頭から離れないようだ

私は椅子から立ち上がると秀吉の頭を撫でた

「あ、姉上? (〃〃〃〃)」

突然のことに顔を少し赤くなりながらも気持ちよさそうにする秀吉

「あの時にも言ったと思うけど堂々してればいいのよ♪それにこれはチャンスかもしれないわよ?」

「チャンス?」

「そう、アンタがどれだけ真剣に演劇に打ち込んでいるか、ね。不安なら私に向かって唱えればいいわよ」

「でも姉上がどこにいるかわからんのじゃ」

「それなら大丈夫よ♪私は必ず最前列にいるから」

「どうしてそう言い切れるのじゃ？」

「学年の中で最も優秀な生徒が卒業式に卒業生代表として挨拶する為に最前列にいることになっているのよ。もちろんその優秀な生徒つてのは私だけどね♪」

「姉上…それを自分で言うのもどうかと思うのじゃが（汗）」

「何よ？文句ある？（ギロリ）」

手をポキポキと鳴らし威嚇行動に移る姉

「ワ、ワシが悪かったのじゃ」

「まったく…。まあとにかくアンタは何も気にすることなく思いつきり歌ってみなさい
！いいわね？」

「わ、わかったのじゃ」

そうは言うものの秀吉の表情から不安の色は拭いきれてはいなかった

「…、よし！秀吉、今日私と一緒に寝るわよ？」

「な、なんじゃと!？」

その夜、優子の部屋に二枚の布団が隙間を少し空けて敷かれていた

「な、なんじゃ寝るとはこういう事じゃったか」

「そうだけど？あ、アンタ！もしかして変な事考えてたんじゃないでしょうね？」

「そ、そんなことはないのじゃ!!（汗）」

「怪しいわね、…まあいいわ。寝るわよ」

そう言つて布団に入る姉につられ秀吉ももう一つの布団の中に入った

「秀吉、手を出しなさい」

「ん？一体ワシの手をどうするつもりなのじゃ姉上？」

「いいから出しなさい！」

そう言われて慌てて布団から出した手を優子はぎゅつと握った

「姉上？」

「アンタが寝れるまでこうしてあげるわよ、ありがたく思いなさいよね？」

「な、なんか恥ずかしいのじゃ（／＼／＼）、しかしなんじやろかこうして手を握られていると安心してきて、なん…だか…眠…気が…」

「秀吉?」

隣を見るとすうすうという息使いで秀吉が眠りに入っていた

「あらら、もう寝ちやつたか」

秀吉が寝ていることを確認すると秀吉の枕元まで行くと頭を優しく撫でた

「明日の卒業式、こいつにとつていい方向に向かうモノになるといいんだけどな」

弟の成功を祈りつつ自身もまた卒業式の挨拶を任せれているので眠ることにした

そうして卒業式当日を迎えることになる

卒業式は学校の体育館中で行われその中は卒業生、卒業生の保護者、在校生で一杯になつていた

卒業式は淡々と進んで行き、遂に秀吉が歌を披露する時がやってきた

たくさん視線を浴び不安そうな表情になるがこちらを見つけると少しホツとした顔になった

そんな秀吉に私がウィンクするとさつきまで硬かった秀吉の表情が柔らかいものになりすうと小さく息を吸うと歌を歌い始めた

歌が始まるとそれまで騒がしかった周りが静まりそこが人で一杯だったとは思えない静寂の中そこに居た皆がその歌に聴き惚れていた。私もいつの間にかその中の一になつていた

歌が終わると溢れんばかりの拍手が起こり秀吉は一瞬なにが起こつたのか分からな
い様子だったが事態を飲み込むと笑顔で拍手に答えていた

私の方とはというと普段から鉄壁の優等生を演じているのでこの程度のもので崩れる
はずも無く無事に挨拶を済ませ卒業式は幕を閉じた

その日の夜、前日の夜とは違って嬉しそうに秀吉が私の部屋にやってきた

「姉上！姉上！聞いて欲しいことがあるのじゃ♪」

「はいはいどうしたのよ？そんなに嬉しそうにしちゃって」

「あの卒業式が終わった後ワシを虐めてきた男子たちがやってきたのじゃが」

「なっ!?!なんですって!また虐められたの?」

「そうじゃないのじゃ、ワシに謝りにきたのじゃすまなかつた、と。それと歌とつても良かったと褒めてくれたのじゃ!何だかワシの事認めてもらったようで嬉しかったのじゃ」

「そっか♪良かったわね秀吉」

あの卒業式の歌が秀吉にとっていい方向に向かった事に思わず頬が綻んでいた

「うむ♪じゃがあの時の男子達ちよつと様子が変じゃつたのじゃ」

「どどういこと?」

「何故かワシに目を合わせないし、妙におどおどしておるしワシ何かしたのかの?」

…おいおいおい!?それってまさか

「あ、あのさ秀吉一つ聞くんだけどアンタと目を合わせた時その男子顔を真っ赤にさせてない?」

「おお、確かに目を合わすと何故か真っ赤になっておつたの。何故分かったのじゃ?姉上」

その歳から既に男子のハート打ち抜いていたのかアンタは…

無自覚のまま男のハートをぶち抜く弟に思わず頭を抱える姉であった

第4話

これは小学校を卒業し服が小学校の服装から制服に変わって二度目の春を迎えた頃のお話。高校受験の為の参考書を買いに私は街に向かったのだが…、この行動がまさか後にうちの弟と関わってくるあの三人とのファーストコンタクトになるとはあの時の私には知る由もなかった

街に向かう途中ひと通りの少ないところで一人の女子生徒が他校の男子生徒達に絡まれていた所を目撃する。絡まれている女子生徒の制服を見るとうちの学校の後輩のようだ

普段優等生を演じているせいかそれを目撃すると怖いはずなのに身体が勝手に女子生徒のほうに向かつて走り出していった

「ちよつと…その子が困ってるじゃない！離さない！」

「ああ？お♪結構可愛いじゃねえか！君も俺達と遊ばない？」

「ふざけないで！その子を離さないと大声で叫んで巡回中の先生を呼ぶわよ？」

最近うちの通学路でこういった被害が出て来たので通学路に先生を巡回させていた

しかし私がこう言っても男子たちは少しも動揺しなかった

「へへ、いいぜやってみろよ？来ないと思うがな？この時間帯は巡回の教師の休憩時間に入っているのは調査済なんぞな」

まさかと思いいきなり大声を出して見るが言われたとおり何の反応もなかった

「そ、そんな…」

「さあて、覚悟は出来てるよな？」

そう言つて迫つてくる男子達。ヤバイと思つたその時だった

「へぶはああ!?!」

いきなり迫つてきた男子が殴られ真横に向かつて吹っ飛んでいった

慌てて横を振り向くとそこには短い赤い髪がツンツン立っているのが印象的な荒っぽい雰囲気男子がそこに居た

「全く女二人にむさい男共が取り囲むとは情けない連中だな」

「なんだと!?!てめえ!!」

「!!ま、待つて!!そいつは!」

仲間の一人が止めようとするが聞かずに殴りかかろうとするがいつも簡単によければ逆に返り討ちになっていた

「や、やっぱりコイツ例の神奈月中の！」

「あ、あの悪鬼羅刹で噂の奴か！」

どうやらこの男子達はこの人物の事を知っているらしく怯え始めていた

「さてどうする？やるならとことん付きやってやるが？」

ギロリと睨みながらそう言う男子達は我先にと逃げ出していった

「あ、ありがとう、助けてくれて」

「別に気にするな、ただあいつらが気に食わなかったからしやしやり出ただけだ」

そう言つて何処かに行こうとしているので私は慌てて名前を聞いた

「待つて!!名前!名前教えて!」

「…神奈月中の坂本雄二」

そう言つて彼は去つていった

私は彼が言つた事にびつくりの余り呆然としていた

あ、あれが坂本君!?!原作は一巻しか読んで居ないから彼の昔知らなかったけどあんな感じだったのか…

そんな事を考えていると「先輩」と後ろから声をかけられ振り向くとさつき絡まれていた後輩の女の子だった

「先輩、ありがとうございます!私を助けようとしてくれて」

「ううん、気にしなくていいよ。それに実際助けてくれたのは彼のほうだったんだし」

「いいえ！もし先輩があの時来てくれなかったら私どうなっていたか…だから！ありがとうございまして！それじゃ私さっきのあの人にもお礼を言おうと思うので失礼します！」

そう言うときと後輩の女の子はさっきの彼が歩いていった道を走っていった。また変なのに絡まれたりしなきゃいいけど…

私は後輩の子を見送ると再び街に向かって歩きだした

第5話

高校受験の為の参考書を買う為に今私は大きい書店に来ていた

目的の参考書が無事買え帰ろうとした時、今ハマっているコミックの最新刊が発売中という広告が目についた

「ええ！最新刊出てたの？これは早速買わねば〜♪三成と左近がどうなったのか気になってたのよね〜♪」

（※転生しても腐女子の運命からは逃れられませんでした…しかも歴女で。まだ薄い本のところまではいってません…辛うじて）

意気揚々と漫画コーナーの所に入りお目当ての本を取ろうとしたとき誰かの手と重なった

「えっ?」

隣を見るとそこには髪型が三つ編みのちよつとおっとりとしたような女の子がいた

「す、すみません!」

「い、いえ。こつちこそ」

お互い手を急いで離し少し気まずい雰囲気になってしまった

この漫画の内容がちよつとしたモノなだけに他人に知られるのが恥ずかしい気持ちからによるものだった

「し、失礼します!!」

彼女は顔を真っ赤にさせながら去ってしまった

しかし何故だろうか彼女から自分と同じ「何か」を感じるのは私だけなのだろうか？
そんな事を考えながら本を取りレジに向かおうとしたとき

「ブハアア!!」と言う声と共に誰かが倒れる音が聞こえた

音がした場所に向かってみるとそこには

男の子がうつ伏せになって倒れておりその下は大量の出血で溢れていた

「ちよ、ちよつと!?!大丈夫!?!」

慌てて駆け込みどんな傷を負ったのかとうつ伏せになった身体を顔が見えるように
お越してみると確かに酷い出血だった……主に鼻からだが…

「え、えくと、…大丈夫? 救急車呼ぼうか?」

私がそう言うとその男の子はふるふると首を振り拒否した

「…心配無用。これは教材を取ろうとして誤って足を踏み外して転んだだけ」

……教材？教材つて……

「あの、ここ写真集のコーナーなんだけど……主にグラビアの」

ここにはアイドル物からちよつときわどい物まで多数多様の写真集が置いてあつた

これらを教材にしている学校なんて聞いたことないし考えたくない…。それにただ転んだだけでここまで出血するとは思えないし

こんな状況になつてもまだふるふると首を振り否定する所を見てようやく私は気が付いた

最初は気が付かなかつたけどこの人物、ムツツリーニこと土屋康太本人に間違いない

だろう…

原作を読んでいたのでどういう人物なのかは知っていたけどまさかここまでのムツツリだったとは（汗）

土屋君はなんとか立ち上がろうとするが

「と、とにかくもうだいじよぶ、!?プハアア!!」

「ええええ!?また!」

どうやら立ち上がる際にろくに抗体出来てないのにまた写真集に目がいつてしまい、そのせいで鼻からまた滝のように血が出てきてしまった

「あ、あの～お客様何かありますし、つてええええええ!」

「店員さん!?救急車!救急車をはやく!」

この迅速な対応により一人の男子生徒の生命の危機は回避されたのであった

「参考書を買ったついでに漫画本買いに行っただけなのになんでここまで疲労してるのかしら…」

先ほど本屋で起きた余りにも現実離れした出来事に色々と消耗した私は自販機コーナーで休憩を取っていた

やれやれと思いながらジュースを飲み休憩していると猫の形をしたシステム手帳を販売しているコーナーに目がいつていた

今いる書店はその大きな建物のおかげで本屋のみならず筆記用具、ノート、写真立て、システム手帳といった物などを販売している店や音楽CD、DVDなどのレンタル店なども入っていた

ジュースを飲み終わるとさつき見つけた猫の形をしたシステム手帳を手にとった

「あく可愛いなく♪欲しいけどさつき漫画買って今月ピンチなんだよね。う〜んどうしよう」

買うかどうか迷っていると隣から

「あの〜ちよつといいかな？」

「はい?」

そう言って振り向くとそこにはセーラー服を着た女の子(?)がそこにいた

第6話

「あの人、ちよつといいかな？」

「はい？」

振り返るとそこにはセーラー服を着た女の子（？）がそこに居た

そう、こうして今日の前にその人物はいるのだが何故かどこかで見たような顔なのだ

原作の一巻で良く見た、そうバカっぽい顔の…、ん？バカ？……

じーーーーー

「え？え？僕の顔に何かついて」

「あー！バカの顔だ！」

「ちよ!?!初対面の相手にバカって酷くない？（汗）」

そこに立っていたのは紛れも無く後に文月学園のバカのランドマークとなる吉井明久本人だった

しかし何故セーラー服なんか着ているのだろうか・・・、この人男だったよね？

「ご、ごめんなさい…ちよっと知り合いに似てたものだからつい」

「そうだったんだく、もう失礼しちゃうな僕みたいなきりつとした顔付きの子がバカな訳ないじゃないか」

エエ、ソウデスネ…

「ところで何か？」

「ああ、そうだった。えくとね、この辺にねこの形した手帳売ってないかな？」

「だったらこれじゃないかな？」

手に持っていた手帳を見せる

「それだよ♪それ以外にねこのは…あ、…それで最後みたいだね」

売り場を見てみるとやたらねこの奴が人気があるのかねこの物が一番売れていて私が持っている奴が最後の一つのようなだった

「仕方ない、姉さんには違うのを贈る事にするか…」

「え？お姉さんに贈る予定だったの？」

「うん…、うちの姉さん海外の大学に行っていてたまたま日本に帰ってきてるんだ。姉

さんには普段怒られるの多いけどそれと同じ位助けてくれる大事な家族なんだ。だからそのお礼に帰る前に今人気のこれを姉さんに贈りたいなと思って」

へえ、バカだけど良いところもあるんだと改めてこの吉井明久という人物の人の良さに触れたような気がした

「そっか、…はい♪あげる」

そう言つて手に持っていたねこの形をしたシステム手帳を手渡した

「え？いいの？君これ買うんじゃないの？」

「ううん、今月ピンチだから買うかどうか悩んでいたからいいよ。お姉さんに贈つてあげて」

「うん！ありがとう！」

嬉しそうにそう言うのと吉井君は行ってしまった

人助けをした後は清々しくて気持ちがいいな♪

…しかし最後まで分からなかったな…なんでセーラー服着ていたのかを…

「姉さん！はいこれ！欲しがってたでしょ？」

「あら？いいんですかアキくん？」

「うん！姉さんには色々とお世話になってるからね」

「ありがとうございますアキくん♪姉さんは嬉しいです♪」

「喜んで貰えて良かったよ！あはは、…とこでもうこの格好脱いでも」

「ダメです♪（きっぱりと）アキくんはあれ程言ったのに姉さんとの約束を破って不純異性交遊したではないですか？それはその罰なんですから」

「不純異性交遊って・・・、ただクラスの女の子と少し話ただけじゃないの〜!!（汗）」

「アキくん…、今度は女性の下着も付けますか？（ニコニコ）」

「すみません!!僕が悪かったです!!」

色々な出来事があったが何とか家にたどり着いた頃にはすっかり夜になっていた

「ただいま〜」

「おかえりなのじゃ姉上、どうしたのじゃ？そんなに疲れた顔して？」

心配そうにこちらを見る秀吉。そんな秀吉に私は秀吉の肩に手を置くと

「秀吉…、これから色んなことがあると思うけど頑張れ…」

そう言うとは自分の部屋へとむかうのだった

「???

そんな姉の言った事に意味が分からず首を傾げる秀吉であった

第7話

私が後にうちの弟と関わってくるであろうとある三人と出会ってからしばらくの時間が経ち中学三年になっていた

その頃になると小学生の頃に比べ私や秀吉もかなり成長し特に弟の秀吉のほうは背が特に伸び小学生の頃は私の方が身長が少し上だったのに今では同じくらいにまでなっている

それと背だけでなく演技のほうでもかなり腕を上げており小学生の時は余り上手く出来ていなかった声帯のモノマネまで今では本人と聞き分け出来ないくらいの精度になっっている位だ

応援している身としてはそれは喜ばしい事ではあるのだがそれと比例してとある問題が起きていたのである。それは

「秀吉！何よこの点数！前よりまた下がっているじゃない！」

演劇に没頭するあまり勉強そっちのけになってしまい学力が低下してしまうという問題だった

「う、うむ。勉強しようとは思っておるのじゃが、つつい演劇のほうにいつてしまつてのう」

「つついじゃないわよ！三年生は受験生になるのよ？わかつてる？」

「う、うむ」

「この調子だと文月学園の受験受けても落ちるわよ？確か文月学園の演劇部に入りたいんじゃないかつたつけ？」

この頃受験生の間で評判になっていたのが文月学園だった。一つは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校でまた他校とは少し違う教育方針をとつ

ておりこの学園には多くのスポンサーが資金提供している為学費が安いこと

そしてこの学園のもう一つの売りが「社会に実力を発揮できる生徒を作ること」である。それは勉強だけにおいてではなく部活の方面にも力を入れており部活に使われる機材も他校を圧倒している為秀吉にとつてもまさにうつつの学校なのだ

「そうなのじゃがいざ机に向かって勉強すると最初のうちは良いのじゃがだんだん集中力がなくなってしまうって（汗）」

「…それで気が付くと演劇の事をやってしまったっていると?」

私がそう聞くと気まずそうに頷いた

「やれやれ…。アンタの演劇対する熱意には尊敬通り越して呆れる部分があるわね」

「面目ないのじゃ（汗）」

「…しようがない、私が勉強見てあげるからしつかりやるのよ?」

「じゃ、じゃがそれだと姉上の勉強する時間が」

変な心配をする弟に私は

「…えい♪」ペチン!とおデコにデコピンを放った

「イテテ…あ、姉上?」

「アンタは変な心配しなくていいの、それに私が伊達に優等生やってるの知らないわけ無いでしょ?アンタが心配するような事はないから安心なさい」

「そ、そうかの?なら申し訳ないのじゃがお願いしても良いかの?」

「任せなさい♪あ、それとしばらくは演劇控えてもらおうからね?」

「えええ!? 殺生なく(泣)」

「問答無用」

その日からマンツーマンの勉強を始めた。秀吉はとにかく基礎が出来ていなかった
のでまず基礎から始めていった

秀吉は基礎は出来ては居なかったが応用力はあったので基礎さえしつかり出来てい
れば解ける問題が増えていった

そうして日々は過ぎていき受験前になる頃にはそれぞれ別れて勉強していた

秀吉が自室で最後の追い込みで頑張っているとコンコンとノックをする音が

「秀吉くちよつと開けてくれる?」

「どうしたのじゃ? 姉上?」

ドアを開けるとそこにはお盆を持った優子が。お盆の上にはおにぎりといれたてのお茶が乗っていた

「頑張ってる？ちよつと摘めるもの作ってきたわよ」

「おお♪有難いのじゃ♪一つもらおうかの♪」

そう言うとおにぎりを一つ取り口に入れた

「うくん♪相変わらず姉上の作るものは上手いのう♪やる気も出てくるのう♪」

「う、うっさい！（／＼／＼）お母さん達帰るの遅いから私が作っていったら自然と上手くなっていただけよ!!褒めたって何も出ないからね？」

褒められる事に慣れてないのか顔を真っ赤にさせる姉

「ワシはただ素直な感想を言ってるだけじゃ♪」

「ううう・・・」

しばらく顔を真つ赤にさせていたが落ち着くと秀吉の部屋の壁にかけてあったカレンダーを見ている

そこには文月学園の受験の日に赤いペンでマルが付いていた

「…秀吉、ここまで頑張ってきたんだから二人揃って合格しましょうね？」

「…うむ！」

桜が舞い散るその日、合格番号が張り出された場所で双子の姉弟が嬉しそうに喜んで
いる姿があった

第8話

「姉上、そろそろ出るのじゃ」

「ハイハイ分かってるわよ。それにはい♪これ忘れる気？」

そう言うとき可愛らしいキャラクターが描かれている布袋に入ったお弁当を秀吉に手渡した

「おお！すまぬのじゃ姉上。てつきり忘れる所じゃった」

「折角作ったお弁当なんだから忘れないでよね？」

こんなやり取りをしながら姉弟は家を出た

姉弟が文月学園の入学試験に合格して二度目の春が訪れていた

「ここの桜は綺麗なんだけど相変わらず坂はキツイわね」

「そうじゃのう。何でこんな坂の上がった所に学園を作ったのじやろうか？」

「ただ単に土地が安かったとかそんなのじゃない？ふう…ようやく見えて来たわね」

勾配のキツイ坂を上がった所に姉弟が目指す学園はあった

学園の入口前に差し掛かると浅黒い肌で短髪でスーツを着ているが体付きはまるでスポーツマンのような大男が学園に入る生徒一人一人に白い封筒を渡していた

「おはようございます西村先生」

「おはようなのじゃ西村教諭」

「お、木下姉弟か。おはよう、ほれ振り分け試験の結果だ」

西村先生を始めて見たのは入学式の時に会場の場所を聞いた時だった。一応原作でどんなキャラなのかは知ってはいたが、いざ本人を見るとその時は声には出さなかったが「て、鉄人!!なるほど納得だ…」と思わず思ってしまうほどの印象だったのを今でもよく覚えていてる

この学園では二年生から振り分け試験があり、クラスは成績順にA〜Fと振り分けられる、言ってしまうえば一年の時の努力の成果が試される試験のようなものだ

私は渡された封筒を開けるとそこに入っていた紙には「木下優子 Aクラス」と書かれてあった

「流石だな木下姉、我が校を代表する優等生のお前には当たり前前の結果だったか」

西村先生は嬉しそうにそう言った

「いえ先生日々の努力があればこそその結果ですよ♪」

「ここでも鉄壁の優等生を演じる姉に少し苦笑いする弟

「さて、問題はお前だな木下秀吉」

先生にそう言われ秀吉に渡され開かれた封筒の中身をみるとそこには

「木下秀吉 Fクラス」と書かれてあった

この結果にさっきの私の時とは違い少し呆れた顔をする西村先生

そんな西村先生に苦笑いをする秀吉

「木下秀吉、お前ももう少しお前の姉さんを見習ってだな」と説教をされる秀吉

私と比較されてたか表情が沈みがちになってきたので助け船を出すことにした

「西村先生、確かに今回の試験の結果うちの弟は最悪の結果を出してしまいましたと比較する必要はないですよ？この子にはこの子なりのやり方があったと思いますしそれにこうなったら後はもう上がるだけなんですから。ですから起きてしまった事を言うのではなく前に向かって進むにはどうしたらいいか？それをうちの弟に教えて下さればいいかと思えますよ？」

「…そうだったな。すまん木下弟、先生は無意識にお前とお前の姉さんを比較するような目をしていたようだ許して欲しい」

「…そう言うお弟に頭を下げる西村先生。自身に非があると思うとそれが生徒でも頭を下げる事が出来る見た目はちよつと怖いけどいい先生だなと改めて思った」

「あ、頭を上げて欲しいのじゃ西村教諭！今回の結果はワシの努力不足な訳じゃつたし…」

「…そう言つて貰えると助かる。全てとは言わないが学力はこの先生きていく中で有効な武器の一つになるのは間違いないことだ。今回の試験で失敗してしまつたのならこ

の一年間で頑張つて次の試験で挽回してみせろ、お前自身が気付いていないだけできつと姉と同じくらいのは才は持っている」と先生は思っているぞ！精進してみろ」

ぽんと秀吉の肩に手を置きながら西村先生がそう言った

私と同じ才があると言われたのが嬉しかったのか「はい！」と元気な声で頷いていた
「では自分達のクラスに向かうように」と言われ私達は学園に入った

「あ、それと木下弟！学校に不要な小道具は持つてくるなよ！」と西村先生の言付きで
それぞれのクラスに向かっているとさつきまで元気だった秀吉がおどおどとこつちを伺うように話しかけてきた

「あ、あの姉上？」

「ん？何？」

「そ、その、…怒らぬのか？」

「怒るって何が？」

「それは、その…ワシがFクラスになった事じゃ」

「もしかしてその事が気になっておどおどしてたの？」

「そう言うと気まずそうに頷く秀吉

「はあく。十分反省している本人に対して傷口に塩を塗るような事しないわよ。あ、でも」

「そう言つて立ち止まると

「西村先生はアンタのことあんだだけ買つてくれてるんだからその信用に答えなきやダメ

よ？全教科とは言わないけどいくつかの教科はDクラス並みにはしときなさい、わかった？」

「う、うむ…」

自信なさげに答える秀吉

「もうそんな顔しない！それとも私と同じ才じゃそんなに頼りにならないかしら？」

「そ、そんなことないのじゃ!!」

「あら♪わかってるじゃない♪…まあ頑張ってみなさい」

そう言つて少し秀吉の頭をなでるとくるつと新校舎のほうに身体を向け走り出した

「あ、姉上！ま、待つのが姉上」

こうして姉弟の新学期が始まるのだった

第9話

「それじゃ私こっちだから」

「うむ、それじゃまたなのじゃ姉上」

新校舎と旧校舎の境界線に当たる渡り廊下で秀吉と別れると私はAクラスに向けて足を動かした

Aクラスに向かってしていると後ろから

「ゆ〜う〜こ〜♪」ギユツ♪と誰かに抱きつかれてしまった…

この聞き覚えのある声、こんな事するのはおそろく…

慌てて後ろ見るとそこにいたのは色の薄い髪をショートカットしたボーイッシュな

女の子、工藤愛子がそこに居た

むにゆ♪

「い、い、い！愛子どこ触ってるのよ！」

「胸だけど？♪おや？優子さん、またちよつと大きくなつてない？ここのとこ急成長だね♪」

愛子は一年の終わり頃に來た転校生でその時席が隣だった為知り合い友人となるつて!!廊下のど真ん中でなんてことを言ってるんだこの娘は!!

「な、何言ってるのよ!?!アンタは!?!」

そんな風に廊下で騒いでいると「どうかしたのですか？」と後ろから声を掛けられ振り返るとメガネをかけスーツをきつちり着こなした女性、私達の担当の高橋先生だった

私は素早く身なりを整えた

「いえ、大したことではありません。ちよつと制服の乱れを工藤さんに直してもらつていただけですから、ねえ？工藤さん？」

「え？」

(ギロリ)

「え、ええ！そんなですもう気を付けなきゃダメだよ？優子」

「ええ、ごめんなさいね工藤さん♪」

「そうだったのですか。もう少しで授業が始まりますのでそれまでに教室に入つて下さいね」

「はい、わかりました」

そう言つて高橋先生の後ろ姿が見えなくなるまで見送つた

「相変わらず優子のその猫かぶりぷりは凄いな…」

愛子は素の私を知る数少ない友人の一人でもある；；まあ去年ちよつとした油断から見つかつてしまったのが原因なんだけど…

「仕方ないでしょ！これでも私は優等生で通つてるんだから！それにこれは木下家の血の性ゆえよ！そう！血のせいなのよ！」

「そ、そうかな？」

「そうよ！ほら教室に急ぐわよ？」

「ちよ、ちよつと待つてよ〜」

愛子と共にAクラスにたどり着くと教室の施設の凄さに唾然としていた

「……、教室、だよね？」

「ええ…そうみたいね」

そこにあつたのは壁全体を覆うほどの大きさのプラズマテレビを中心にノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートなど色んな設備が備わっており、またその周りを見てみると壁には如何にも高そうな絵が飾られていたり観葉植物などが置かれていた

原作を読んでいたとはいえそれを直で見るとそのスケールのデカさに改めて驚いた

「な、何だか高級ホテルみたいな教室だね」

愛子もこの教室の設備の凄さに頭が追いついてないようだ

「ええ…でもこれを見て「戦争」を起こそうって思う理由と学園側の思惑がよく分かるわね」

「戦争」って試召戦争の事？それに思惑？」

「そう、授業料は同じなのにこれほど設備に差があると奪いたいつて気持ちにもなつて戦争を起こす。その為勝つために勉強をしようとモチベーションが上がるし、また奪わせまいと点数を上げるため勉強しようとモチベーションが上がる、そしてその結果成績向上に繋がる、とね」

「なるほどね。でもうちのクラスに挑もうと思うクラスなんているのかな？」

…それがいるのよね。それも一番下から、ね…

とりあえず教室に入るとまずとある人物がいるか確認した

「…やはりいないか」

私が探していたのは後にFクラスの主力になる姫路瑞希さんだった。もしかしたら？と思ったがやはり原作通りFクラスになったか

そんな事を考えていると「優子、愛子おはよう」と声をかけられたので振り向くと黒髪を肩まで伸ばしたまるで日本人形のような女の子、一年の時の同じクラスメイトの霧島翔子がいいた

「あ、代表おはよう〜♪今回も代表が代表なの？」

「…愛子、何か変な会話になってる」

「あはは、ごめんごめん。去年ずーと代表って呼んでたからクセになってたよ。それじゃあ改めて霧島さんおはよう〜♪」

「…うん、おはよう」

「それで今回も霧島さんが代表？」

「…うん、私がAクラスの代表になった」

「あはは、去年とまた一緒に代表って呼ぶね♪また同じクラスになれて嬉しいよ♪」

「私も♪またよろしくね代表♪」

「…うん、私も二人と一緒に嬉しい♪」

そうして喜んでいると高橋先生がやってきたので席についた

先生から各自の設備の確認、クラス代表の挨拶などが終わり最後に

「Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い研鑽を重ねてください。これから始まる「戦争」でどこにも負けないように」

高橋先生の結びの言葉で締め二年生がスタートした

第10話

Aクラスの朝のホームルームが終わりしばらくの時間が過ぎ迎えたお昼休み。優子達は教室でお昼を取っていた

「ねえ優子？またこれやらない♪？」

愛子がポケットから取り出したのは一枚のゲームセンターで使われているコインだった

「いいわよ♪今度こそアンタからおかず取ってやるんだから！」

「ふふん♪そううまくいくかな？またボクが優子のおかず頂くよ♪」

それは一年の時からよくやっていたものだった

互いに相手のお弁当の中から自分の好きなおかずを選択しコインの表と裏どちらかに掛け見事当たったほうがそのおかずを頂くといい賭けだった

「それじゃあボクはその美味しそうな唐揚げ頂こうかな♪」

「なら私はそのハンバーグをもらおうよ!」

お互いに欲しいおかずを選択すると愛子はコインを親指の上に乗せ上に飛ばし手の甲ともう片手で挟むようにしてキャッチした

「さあ、どっち!」

「うくん…よし!今回は裏ね!」

「ならボクは表と言うことに…さあどっちかな?」

ゆつくりと上に乗せていた手を退けるとそこにあつたのは表になっているコイン

だった

「があああ!!また負けた〜!」

「へへへ、毎度あり〜♪う〜ん♪流石優子の手作りなだけあって美味しく♪」

「…優子、これで15連敗達成」

「代表〜(泣) そんな事いちいち数えなくていいから〜」

☒♪♪☒♪♪☒♪♪

そんなやり取りをしている所に優子の携帯のメールの着信音が鳴った

「あれ?誰からだろう?ん?秀吉からだ。なんだろう?……」

「弟君から?なんだったの?」

「うん、何か今日の午後からDクラスを相手に試召戦争するみたい」

「へ〜新学期始まって早々もう試召戦争やるんだ」

いよいよ始まるのか試召戦争が。原作通りの流れならFクラスが切り札として隠していた姫路さんを使って勝利するはずだけど

「どうしたの優子？なんか考え込んだみたいだったけど？」

「え？あ、ああごめんごめん。秀吉帰るの遅くなるかもって書いてあったからさ今日の夕飯何にしようかな？つてね」

「ああ〜♪なるほどね。でもFクラス、格上のDクラス相手に勝てるのかな？点数に差があるのは明白な訳だしクラスを指揮する代表が優秀でもなければ勝つのはかなり難しいと思うけど？」

確かに並みの人物ならあの不利な戦力でなおかつ自分たちより格上のDクラスに勝つのは無理だろう。だがFクラスの代表は…

「…大丈夫。Fクラスの代表はあの雄二だから。あの雄二が作戦も策も立てずに戦いに挑む訳がない」

「あの雄二？その人代表の知り合いなの？」

「…うん。その人はとっても頭がいい。だからきつと勝つ」

そう言う代表の目は確信的な目になっていた

「へえ、代表がそこまで言う人なんだからFクラス勝つかもね♪」

まあ、坂本君以外にも凄いのが色々居るからなFクラスは…

それから時間が経ち放課後になり帰宅しようとしているところに下校中の生徒に混

じつてFクラスがDクラスの面々に急襲するのを見かけた

あの様子だとそろそろ決着が着くかな?と思いつながら私は学園を後にし夕飯の買い物をするためスーパーに向かった

と
スーパーに行く途中今日は何がいいかな?と頭の中で色々なメニューを考えている

「先輩!木下先輩!」

後ろからそう呼ばれ振り返るとショートヘアの活発そうな女の子がいた。うちの制服を着ているから学園の後輩だとは思うけど

「え、えくと…どちら様?」

私がそう言うとその子は予想していたのかちよつと残念そうな顔になった

「あくやっぱり覚えてないですよね？あの！中学の時に他校の男子に捕まって居る時に助けて貰った事があるんですけど覚えてませんか？」

中学の時？うーん？……あ！

「ああ！あの時男子に絡まれていた時の！（四話参照）」

「はい！あの時は本当にありがとうございます！あ、自己紹介がまだでしたね……。私今年文月学園に転校した一年の前田永姫（まえだはるき）です！よろしくお願いします先輩！」

「永姫ちゃんか、よろしくね♪そういえばさつき転校してきたって言ってたけどあの後何処かに？」

「はい父の仕事の関係で県外に」

「そっかそれでまたお父さんの仕事の関係でこっちに？」

「はい！これで想い人のあの人に会いに行けます！」

「想い人？」

「はい♪あ、この人です♪」

そう言って永姫ちゃんは写真を見せてくれた。そこに写っていたのは赤いツンツンと立っている短髪に意思の強そうな目をした男子が写っていた

うん？おいおい！これってまさか……

とある喫茶店にて

ガタツ！

「ど、どうしたの？代表？いきなり立ち上がった？」

「…雄二に女の影が」

バツチシ己の敵の存在を察知していた

第11話

夕食の買出しに向かっている途中、昔出会った後輩前田永姫ちゃんと再会し色々話を
するうちに一緒にスーパーに行くことになった

「ところで木下先輩は今日何にするんですか？」

「そうね、今日は洋食にしようかな」

そう言つて店に並べられている商品見ているとパスタの麺が目にとまった

「ふむ……」

パスタの麺を手に取りつつ目線は魚介類が売られているコーナーに向いて考える

「先輩決まりましたか？」

「うん、うちは今日はシーフードパスタにするわ」

「いいですね、なら私はシーフードカレーにでもしようかな」

「あ、いいかもね♪シーフードは冷凍のミックス買ったほうが安く済むからそっちにしようか」

「そうですね」

「そーういや永姫ちゃん自分で料理してるの？」

「はい、うち両親が共働きのなもので私が良く作っているんです」

「へ、うちと一緒だね」

「先輩もですか？」

「うん、まあ双子の弟がいるけどアイツ料理できないからさ；；」

「あはは♪そうなんですか？」

こんな風楽しく会話をしながら買い物を買ませスーパーを出るとそこで永姫ちゃんとは別れ自宅に戻った

自宅に戻ると制服からラフな私服に着替えると早速買ってきたパスタと食材を調理し上手く出来上がった所に丁度秀吉が帰ってきた

「ただいまなのじゃ、お♪いい匂いがしてくるのじゃ♪」

「丁度夕飯出来た所だから早く手を洗ってきて」

「わかったのじゃ♪」

テーブルに二人が揃うと手を合せ出来立てのパスタを食べ始めた

秀吉はこのシーフードパスタ大変気に入ったらしく何回もお代わりをしあつという間に平らげた

「♪馳走様でした♪」

「お粗末様でした♪」

夕飯が終わってしばらくして私は秀吉に今日の試召戦争の結果を聞いてみた

「秀吉、今日の試召戦争どうなったのよ？」

「うむ、かなりキツイ戦いじゃったが何とかワシらFクラスが勝ったのじゃ」

「へへ凄いいじゃない、良くFクラスの戦力であの格上のDクラスに勝てたわね？」

「クラス代表の雄二の作戦と姫路のおかげじゃな」

やはり姫路さんはFクラスに…、話は原作通りに進んでいるわけか

「しかし明久が派手にやっておったのう…。Dクラスの連中から逃げる為とは言え窓は割るわ消火器で周りを粉末だらけにしてその上スプリンクラーを作動させるわでえらいことになっておったのう」

「はあ…、その様子だと吉井君相変わらずのようね…」

余りの多くの出来事に思わず私は頭を抱えていた

「うん？姉上、明久とは面識があるのかの？」

「ええ、一年の時にちよつと、ね」

私がそう言うと秀吉が顔を近づけて

「一年の時何があつたのじゃ!? 教えるのじゃ! 姉上!」

「わ、分かつた! 分かつたから少し離れなさい…」

私がそう言うのと大人しく離れたが目は「早く話せ」と物語っていた

「そうあれは一年の頃の話なんだけどね…」

私はあの頃を思い出しながら語り始めた

一年前

私は先生の頼みで次の授業で使う道具が保管されている準備室の鍵を借りるために職員室を訪れていた

「失礼します、あの先生に頼まれて準備室の鍵を借りに来たのですが？」

「ああ、あの鍵なら西村先生が持っているはずですよ？今職員室を出たばかりですから今から追い掛ければ間に合うと思いますよ？」

丁度職員室にいた福原先生がそう教えてくれた

「そうですか！福原先生ありがとうございます！」

そう言つて会釈し職員室を出ると西村先生の姿を探した

するとまだ遠くに行つてなかつたのかだいぶ近くに西村先生がいたので追いかけることにした

「西村せんせい」

そう言つて先生まであともう少しという距離で

「逃がすかあああ!!!」

男の子の大きな声が鳴り響きガン!!と言う何かを弾いた音が聞こえ、な、なに?と
思った瞬間ビシヤと頭から何か冷たい感触に襲われた

「な、何?何があつたの?」

ゆっくりと目を開いて自分自身を見てみると何故か頭から水を被っていたようだ。
よく見ると少し離れた所にバケツが転がっていた

「な、なんで私濡れてるの?」

「あああ!!!ご、ごめんな、イタダダダダ d a d a d a d a d a !!!」

「吉井!!貴様と言う奴は俺だけでなく他の学生まで巻き込みおつて!!」

声のするほうを見ると男子生徒が西村先生に頭蓋骨が割る勢いで頭を鷲掴みさせていた

さつき西村先生が吉井と言っていたので恐らくあの吉井明久君で間違いないだろう

「すまん、巻き込んでしまつて。うん？お前は——Aの木下優子か？」

「あ、はい。西村先生から準備室の鍵をお借りしようかと」

「そうだったのか。折角取りに来てくれたのにこの馬鹿のおかげで大変な目に合わせてしまつたな」

西村先生はそう言うときより強く吉井君の頭を鷲掴みグギグギと凄いい音がしていた

「あ、あの先生？そろそろその辺にしておかないと本当に割れちゃいますよ？」

「まったくこの馬鹿が。木下、鍵は後で俺が持つていこう。だからお前は保健室に行つて濡れた身体を乾かすように。後でお前のクラスメイトに替えの制服を持つて行かせるよう頼んでおく」

「わ、わかりました」

先生にそう言われ保健室に向かう途中

「あ、あのそれじゃあ僕も次の授業があるのでこれでえええ!!!」

グギギギギギギ
!!!!!!

「貴様はたつぷりと灸を据えてからだああああ!!!」

「ぎやああああああ!!!」

断末魔の声が聞こえたが自業自得なので気にせず保健室に向かった

そんなことがあった次の日だった、「吉井明久、この者を観察処分者に処す」という知らせが舞い込んだのは

いつもの通り授業を受けお昼休みになった時クラスメイトに呼び止められた

「木下さん」

「うん？何か用かな？」

「うん、木下さんを選んでくれて他のクラスの男子が来ているんだけど？」

そう言うクラスメイトが指差す先には昨日西村先生に驚掴みされていた吉井君が来ていた

しかし来るタイミングが悪かった。観察処分者の情報が駆け回っていた頃だったのでクラスの皆が好奇心な目で吉井君を見ていたのでこのまま行くと彼になにか良からぬ

噂が立つのでは？と思いメモに一言「放課後屋上に」とだけ書き気づかれぬように吉井君に渡しそのまま自分の席に戻った

「ううう…流石に少し寒くなってきたわね」

放課後ホットの缶コーヒーを飲みながら待っていた。季節が秋から冬に変わり始めている頃なので風が少し冷たかった

それからしばらくするとハアハアと息を切らして吉井君が現れた

「ご、ごめん!!遅れちゃって」

「別にいいわよ、ほい」

缶コーヒーを吉井君に投げ渡した

「え? いいの?」

「放課後屋上に来るように指定したのは私なんだから気にしないでいいわよ。それで話って？」

「う、うん。あの昨日の事なんだけど」

「ああ、昨日のアレね」

「うん、本当にごめん！まさか木下さんがいるとは思わなかったから」

「誰も居なかったら西村先生にバケツを投げてびしょ濡れにしたい訳ないと思うけど？」

「うつ」と凶星を突かれたのか黙り込む吉井君

「…はあ、別にただ単に西村先生が気に入らないからあんな事した訳じゃないんでしょ？」

「う、うん」

「なら何故あんなことをしたのかその理由を教えてくださいませんか？被害者である私にはそれを知る権利位はあると思うけど？」

私がそう言うと吉井君は事の次第を話し始めた

吉井君の話によるとたまたま入ったファンシーショップで出会った小さい女の子がお姉さんを元気づけるためどうしても欲しがっている人形をプレゼントするための資金を工面するため持ち物検査で没収された物を取り戻しそれを売ってその資金に宛てたようだ

私が遭遇したのはその没収品を保管してあるロッカーの鍵を入手するためにやった事だったようだ

「…それで？何を売ってその人形を買う為の資金にした訳？」

「えーと、携帯ゲーム機、ゲームソフト、DVD、漫画、小説、トレーディングカードに……」

「……、貴方は学校をどんなどころだと思っているの？」

なんか凄く頭が痛くなってきた……

「あ、でもギリギリ足りなかったから鉄人、じゃなかった西村先生の古本を売って何とかなったんだよね」

うん？ 西村先生の古本？

「……ねえ？ 一応聞くんだけどその古本……ちゃんと先生の許可貰ったの？」

「え？ ううん。捨てる物かと思ってさ」

…ああ、なんか頭痛薬が欲しくなってきた

「なるほど…観察処分になる訳ね」

「ええ？どうしてさ？僕はただあの子の為に」

…ブチ

「いいわけないでしょうが!!」

余りのバカさについつい大きな声を上げてしまった。いきなりのことだったのか呆然とする吉井君

「え、えーと木下さん？」

「あのね！保管されているロッカーから没収品を盗み出した上に先生の私物を売るなんてそれはもう窃盗なの窃盗!!西村先生がそのことを警察に伝えなかつたから観察処分

者程度で済んだのよ？そうじゃ無かったら最悪退学モノよ？」

「で、でもそうしないと人形が買えないし」

「でもそのお店の人にはしばらく待つて貰えていたんでしょ？ならまだ時間があったというこでしょ？」

「そ、それは…」

「なら友人達に事情を説明して融資を募るとか、お店の人に頼んで分割の支払い頼むとか方法は色々あつたはずよ？違う？」

勢い余つてちよつと強い感じで喋つてしまった訳か見るとしゅんと黙つて元気をなくしている吉井君がいるわけで

「あ…、おほん。と、とにかく行動を起こす前にまず考える事をしなさい、分かつた？」

「う、うん。分かったよ、本当ごめんね木下さん。ホントごめん」

そう言つて頭を深々と下げる吉井君

「で、でも！」

「？」

「見捨てずにその子為に何とかしてあげようとする吉井君のその思いは、その…嫌いじゃないわよ？（ニコツ）」

「え！（ドキ）」

「まあそう言うことだからもう二度とこんな事しちやだめだからね？それじゃね」

そう言つて何故か顔を真っ赤にさせている吉井君を置いて私は屋上を後にした

「と、まあこんなことがあつてねって、なにブー垂れてるのよ?」

話終わり秀吉を見ると何故か頬を膨らませて拗ねていた

「ワシが知らない間にそんなことがあつたなんて明久から何も聞かされておらんかったのじゃ。なんかワシだけ除け者扱いされた気分じゃ」

「しよ、しょうがないじゃない。あの時は吉井君がアンタと同じクラスなんて知らなかったんだからさ、ねえく機嫌直してよ?」

「べ、べつにワシは怒ってないのじゃ」

「怒ってるじゃない」

「怒ってないのじゃ!」

「怒ってる！」

「怒ってない！」

「怒ってる！」

とまあこんな感じのいつも通りの姉弟なのでした

木下姉弟の日常（休日編）

とある休日、木下姉弟の弟木下秀吉は日課である早朝のランニング、ランニングの途中で行く発声練習を済ませて家に帰り朝食のパンを食べてしばらくしていると二階から姉の優子が降りてきた

「ふあ〜〜、おはよ〜ひでよ〜ムニヤムニヤ」

目を擦りながらだりとしたパジャマに脇には抱き枕替わりの人形（如月ハイランドのノイン）を持ってと学校では想像できない姿がそこにあつた

「あ、姉上いくら休日と言えど少し気を抜きすぎではないか?」

その姿に秀吉は苦笑いでそう言う

「いいじゃない休日くらい。優等生を演じるのも楽しやないんだから〜…もうちよつと

寝よう〜」

そう言つてソファ―に倒れ込んでそのまま寝ようとする姉

「なつ、そんな所で寝てはダメなのじゃ姉上！」

「う〜、ならいつものようにお茶いれて〜」

「はあ…やれやれ仕方ないのう」

そう言つと秀吉は柵から急須と茶葉を取り出すと急須にちよつと多めに茶葉を入れてそこに沸かしたお湯を入れるとそれを湯呑に入れた

「ほれ、入れたぞい姉上」

「ん」

優子は眠そうな顔をしながらテーブルに備え付けられている椅子に座ると煎れたてのお茶を飲んだ

「う~~~~~ん!!美味しい!それに目が覚めるわ~♪」

「そりや通常の10倍濃いお茶じゃからのう」

その証拠に余りの濃いさに湯呑の奥が見えないほどである

「よし!目が覚めたわ!あ、でもお昼が近い時間になってたか」

壁に掛けられている時計を見ると後少しすればお昼を迎える位の時間帯になっていた

「秀吉、アンタ朝何か食べた?」

「うむ、ちよつと軽くパンを食べたくらいかの」

「だったらお昼はうどんでもいいよね？」

「そうじゃな。ワシはそれでいいのじゃ」

「よし、なら早速取り掛かるとしますか」

そう言って寝巻きから私服に着替え髪を後ろに束ねると「よし！」と気合を入れエプロンを付け取り掛かった

まず塩水を作り、薄力粉と強力粉を塩水を少しづつ入れながら混ぜボソボソした状態になると厚手のビニール袋に入れ15分位寝かせてそれからコシを出すため踏んでいくのだが

優子はそのビニールにとある文字を書いて新聞紙を広げている所に置いた

書いた文字は「脂肪」「脂肪」と書いて怨敵と読む（優子談）

「うおおおおお!! 知らない、間に！勝手に、付いて、るんじや、ないわ、よ、ア・ン・タはあああ!!!」

そう言つて生地を踏んでいく優子

それはまさに魂の叫びそのものであつた

「あ、姉上よ。毎回そうしないと麵にこしが出ぬのかのう？」

ちなみにこの魂の叫びはもう一回行われることになっている

そんな風につつていき最後にはツルツルの綺麗な手打ちうどんが出来ていた

二人はお互い好きなトッピングを乗せて味わつた

「う〜ん♪やっぱり自分で打った手打ちうどんはこしが効いていて美味しいわね♪」

「うーん確かに美味しいのじやがその工程を見ている身としては少し複雑な気分じやな」

「別にいいじゃない、美味しければそれでいいのよ♪」

「あ、あはは、姉上らしいのう」

「こうやって休日のお昼を過ごす姉弟なのだった」

第13話

「やれやれ、全くあれほど言ったのに忘れて行くんだから。秀吉のやつ」

今私は秀吉の分のお弁当を持ってFクラスに向かっていた

何故こんな事になっているかと言うと朝練があるからと言って秀吉が朝早く家を出るのを見送りふとテーブルの上を見るとそこに秀吉のお弁当があった

今頃困っているだろうなと思って今こうして届けにやって来ているという訳だ

Fクラスの前に到着したのだが、なんだこの教室(？)は

クラスのプレートは落ちかけ、窓は割れている所があったり外から見ても分かるくらい傷んでいるのが分かる畳が敷かれていたりとこれはもう教室ではなく廃屋と読んだほうが正しいかもしれない

原作でどれだけ酷いかは知っていたけどまさかこれほどとは思っても見なかった

ちよつとFクラスの施設に驚いたがこうしていたら休み時間が終わってしまうので意を決して教室内に踏み込んだ

教室に入ると教室には女子が二人しかおらずその他は誰もいなかった

あ、Fクラスの殆どは男子だからさっきの時間体育でもあつていないのだろうか？

とにかく秀吉の机、もとい卓袱台を探していると

「どうしたのよ？木下。というか何で女子の制服着てるのよ？あ！まさかその姿でアキを誘惑しようとしてるんじゃないでしょうね！」

「ええ!?! そうなんですか!?! 木下君!! ダメですよ！」

…はあ、いきなり色々突つ込みどころ満載でどこを突つ込めばいいのか分からないわ

「あのね、なんか勘違いしているみたいだから言うけど私は木下秀吉の姉の木下優子。あと弟に同性愛の趣味は持っていないわよ？」

「木下のお姉さん？あ、もしかしてAクラスのの？」

「それにしても木下君そっくりです」

「まあ双子の姉弟だしね。ところで貴方達は？」

「あ、私は姫路瑞希と言います」

「ウチは島田美波よろしくね」

…この二人がFクラスの中心的メンバーの中の二人か、うん？何やら二人から視線が…

(じーーーーー、ううう、ウチよりも胸があああ)

(じーーーーー、ウエスト細いなく羨ましい)

「え、えつと何？」

「あ、いいえ！何でもありません!?!と、ところでFクラスに何かご用で？」

「ええ、弟にお弁当を届けにね。アイツったら折角作ったのに忘れて行っちゃってね」

そう言ってお弁当が入った袋を出した

「ああ、なるほど。それでしたらさつき旧校舎の倉庫から木下君が出てくるのを見たのでもうすぐ戻って来ると思えますよ?」

「旧校舎の倉庫?なんでそんな所から?」

「木下が男子と一緒に着替えるのは教育上良くないって学園側から苦情が来てね。それでその対策案として使われていない旧校舎の倉庫を木下専用の更衣室にしたのよ」

そんな苦情が出ていたとは…、秀吉アンタも色々と苦労してるのね

そう思っていると秀吉が教室に戻ってきた

「おや？姉上何故Fクラスにおるー」

「木下!!この裏切り者!!」

「そうです!ひどいです!木下君!!」

「な、ど、どうしたと言うのじゃ!?!島田に姫路よ!?!」

「木下のお姉さんあんなにスタイルいいじゃない!!妹であるアンタもいずれああなるん

でしょー！」

「手痛い裏切りです!!木下君!!」

「お、落ち着くのじゃ!二人とも!!それと島田よ、ワシは弟じゃ!!」

ホント苦労してるわね秀吉。お姉ちゃん見てたら目から水が・・・

今だにお弁当は渡せずにした

第14話

「ところで何故姉上がFクラスにおるのじゃ？」

秀吉は暴走する島田さんと姫路さんをなんとか落ち着かせるとそう尋ねてきた

「ああ、さっきの騒動で忘れそうになりそうだったけど、はい！お弁当！アンタこれ完全に忘れて行つてたでしょう？」

私がそう言うと慌ててカバンの中身を確認して動きが固まる秀吉。どうやら今そのことに気がついたらしい

「うっ、すまんのじゃ姉上」

苦笑いでお弁当を受け取る秀吉

「やれやれ、手間の掛かる弟がいると苦労するわ」

私がそう言うのとそれを聞いていた二人がすかさず

「そう言っついても顔は笑ってますよ？木下さん♪」

「そうね♪何だかんだ言っつても結局は助けちゃうお姉さん、といった感じかしら♪」

「な、何言っつてるのよ二人とも!?!べ、べつにそんなんじゃないんだからね!!」

こんな風に二人に遊ばれているとFクラスの男子が戻ってきた

「おい、木下に似た可愛い子がうちのクラスにいるぞ!!」

「確かAクラスの木下優子じゃないか?」

「その木下優子が何故Fクラスに?」

島田さんや姫路さん以外に教室に女の子がいるのが珍しいのか沢山の視線が来るわけで…

なんかちよつと居心地悪くなってきたなと思っていたところに

「あれ？木下さん？」

そう言われ振り返ると吉井君を始め坂本君、土屋君がそこにいた

「あ、吉井君。久しぶりね一年のあの時以来かしらね」

「あ、あはは。あの時は本当にごめんね」

あの時の事を思い出したのか思わず苦笑いになる吉井君

「別にもういいわよ、気にしてないから。それよりもDクラス戦聞いたわよ？またやら

かしたんですって？もう気を付けなきやダメよ？」

「あ、あはは…すみませんです」

「バカな明久がバカですまん。俺はFクラス代表の坂本雄二だ、よろしくな」

坂本君か。中学の時に見たときに比べて何だか少し丸くなった感じがするな。どうやらあの時の事は向こうは覚えてないみたいだけど

「…土屋康太。よろしく」

そしてこの一見大人しそうな感じの子が土屋君、又の名をムッツリーニ君か。ムッツリ商会の頭でもある

…私の写真も売られてるのかな？現にさつき私の写真撮ってたし

「…写真の売上は好調」

「本当に売ってたの!?!」とか心の中読まないで!」

全くもって油断できない人物だ・・・

「ところでどうして木下さんがFクラスに?」

「秀吉にお弁当を届けにね。朝練で慌ててたんでしようね、テーブルの上に置き忘れていてね」

「そうだったんだ。あ! そうだ! 木下さんも一緒に屋上でお昼食べない? 今日姫路さんにお弁当作ってきて貰って皆で食べるんだけどどうかな?」

「え? 私参加しちやつてもいいの?」

「はい♪今日は沢山作って来たんで大丈夫ですよ♪」

姫路さんはそう言うときめのお弁当を見せた。どうやら本当に沢山作ってきたよ
うだ

「そっか…、ならお言葉に甘えようかな？」

「ならお昼休み屋上に集合でいいかな？」

「ええ、分かったわ♪楽しみにしてるわ」

そろそろ休み時間が終わりそうなので私は自分のクラスに戻ることにした

お昼休みが楽しみな♪

この時、私は忘れてはならない重要なことを忘れてしまっていたのだ…

そう…

Fクラスには殺人料理人がいる事に…

第15話

お昼休みになると私は屋上に向かう前に購買部に立ち寄り飲み物を買うことにした

無事飲み物を買って屋上に向かおうとしたとき後ろから声を掛けられた

「木下せんぱい♪」

振り返ると嬉しそうな顔で永姫ちゃんがこっちに向かって走ってきた

「あ、永姫ちゃん。どうしたの？」

「いえ、購買でお昼買いに来ていたら先輩の姿が見えたものでつい♪先輩もお昼買いに来たんですか？」

「ああ、私は飲み物を買いに、ね」

「だったら私とお昼一緒にしませんか？今日は生憎友達みんな先約があつて私一人なんですよ、よよよよ」

「あはは、そうなんだ。あ！そうだ永姫ちゃん！私友達にお昼誘われてるんだけど一緒に来る？」

「え？でも突然行ったら迷惑じゃないですか？」

「うーん、ちよつと待ってね…」

そう言うのと携帯を取り出し秀吉に電話を掛けた

『はい、どうしたのじゃ？姉上？』

「あ、秀吉？あのさお昼のお誘いの件なんだけど後輩の子一人連れって行っても大丈夫かな？」

『うむ、少し待つのじゃ……。来ても大丈夫のようじゃ』

「そう♪分かったわ。それじゃあまた後でね。…来ても大丈夫だつてさ♪」

「そうなんですか？うーんどうしよう」

そう言つて悩む永姫ちゃん。ならここは一つ…

「あ、お昼のメンバーの中に坂本君もいるけど？」

「行きます
!!!!!!」

おお!!目の色が変わつた。これが恋する乙女の目つきか、な、なんか迫力あるな

「そ、それじゃあ屋上に向かおうか？」

「はい！」

そう言つて永姫ちゃんと屋上に向かう真下私の中で何か引つかかっていることがあつた

(うーん、何だろう？何かとんでもない重要な事忘れてるような？…なんだっけ？)

考えても答えが出ないまま屋上に到着した

屋上に出ると吉井君達が大きいシートを広げて大きめの重箱を置いている所だった

「もう準備出来てたんだ。お招き有難うね♪」

「あ、木下さん。うん？そつちの子が？」

吉井君が私の後ろにいる永姫ちゃんを見ながら尋ねた

「そう、こつちが…」

「一年の前田永姫です！よろしくお願いします♪」

「僕は吉井明久、ヨロシクね永姫ちゃん」

「私は姫路瑞希です。よろしくお願ひしますね永姫ちゃん♪」

「ウチは島田美波。ヨロシク！永姫！」

「ワシは姉上の」

「あ！妹さんですね！でもなんで男子の制服を??」

「…ワシは姉上の弟の秀吉じゃ。正真正銘の「男」じゃ」

「ええええ!!男!!こんなに可愛いのに!!」

あ、あはは。やっぱり初対面の人だとそう思うか

「ううう。ワシは早く男らしくなりたいのじゃ」

「あわわ!?す、すみません!!私てつきり女の子かと思つて!」

慌てて秀吉に謝罪する永姫ちゃん。まああれで男だと認識出来る方が無理かもしれないわね

「気にするでない前田よ。ワシは気にしてはおらんのだ♪……もう慣れたしもう、はあ〜」

いや、アンタ全然気にしてらっしゃるでしょ!?それ!?

「ところで土屋君と坂本君は?見当たらないけど?」

「あ、あれ？ムツツリーニならさっきまでここにいたのに」

そうして周りを見回してみるとカシヤカシヤと音が…

「……ムツツリーニ、なにしてるの？」

「…自主トレと新作入荷」

「いつの間に後ろに!？」

「…土屋康太。よろしく」

気が付かない間に永姫ちゃんの後ろにいた土屋君。…もう何も言うまい

「坂本君は？」

「雄二はなんか飲み物買ってから来るって言ってたから」

「・・・そうなんですか。な、何か緊張するな」

坂本君が遅れてやって来ると聞いて少しホツとしてまた緊張した面持ちになる永姫ちゃん

「木下さん、もしかして永姫ちゃんひよつとして・・・」

永姫ちゃんの様子を見て女性陣は気がついたようだ

「ま、まあ・・・、そういう事♪」

「そうなんですか。頑張ってくださいね永姫ちゃん♪」

「応援してるわよ♪」

「ど、どうも」

こんな和やかな空気が流れる中あの悪夢の時間が刻々と近づいていることにこの時は誰も知る由もなかった

第16話

「しかし雄二君遅いですね」

最後の坂本君がなかなか来ないまま時間だけが過ぎていた

「そうだね、このまま待つても時間が過ぎるだけだし先に食べてようよ？そのうち雄二も来るだろうし」

「…そうですね。坂本君には悪いですけど始めましょうか」

そう言い姫路さんが重箱を開けるとそこには見るからに美味しそうなおかず達が姿を現した

『おおおお!!!!』

その見栄えにその場にいた一同は声を揃えて驚いていた

「凄い美味しそうだね！雄二には悪いけどさっそく…」

「……（ヒョイ）」

「あ！ムツツリーニ！ずるいよ！」

「私も頂いちゃいますね〜♪（ヒョイ）」

「もう！永姫ちゃん！お行儀よく…」

『（パク！） バタン！！ガクガクガクガクガクガクガクガクガクガク！！！！』

「ない…よっ………」

素早い動きでつまみ食いをした土屋君とその混乱に乗じて同じくつまみ食いした永

姫ちゃんの二人が同時に口に入れた瞬間二人共倒れガクガクと震え出していた

「……………」

その光景を前に残った四人は顔を見合わせていた

「土屋君!?!永姫ちゃん!?!」

驚きの余り持っていた箸を落とす姫路さん

すると倒れた土屋君がムクリと立ち上がると姫路さんに向かってグツと親指を立てる。美味しかったと伝えたいのだろうか?しかし伝えようにも足がガクガクと真実を語ってしまっている

一方永姫ちゃんはというとズルズルを身体を引きずりながら座っている私の膝の上まで頭を持ってきて顔を私の膝の上に預けると姫路さんのほうに向けるとニコツと笑いながら土屋君と同じくグツと親指をたてると

「とつても美味しかったですよ姫路先輩♪あ、でも私ちよット…キノウ…オソクマデ…オキテ…イタノデ…チヨットネマ…スネ…」

途中言語がおかしくなりながらもそう伝え墜ちた永姫ちゃん。それはもはや芸人魂すら感じるものだった

「そうだったんですか、早く寝ないとだめですよ？でもお二人のお口に合って良かったです♪」

二人の言いたいことを良いように解釈したのか喜ぶ姫路さん

「良かったらどんどん食べてくださいいね」

そう笑顔でお弁当を勧めてくる姫路さんを残された四人の目にはきつと死神に見えるに違いない

(…ねえ？あれどう思う？)

(ウチの目にはとても美味しそうに食べた人間とは思えないわ…)

(うむ、あれは絶対演技ではなかるうに。…うん？どうしたのじゃ？姉上)

(……………)

しまったああああああああああああああ

!!!!!!!!!!!!!!!!

そうだった!!姫路さん+お弁当!!デスイベントだった!!

にもかかわらずこうして自分からこんな恐ろしいイベントに参加してしまうとは!!
何忘れていたんだ私は!!

ステンバーイ、ステンバーイ、落ち着け私……。起きてしまったものは仕方ない、あ
とはこれ以上の被害者を出さないようにしなければ……

「おう、待たせたな。へーこりや結構旨そうじゃないか!どれどれ?」

パクツ!バタン!!ガクガクガクガク
!!!!!!

って!そう思っているうちにはやくもまた新たな犠牲者出てるし!

遅れてやってきて何も知らずにお弁当を食べ倒れた坂本君を見て四人は確信する

こいつは……凶器だ……と

「だ、大丈夫ですか!?坂本君！」

「だ、大丈夫だ。ちよつと…足を…くじいて…な?」

姫路さんを傷つけまいと懸命に嘘を付く坂本君。しかし今の坂本君の状態を見れば明らかにそれは嘘だと分かりそうなのだが

「な、なんだそうだったんですか♪良かった♪皆さんも遠慮せずどうぞ♪」

それに気が付かず凶器と化した弁当を勧める天使の笑顔を持った死神が迫る

(ど、どうするのよ!アキ!)

(ど、どうするって言っても断つちゃったら姫路さん傷つくかも知れないし)

(あ、姉上!何かいい手はないかの?)

(…手なら一つだけならあるけど任せてもらえる?)

(本当!?お願い!木下さん!)

坂本君のあの姿を見ても嘘を信じてしまう所を見るとちよつとじやなくかなり、そうド天然に入るのだらうこの子は。このまま放っておけば彼女はこの凶器と化した弁当を何の疑問も持たず作り続けるだらう

そうなればまたこうして何人もの犠牲者が出るのは火をみるよりも明らかだ

なら打てる手は一つしかない。…やれやれ優等生も辛いわね

「…姫路さん、一つ質問するんだけどこのお弁当にある肉じやが隠し味に何か入れてる?」

「あ、はい♪隠し味に濃硫酸を入れて甘味を出しているんです♪あと色んな所にも入ってますよ」

予想を斜め逝く発言だったのだろう吉井君達は暫し呆然としていた

もしかしたら調味料を色々入れすぎてあんなったのかもと原作とは違うことを祈ったがどうやら原作通りらしい

「そう…。姫路さん悪いんだけどそのお弁当頂くわけにはいかないの」

「え？どうしてですか？」

「…分かりやすくはつきり言うわね。そのお弁当

とても食べた物じゃないと言ってるの」

私がそう言うのと辺りは何もなかったかのように静まりかえっていた

第17話

「分かりやすくはつきり言うわね…、とても食べた物じゃないと言っているのよ」

私がそう言うのと周りは何もなかったかのように静まり返っていた

「な、何を言っているの!? 木下さん!!」

「そ、そうよ! 土屋達あんなに美味しそうにしてたじゃない!」

てつきり私が上手くフォローを入れるものだと思っていたのだろいきなりの本音を言ったことに動揺しつつも何とかフォロー入れようとする二人

「そうですよ! それに永姫ちゃんのはつきりと美味しいって言ってくれました!」

二人の後押しに強気に反論する姫路さん。こりや手厳しくいかなきやダメか…

「そうね、確かに美味しいって言っていたわね。でも美味しいと言っている人間が食べた次の瞬間倒れたりするかしら?」

「そ、それは…そう! 余りの美味しさの余り失神しっちゃったんだよ!」

「そうそう!!」

依然姫路さんをフォローしようとする吉井君と島田さん。あくまでそう言い切るのなら…

「へへ、失神するほど美味しいのなら私も一口貰おうかしら?」

そう言つて箸でおかずの一つを摘み口の方に持っていこうとすると

「だ、ダメだ! 木下さん!」

「ア、アキ!!」

「あ……………」

ごめんね吉井君。今回貴方のその優しさ利用しちゃう真似して…、でもこうしないとあの子はきつと分からない

「ど、どうして止めるんですか？ 吉井君？」

まさか止めるなんて思っても見なかったのだろう明らかに動揺する姫路さん

「それはね私が倒れるのを心配し思わず言ってしまった一言なのよ姫路さん。嘘だと思えば貴方のお弁当一口食べてみたら？」

畳み掛けるかのように挑発する。これで相手がかかってくればチェックメイトだ

「いいですよ！ 美味しいに決まっていますから！ あとで何を言っても遅いですからね

「！」

姫路さんは自ら作ったお弁当の中のおかずを箸で掴むと勢い良く口に放り込んだ

そして…

「ウツ!?ぶは!?ゴホツゴホツ?!?!?」

放り込んだおかずを口から吐き出すと訳が分からないといった顔で咳き込んでいた

「これが真実よ姫路さん。貴方の作ってきたコレはお弁当じゃなくて毒物なの、お弁当に普通薬物なんか入れたりなんかしないの。貴方は恐らく化学反応でより美味しくなると思っていたらしいけどそんなのはとんでもない勘違いなの」

「そ、そんな……」

私が放った言葉に傷つき座り込み泣き出してしまった

「どうしてそんな酷いことを言うの！ 木下さん!!」

「そうよ！ 瑞希は私達の為に一生懸命作って来たのよ！ それを！」

「確かに酷いことを言っているかもしれないけど誰かが言っただけであげないと彼女の為にならないのよ！ 傷つけないように嘘をついてフォローすればその場はいいかもしれない、でもね？ それを続ければ続けるほどバレたときに一番傷つくのは彼女なのよ？ 自分の作った物をあんなに美味しい美味しいと言っていた自分が信頼していた人達に嘘をつかせて苦しめていたってね」

「そ、それは……」

どうやら少し感情的に話してしまったようで吉井君達が黙ってしまった

「さて……」

少し気持ちを落ち着かせると泣いている姫路さんの近くに行き座り込むと

「それで何時まで泣いているつもりかな？（ペシッ）」

姫路さんのおデコにデコピンを御見舞した

「痛ッ!! な、なにするんですか!？」

ちよつと強くしすぎたのかおデコが少し赤くなっていた

「それで貴方はどうするつもりなのと聞いているの。このままベソかいたまま何もしないの?？」

「だ、だって……私の料理はもう……」

「そうね「今回」はダメだった。でも次はそうなるとは限らないし私は一言も改善できないとも言っていないわよ?？」

「!?」

「人間誰だつて間違つたりするわ。貴方の場合間違えるベクトルが普通の人より大きかったけどね、自らの失敗を自覚し改善しようと言う意思があればまだ何とかなるんじゃないかと私は思っているんだけど?……やつぱり諦める?」

「私がそう言うのと弱々しい目から何かを決意した強い目が変わっていき私にこう言つた

「諦めたくないです!! 皆に本当に心から美味しいって言って貰える物を作りたいです」

「よし!よく言えました♪ なら善は急げよ!学校終わったら私の家で特訓するわよ!」

「へえ!?!特訓!?!」

「そうよ？　このまま最悪の評価のままじゃ嫌でしょ？　だから明日リベンジするのよ！　それにまた薬品を調味料代わりに入れなにか監視する人が必要だしあんな事言っただから協力するわよ。それとも迷惑だった？」

「え!?　そ、そんなことないです！　よ、よろしくお願いします！」

「とまあそういう訳だけどいいかな？　吉井君、島田さん？」

「う、うん。僕はいいよ」

「ウチも大丈夫」

こうして二人から了承を得た。倒れてしまった三人にはまた後日と言うことになった

「さて話も決まったところでこの三人保健室に連れていかないとね」

体格のいい坂本君は吉井君と秀吉の二人がかりで、土屋君は島田さん、永姫ちゃんは私と分担が決まり、まず永姫ちゃんから運ぼうとしたとき吉井君達に呼び止められた

「うん？どうかした？」

「あ、あのね、その…、ごめん!! 酷いこと言っちゃって。僕らがもう少し上手く言っていればこんな事にはならなかった筈だし」

「本当ごめんなさい」

そう言つて頭を下げる吉井君と島田さん。あちやく気にしちやつたか

「別に気にしなくていいわよ。あの場合どちらが正しいなんて誰にも分からないしそれに私ももう少し上手く言えば姫路さんを泣かすような事にならなかったはずだしね」

そう言つて永姫ちゃんを支えながら屋上を後にしようとする後ろから

「あの後ろ姿かっこいいわね、なんか背中では語る男子みたい」

などと全然嬉しくない賞賛を島田さんから受けていたのは忘れることにしよう……

三人を保健室に送り届けるとお昼休みも後僅かだったので私と秀吉以外のメンバーは購買で何か買ってお昼を済ませた。若干一名水で済ませた者もいたが……

それから放課後になるとその日たまたま部活が休みだった秀吉と一緒に帰ることになった

「おや？　姉上姫路はどうしたのじゃ？　今日うちに来ることになっておるのじやろ？」

「ああ、姫路さん一旦家に戻ってから来るそうよ？　うちの場所分らないから学園近

くの駅前で待ち合わせすることにしてるのよ」

「ほう、そうなっておったのか」

それからどちらが話しかけることもなく無言の間がしばらく続き、丁度家と学園との中間位の所で私が口を開いた

「そういえばあの屋上のやり取り、あの時アンタ一言も言わなかったわね？ てつきり何か言ってくるかと思っただけけど？」

「それはあの時姉上がわざと皆を怒らせる事を言っただけで悪役になるつもりなのが分かったからじゃ。姫路に自覚させるためにのう」

「あれ？知ってたの？」

「当たり前じゃ♪ 何年姉弟やっと思っておるのじゃ？ 姉上」

「そっか。しかしいつちよ前に見抜くなって生意気だぞ♪ このこの♪」

そう言つて秀吉の首に腕を回し絞める姉

むにゅ♪

「なっ！や、やめるのじゃ姉上！！ そ、その当たつておる！！ 当たつておるのじゃああ
！！」

そんな弟の悲鳴（？）を聞きながら帰宅するのであつた

それからしばらく時間が経ち姫路さんを迎えに行きいよいよ特訓が始まつた

「あのお家の人とか大丈夫なんですか？」

「ああ、うち両親共働きだから。そして今日は二人とも仕事で忙しくて帰れないらしいから心配しなくても大丈夫よ」

「ところで特訓と言っても何をするつもりなのじゃ？姉上」

「特訓と言ってもそんな特別な事はしないわよ？ただ姫路さんの料理を作るところを見ておかしな所を指摘して改善していくのが目的だから」

「なるほどのう。それならワシも手伝えるのう」

「とまあそういう事だから準備はいい？ 姫路さん」

「はい！よろしくお願ひします！」

こうして特訓が開始されたのであった！！

が！しかし！！

「ちよ！　ちよつと！　知らない間に目を盗んで薬品いれるんじゃない！！」

「い、いや、その、この位なら大丈夫かな〜と思って」

「全然良くな〜い！！」

「あ、姉上!!何やら鍋から怪しい煙が出てきたぞい!!」

「すぐに換気しなさい!!」

「ああ!!鍋の底が穴が開き始めたのじゃ!!」

「ええええ!?これダイヤモンドコーティングされたお鍋よ!?何で穴が空くのよ!!」

特訓と言うよりも二人に取って普通では起こり得ない現象の時間になっていた

そうしてそんなこんなで翌日の朝日を迎えることになった

「あ、姉上、朝日じゃ、朝日が登っておる」

「あ、あはは、ホントだ〜キレイね〜」

「そうじゃの〜、あはは」

『アハハハ……、（バタン!!）』

「ええ!! ふ、二人ともしつかりしてください!!」

その日木下姉弟は学校を休んだ。ちなみにその日リベンジで出してきた姫路の料理はちよつと塩辛い卵焼きだったそうなの

第18話

あの悪夢のお弁当事件から数日が経った。原作通りFクラスがBクラスに宣戦を布告した

恐らく展開としては姫路さんは根本君にラブレターを押さえられ動きが取れず、Fクラスは根本君の策略にハマリピンチを回避するために秀吉を私に化けさせCクラスを挑発させAクラスに当て付ける、とまあこういう流れになるんでしょうね

まあ正直言えば当てられたとしてもCクラス位なら問題なく勝てるはずだけど。でも……

あのバカきつとかなり苦しむ事になるでしょうね、他の事ならいざ知らず演劇に関してはあいつは常に誠実だったしね。それほど大切にしている演劇に対する想いをあんな事のために汚したくないでしょうに

……やれやれここはお姉ちゃんが一肌脱いでやるとしますかね♪ それじゃあまず
は……

コンコン

「いいよ、入っておいで」

「失礼します」

ノックし部屋に入るとそこにいたのはコーヒーを飲んでいた長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長だ。この文月学園の売りの一つでもある試験召喚システムを開発した中心的人物でもある

「おや、誰かと思ったら二年Aクラスの木下じゃないか。今日は一体どうしたんだい？」

「はい、今日は学園長先生に一つお願いがあつてきました」

「お願い？」

「はい。ぶつちやけ単刀直入に言います。AクラスとCクラスを試召戦争するように仕向けてくれませんか？」

「ブツ!!!」

いきなりの発言驚いたのか飲んでいたコーヒーを吹きそうになった学園長

「い、いきなりとんでもないことを言うんじゃないよ！ 口からコーヒーを吹き出すところだったじゃないか！」

「そうですか？」

「そうですか？ つて当たり前じゃないか。どこの誰が自分のクラスに戦争を仕掛けさ

せようとする奴がいるさね」

「(トト)にいますけど…」

「……言うじゃないか。まあ、まずはどうしてわざわざ自分のクラスを攻めさせようとするのかその理由を聞こうじゃないか」

私は今行われようとしている戦争について、根本君の策略、そしてあのバカの想いを守る為などを話した

「……なるほどね。しかし自分の弟の演劇に対する想いを守るためだけに自分から火の粉を被るような真似をするなんてアンタもFクラスに負けなくらいのバカだね」

「まあ小さい頃からアイツがどんな想いで演劇やってきたかそばで見ってきましたからね。……それにたまにはバカな事をしてみたくなるんですよ」

「プツ、ハハハ♪ でもそんなバカは嫌いじゃないさね。……いいだろう！ その話受

けようじゃないか。それに根本には少しお灸を据えてやろうとも思っていたところだからね」

「学園長先生、根本君に関して何かご存知で？」

私がそう聞くと学園長先生は顔を顰めた

「ああいうタイプの人間って奴は裏で悪さをすることに関しては証拠を残さないくらい丁寧にするんだろうね。アイツがテスト問題をカンニングしている事は掴めてはいらんだが証拠は一切なくてね、どうにかしてお灸を据えてやろうかと思っていた所だったのさ」

流石は喧嘩に刃物は当然装備と言わしめているほどの人物だ。カンニングくらいやっていても不思議じゃないか根本君は

「ところでCクラスの小山が根本と組んでいるのは確かなんだろうね？」

「はい。あの二人はどうかやら付き合っているようですよ？ それに根本君が頻繁にCクラスに顔を出していたのも確認済みですし」

「ほう？ 小山がああ根元を、ね。頭は良くても男を見る目までは良くないらしいね。その曇った目を覚まさせるのにも今回の件はうつつけと言ふ訳か」ニヤニヤ

な、なんか学園長先生凄く悪そうな顔している……

「戦わせる口実には召喚獣の動作の速さ向上の為のデータ集めの模擬戦としておくかね。あと模擬戦なので負けても設備の降格はなし、でも三ヶ月間の宣戦布告の禁止の件は採用とする。こんな感じでいいかい？」

「でもそれだとCクラス嫌がりませんか？」

「そうだね……、よし！ ならこの模擬戦で勝てば設備を交換するってのはどうだい？ 負けても何も失わず勝てばAクラスの設備。奴らにとつては願ってもない条件だろう？」

「そ、そうなるとう度はうちのクラスが嫌がりませんか？」

「Aクラスには勝つたら今度開かれる清涼祭の出し物少しくらいなら多めに見てやるつて事にしておけば大丈夫さね。それにAクラスの中にはAクラスという事を誇りに思っている連中が多い。Aクラスとしてのメンツにかけて負ける訳にはいかないと思ふ筈だから大丈夫さ」

「わかりました。学園長先生、力を貸してくれてありがとうございます！」

「おや？ 勘違いするんじゃないよ。これは貸しなんだからね？ そのうち後できつちり返してもらおうよ？」

「あ、あはは……、お、お手柔らかにお願いします……」

抜け目無いな～学園長先生は……

とりあえずこれで戦いの火種は用意できた

後はクラスの皆の説得か……難しいな

クラスの皆に何と言って説得したらいいか考えながら自分のクラスへと足を向ける
のだった

第19話

クラスの皆には何と言って説得すればいいか悩みながら重い足取りで教室にたどり着くと愛子がこちらに駆け寄ってきた

「もうーどこ行つてたの優子？ 折角お昼一緒に食べようと探してたの、……どうかした？ 何かあったの？」

「……へっ？ な、何って？」

「何か凄く悩んでますって顔してたからさ」

「…うん、顔に物凄く出てた」

振り返ると代表がお弁当を持って立っていた。どうやら代表もお昼を一緒にしようと思っていたようでこちらを探していたのだろう

しかしそんなにも悩んでたの顔に出ていたのか、気を付けないと……

「…優子、困っているなら話して欲しい。力になれるなら私手伝うから」

「そうだよ！ 遠慮なんて無しだよ？ 優子」

「代表……、愛子……。うん、悪いけどちよつと相談に乗ってもらえる？」

嬉しいことを言ってくれる友人達の好意に私は甘えることにした

「なるほどね。しっかし弟君の想いを守る為に自分から戦争を仕掛けるってのは如何にも優子らしいね♪」

「(コクコク)」

「な！ 如何にもってどういうことよ！」

「それだけ優子がブラコンだって事だよ♪」

「私のどこがブラコンだって言うのよ!!」

「……………」

「……………」

「な、なによ？ 二人ともそんな「はあ？何言ってるの？コイツ」みたいな目は!!」

「別に♪ ねえ♪代表？」

「…うん。 何でもない」

「と、とにかくそんなことはどうでもいいとして！ クラスの皆には何て言つて説得したらいいと思う？」

私がそう尋ねると代表の口からとんでもない回答が帰つてきた

「…優子が思った事をそのまま話せばいいと思う。弟を助けるために力を貸して欲しいって」

「ちよ、ちよつと待つてよ代表!?! それじゃあダメよ! …… 一個人の我侷の為だけに戦争するなんて絶対認められるはずがないわ」

今になって我ながらなんて無謀なことしたのかと思う。戦争はクラス全員で行うものであつて個人でどうこう出来るものではない

そう思つて俯いていると

「いいんじゃない？ 我俣言っても」

愛子までとんでもないことを言い出した

「あ、愛子まで何言ってるのよ!? そんなのダメに」

「まあまあそう言わずに言ってみたら？ 大丈夫♪……優子が思っていることにはならないから。ボクを信じてくれないかな？」

そう言う愛子の顔は普段の愛子とは別人に見えるくらい真剣な顔になっていた

「愛子……、うん、分かった。どんな事言われるか分からないけど言ってみる私の気持ち」

そうしてその日の授業が終了しホームルームが終わった後クラスの皆に無理を言つて残ってもらった

そこで私はCクラスに戦争を仕掛けること、またその理由を包み隠さず皆に話した
学園長先生の要請だからと誤魔化すことも出来たがそれではクラスの皆を騙すみた
いでいやだったからだ

言い終わると私は目を瞑った。この後来るであろう非難や罵声に備えるために……
しかし

私に掛けてきた言葉は

「いいよ、力を貸すよ木下さん。木下さんには一年の時から助けてもらってるし♪」

「そうね、木下さんにはいつも我侂聞いてもらってるしね♪」

「今度はこつちが木下さんの我俣聞く番だね♪」

「水臭いよ木下さん♪」

などと暖かい言葉だった

「え？ な、なんで？ だってこれは私一人の我俣で皆に迷惑かけるのに…、なんで」

「それは優子の人徳あつての物だよ」

「愛子……」

愛子は私の近くに来ると耳元でこう言った

「優子は「先生に受けのいい優等生」のつもりで皆と接していたのかもしれないけどちやんと「木下優子」だったんだよ？ だって「先生に受けのいい優等生」なら先生の目に届く範囲だけで「優等生」を演じれば良かったけど優子はそうしなかった。一年の時

からいつもクラスの誰かを助けてたよね。皆そういう優子の姿をちゃんとみてたからなんだよ？」

ま、まずい。こう言われてなんか凄く嬉しすぎて泣きそう……

「協力してくれる皆のためにも絶対に負けられないね♪優子♪」

「……………ええ!!」

こうしてAクラスを一枚岩の結束に纏めることができCクラスとの戦争の準備が整った

第20話

秀吉Side

「やれやれ一体どうなるのかのう」

ワシらは今日Bクラスに宣戦布告をしBクラスと試召戦争を行なった。やはりBクラスともなると点数差も桁違いに上がり苦戦必死じやった。戦っている間にBクラス代表の根本の策略で教室内の設備や筆記用具を破壊され、また島田が敵に捕われるというハプニングもあつたが姫路の活躍や明久の機転(?)を利かすことで何とか窮地を脱し最初の目的である敵を教室内に押し込めることに成功はしたのじゃが：

最後の最後でまたしても根本の策略にまんまとハマってしまいBクラス、Cクラスとの二面戦争になってしまった。雄二にどうやら策があるようで明日その策を教えるようじゃが大丈夫じゃろうか？

気が重いまま家に帰ると丁度姉上が電話で誰かと話している最中じゃった

「……………もちろんです！ はい、ありがとうございます！」

そういうと姉上は受話器を元に戻した

「あ、秀吉おかえり」

「うむ、ただいまなのじゃ。 姉上今の電話なんだったのじゃ？」

「あ、ああ。 ちよつと頼んでたモノが今丁度出来たって連絡が入ったところだったの

よ

「ほう、そうじゃったのか」

「あ、夕飯まだ少し掛かりそうだから待ってなさいね」

「分かったのじゃ」

「そう言うワシは自分の部屋に向かった。少しでも勉強して明日の試召戦争でいい点数を取らねばのう」

秀吉 Side out

そして翌日

優子はFクラスの様子を見るためFクラスの前まで来ていた

「どうやらまだ戦争は再開してはいないようね。うん？」

教室内から話し声が聞こえたので耳を澄ませてみた

「……雄二よ、申し訳ないがその策はワシは手は貸せんのだ」

「やはりダメか？」

「確かにそれを行えばFクラスの危機を回避できるやもしれん。じゃがワシには出来ん」

うん？ 一体何の話？

「ワシは幼い頃から演劇に力を注いでおるのじゃが、昔それが原因で虐められていた頃があつたのじゃ」

「秀吉が虐められていた!? 本当なの秀吉!?!」

過去にそんなことがあつたとは思っていなかったようで驚きながらそう尋ねる吉井君。あのバカ一体何を……？

「うむ、じゃが姉上が色々と助けてくれて小学校の卒業式を堺にそのようなことはなくなつたがの。……姉上はこんなワシを今まで励まし支えてくれたのじゃ。そ

んな姉上を貶めるような真似はしたくないのじゃ、じゃからすまぬ雄二」

頭を下げる秀吉

「いや、謝るのはこっちのほうだ。濟まないさつき的事は忘れてくれ。……しかしだとするとCクラス対策はどうするべきか」

そうやって次なる策を考える坂本君。 それにしてもあのバカ……

嬉しいこと言ってくれるじゃない♪

「失礼するわね」

そうやってニヤケそうになりそうなのを抑えながら教室内に入ると戦争再開前なのかピリピリした空気が流れていた

「あ、姉上……」

「秀吉姉、一体何の用だ？」

さつきの話が聞かれたのではないかと気まぎくなる秀吉、こちらを探るような目で見ている坂本君

「まあそう警戒しないで。一つ伝えておきたい事があつてね」

「……なんだ？」

「私達AクラスはCクラスと試召戦争を行うことになったわ」

「な、なんだと!?! それは本当か!?!」

「まあデータ集めの為の模擬戦だけどね、学園長先生の要請の。あ、でも負けたら三ヶ月は宣戦布告の禁止はあるけどね」

まさに寝耳に水だったのか驚きを隠せないようだ

昨日家に学園長先生から電話が掛かってきてCクラスとの模擬戦が正式に決まったらしい。最初は難色を示したCクラスだったらしいが設備交換の件を出すと目の色変えて承諾したようだ

最後に学園長先生から「いくら自分達よりも下のクラスだからって油断して負けたら承知しないよ？必ず勝ちな、いいね？」と念を押されてたが……

とにかくこれによりCクラスは根本君の要請を却下しAクラスに矛先を変えた為、Fクラスは二面戦争の危機を回避できたと言うわけだ

「……とまあそんな訳だから。それじゃあ」

そう言つて立ち去ろうとすると

「待て。何故そのことを俺達に話す？」

「代表に頼まれたのよ。この話をすれば雄二の助けになるってね」

「…そうか」

「ちよつと待て、何故霧島翔子が坂本の事を知っている？まさか、坂本…貴様異端者か？異端者なんだな！ 全員！ ここに異端者がいるぞ!!」

近くにいた男子生徒がそう言うといきなり黒い覆面を付けると何故か吉井君や周りにいた男子も覆面を付けると各々武器を手に取り坂本君に襲いかかっていた

「異端者に制裁を!!」

「なっ!? そんなのあるわけねえだろうが!! っていうか戦争前に無駄な騒ぎ起こすんじゃないえええ!!」

「はあ……バカばっか」

逃げ回る坂本君とそれを追いかける覆面集団を見ながら私はFクラスを後にした

ね
とりあえずこれで一つ目の問題は解決した。後はもう一つのほうを何とかしないと

第21話

Fクラスを出ると私は歩きながらとある事に対しての対策を考えていた

それはこの戦争で防がなくてはいけない二つめ、根本君に奇襲を仕掛けるために吉井君がDクラスの壁に大穴を開けることである

勝つためとはいえ学園の教室の壁に穴を開けてしまったら元々問題児だらけで低い評判のFクラスの評判を益々下げることになり折角Fクラスの為に戦っている姫路さんの想いに泥を塗ることもなる

そうさせないためにも壁に穴を開けずに根本君を奇襲させるように事を運ばないといけない

となると……やっぱアレ以外ないか。私自信ないんだけどな（汗）

はあ……、敵のクラスを助けるためにここまで尽力するなんて私も同じ位お人好しかもしれないわね

そう思いながら私はある場所に向けて歩を早めた

明久Side

あの野郎、……ブチ殺す!!

僕は今にもあふれ出そうとしている怒気を抑えながら美波と共にDクラスの教室に向かっていた

今より少し前に見た姫路さんと根本君とのやり取りを見た僕は雄二に無理を言つて姫路さんを戦線から外して貰つた。これは戦力の低いFクラスにとつては自殺行為にほかならないがまだ雄二には策があるようでそれを認められた

しかしその代わり本来姫路さんがやる役目を僕がすることになった。与えられた任務はタイミングを見計らつて教室に立て籠つている根本君に攻撃を仕掛けること

入口をガチガチに固められ難攻不落のような城塞と化した教室にいる根本君に攻撃を仕掛けるのは至難の技だけどやるしかない！ いや！ やつてやる！！

そんな風に考えているうちにDクラスの教室にたどり着いていた

「ところでアキ、どうやって教室内にいる根本に攻撃を仕掛けるつもりなの？」

「うん、奇襲を仕掛けようと思う」

「奇襲!? あんな入口をガチガチに守られてる教室にいる根本に奇襲なんて無理よ!!」

「そうだね。正攻法では、ね。だからここに来んだよ？ 観察処分者の僕だからこそ出来る方法で奇襲を仕掛けるんだ」

「アキだから出来る方法？」

「そう。もうすぐ立会人として英語の遠藤先生が来てくれるように手配してもらって居るから召喚許可が出たら僕と戦うふりをして欲しいんだ」

「……………それで？」

「僕が美波の召喚獣を攻撃する振りをしてBクラスに繋がっているこの壁に攻撃を加えて破壊したらその足で根本君に奇襲攻撃を仕掛けるんだ」

「……………はあく、ホントアキは無茶苦茶なこと考えるわね。…分かったわ、協力してあげる。でもあんまり無茶しちゃダメだからね？」

「……うん。ありがとう美波」

ごめん、美波。今回ばかりは無茶でも何でも絶対に成功させなくちゃいけないからそれは守れないかもしれない……

それにしても遠藤先生遅いな。ここに来るように頼んでおいたはずなのに……

そう思っていると誰かの駆け足が聞こえてきて教室の扉が開いた。振り返るとそこには

「はあはあ……、どうやら間に合った！ ……ようじやな」

そこにいたのはなぜか女子生徒の制服を着た秀吉が居た

「秀吉？」

「木下？」

前線で指揮をとっているはずの秀吉が何でここに来ているんだろう？

「どうしたのよ木下？ アンタ確か前線で指揮をとっている筈でしょ？ いなくて大丈夫なの？！」

「あ、ああ。それは大丈夫なのじゃ。ところで遠藤先生はここには来ぬぞ？」

「ええええ!!? なんで!？」

「坂本が断ったのじゃ。坂本が策を思いついてのう」

「雄二が？」

「そうじゃ。お主が無茶せんようにワシに言付けを頼んだのじゃ」

「それで策つてのは？」

「うむ。まず島田にはこれを、明久にはこれとこれを渡しておくのじゃ」

そう言つて秀吉が渡してきたのは美波には緑のショートヘアーのカツラを僕には黒のロングヘアーのカツラに何故か女子生徒の制服が渡された

「え、えーと？ 秀吉？ これは？」

「うむ。二人にはこれらを付けてもらい他のクラスの女子生徒に化けてもらうのじゃ。そしてワシが姉上の振りをしてBクラスの代表と話があると云つて教室内に入り根本が油断した所を二人で奇襲、といった策じゃな」

「でもいいの秀吉？ あんなにお姉さんに迷惑掛けたくないって言っていたのに」

「大丈夫。……お主が心配することにはならぬ♪（ニツコリ♪）」

「う、うん。それならいいんだけど」

あ、あれ？　なんで秀吉の笑顔を見るとドキドキするんだろう？

「でもあの根本が引つ掛かるかしら？　それに見られた途端に戦闘を仕掛けられてもしたら」

「その点に関しては大丈夫じゃ。ちよつとした脅しをかければ大丈夫じゃ。それにこれもあるしの」

秀吉が取り出したのはあの学園長の直筆が入った封筒だった

「これ本物？」

「うむ。紛うこと無き本物じゃ！」

「よくこんな物手に入ったわね？」

「う、うむ。坂本がどこからか手に入れたのじやろう？　とにかく早くこれらを付けるのじゃ！　時間がないぞい」

「わ、わかったよ」

「OK♪」

それぞれカツラと僕が女子の制服を着るとあまり顔を見られないように俯きながら内心ドキドキしながらBクラスの教室に向かうと早速入口前で呼び止められた

「お前達ちよつと待て！　うちのクラスに何の用だ？」

「私達はAクラスの者よ。ちよつとBクラスの代表に用があるんだけど入ってもいいかしら。」

お姉さん演じる秀吉がそう言うのとBクラスの面々は怪しげにこちらを見てきた

「お前本当にAクラスの木下か？ 確か双子の弟がFクラスにいたはず」

や、ヤバイ……バレた!? と僕と美波は焦るが

「だったら私に戦闘申し込んでみる？ でも知ってるわよね？ 試召戦争で関係ない他のクラスに戦闘を仕掛けたらその時点で反則、即戦死あの西村先生がいる補習室に行される事に」

「グツ、それは……」

「私が秀吉でなければこの場にいる貴方達全員補習室送りになるわね？ そうなるとF

クラスが一斉に攻めて来るかもしれないわね。でも安心して証拠に用件である学園長先生から預かった手紙よ。ほら直筆のサインもあるでしょ？」

逆にこうして秀吉が強気に攻めたおかげでBクラスの面々に不安を植え付け危機を乗り切った

「では俺がその手紙を代表に渡しておこう」

そう言ってBクラスの一人が手紙を取ろうとするが

「ちよつと待って。それだけの用件のためにわざわざ試召戦争中に来たりしないわよ。緊急でAクラスとBクラスだけに伝えておきたい事があるらしいの」

「なんだその伝えておきたい事てのは？」

「ここでは言えないわ、他のクラスには他言無用らしいから。それにここで言えば聞かれる恐れがあるでしょ？ ほらFクラスにいるでしょ？ 盗聴とか得意そうな人物が」

「……Fクラスの土屋か」

どうやらムツツリーニの異名はBクラスにも伝わっているようだ

「だからBクラスの代表と会わせて欲しいの」

「お前が緊急の使いで来たのは分かったが後ろの二人はなんだ？」

うぐっ!? やっぱりこちらにも目を向けてきたか……

「ああ、この二人は私を心配してついてきてくれたのよ。こう言っちゃなんだけど貴方達の代表良くない噂しか聞かないから。だからこの二人も一緒にいいかしら？」

そう言うとBクラスの面々は自分達の代表を思い浮かべたのか納得した表情で頷いていた

「……代表に聞いてくるから少し待ってろ」

そう言つてBクラスの一人が教室に入つていった

待っている間何故か秀吉は何度も時計を見て時間を気にしていた。なにかあるのだろうか？

少しして入つていった一人が戻つて来て教室に入つてくるように言われた

教室に入るとBクラスに完備されていた冷暖房は作動していなかった。どうやらDクラスが約定通りBクラスの室外機を故障させたようで教室内は暑かつたためか教室の窓が空いていた

「試召戦争時にお供を連れてAクラスが一体何の用だ？」

中に入ると根本君が、そして根本君を守るように両側を近衛隊がいた

時刻は午後二時五十五分を示していた

「まずこの手紙を渡しておくわ」

近衛隊に手紙を渡し近衛隊が根本君に手渡し根本君が封を明け手紙を見ると表情が
変わった

「CクラスがAクラスと試召戦争だ!? 友香の奴一体何を考えている!？」

午後二時五十七分

そんな時Bクラスの一人が慌てて教室に入ってきた

「大変だ!! 代表!! Fクラスが本隊を率いて教室前まで来てる!!」

「ふん、大方戦況が好転しないからヤケを起こして前に出てきたんだろう。丁度良い、お
前から前線出て坂本の首を取ってこい!!」

根本君がそう言うとは半数以上の近衛隊が前線に出ていった

「それでAクラスとBクラスだけに伝えておきたい事ってなんなんだ？ 木下優子？」

まるでもう試召戦争に勝ったつもりで話を切り出す根本

「それは…」と秀吉が言いかけたその時だった

「木下さくん？ いますか？」

その場にいた皆が声のした方に視線を向けた先にはBクラスの入り口前にいる英語の遠藤先生がいた

「な、何で遠藤先生がここに？」

「どうやら私を探しているみたいね。ちよつと失礼するわね」

そう言つて秀吉は遠藤先生のほうに向かおうとする途中僕のほうを見てウインクし、僕はその意図を瞬時に理解すると黙つて頷いた

秀吉が遠藤先生と幾つか会話してそして……

時刻は午後三時を示した

秀吉との会話が終わると遠藤先生はBクラスに入つてくると

「試獣召喚の召喚を承認します！」

「なっ!？」

突然の事に一瞬Bクラスが啞然としたその隙を僕と美波は見逃さなかつた

「くたばれ!! 根本恭二!!」

僕と美波は被っていたカツラを脱ぐと嘩然としている根本君に戦闘を仕掛けるべく
駆け寄った

「お、お前らは、Fクラスの吉井に島田!!」

「遠藤先生!! Fクラスの島田がー」

「Bクラスの山本が受けます! 試獣召喚!」

「くっ! 近衛部隊か!!」

まだ教室内に残っていた近衛部隊がその行く手をふさぐ

「あ、あははは!! 残念だったな! お前らの奇襲は失敗だ!」

辛くも窓際のほうに逃れた根本君が取り繕うように笑う

確かに僕らの奇襲は失敗したけど根本君を近き近衛部隊から切り離れた時点で僕らの役割は果たせた

そんな時だった、根本君の後ろの窓から一本のロープが垂れ下がり二つの影がBクラスに入ってきたのは

二つの影はムツツリーニと鉄人だった

「……Fクラス、土屋康太」

「き、貴様……!!」

「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリーニイーーー!!!」

近衛部隊から切り離れた根本君に逃れる術はなかった

Fクラス 土屋康太

保健体育 441点

V S

Bクラス 根本恭二

保健体育 203点

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を撃破した

これによりBクラスとの決着がついた

激戦に勝利し上機嫌で教室に戻ると雄二といつもの制服姿に戻っている秀吉が何やら話し込んでいた

「なかなかニクいことしてくれるじゃないか雄二♪ まさか来ないと見せかけて時間をずらしてBクラスに遠藤先生を来させるなんてさ♪」

僕がそう言うと雄二は不思議そうな顔でこう言った

「なにいつてるんだ？ 俺はそんなこと全然知らんぞ？」

「……へ？だ、だって遠藤先生をBクラスに来るように言っただよね？ 手伝ってくれた秀吉もそう聞いたんでしょ？」

秀吉にそう聞くと信じられないことを秀吉は口にした

「何を言っておるのじゃ明久？ ワシはそのような事知らぬぞ？ あの時ワシは前線で指揮を取っておったからのう」

ええええ!! だったらあの時僕らと一緒にいたあの秀吉は……

「なかなか危なかったけど、私もやれば出来るじゃない♪」

そう言い上機嫌で優子は家路にっていた

第22話

FクラスがBクラスに試召戦争で勝利し二日が経った。原作通りならそろそろ坂本君がFクラスを中心メンバーを引き連れてうちのクラスに乗り込んで来るはず。その時の対策を考えておかないといけないなと思いい教室でその対応策を考えていると

「……………あ、あのさ？　優子？」

「うん？　どうかした？　愛子」

「その色眼鏡？　つとつかサングラス？　何でそんなモノ付けてるの？　なんか凄く度合いでろくに前見えてなさそうだけど？」

「……………ああ、これね。……………あるモノに備えてね」

「あるモノ？」

そう……、もうすぐ来るであろうアレに備えて。教室の外から「変態だ!!」という叫び声が聞こえると

「みんな!! 今すぐグランド側の窓際に視線移して!! 私がいいって言うまで戻しちゃうダメだからね?」

私がそう言ってしばらくしたその時だった、クラスのドアが開いたのは

「……Bクラス代表の根本だ。Aクラスの代表はいるか?」

女装姿の根本君登場

「なあっ?! なんて格好して来やがったんだ根本の奴!!」

「うう……嫌なの見ちゃった。今夜寝れないかも……」

「精神的ダメージは効果バツグンじゃねーか……オエ……」

運悪く振り返ってしまったクラスメイト達の阿鼻叫喚。それほど酷いものなのだろう……

原作読んでおいて良かったと心のそこから思った瞬間だった。あと度が高すぎてモザイクのように見えるサングラスを付けておいた事にも

「代表なら留守よ。代理として私が聞くわ。お、おととと」

私は見えにくい視界の中、つまずきなりそうになりながらも前に進み根本君の前に出た

「お前は!! 木下優子!! ……なのか?」

「ええ、そうだけど?」

「……なんでそんなグラサンみたいなもの掛けているんだ？」

アンタの女装姿見ない為だとは言えない……

「……ちよつとね。それでBクラスの代表がわざわざそんな格好して何の用かしら？」

「ぐっ!! 元はと言えば木下優子!! お前がFクラスと共謀していなければ!」

「一体何を言っているのかしら? 根本君。私はあの試召戦争の間ずっと教室で自習していたわよ?」

「嘘をつけ!俺は確かにこの目でお前を」

「だったらクラスの皆に聞いてみる? ねえ? 皆、私居たわよね?」

(愛)「うん、その間ボクと一緒に問題集やっていたよ♪」↑後ろを向いたまま答える

(久保)「あの時とある問題で木下さんに意見を聞いてみたのを覚えているよ」↑後を向いたまま答える

(佐藤)「わ、私は物理の問題で質問していました」↑後を向いたまま答える

(女子)「息抜きの時美味しいケーキ屋の事教えてもらったりしてたわね♪」↑後を向いたまま答える

(男子)「今度テストに出そうなヤマ教えてもらっていたなああの時は」↑後ろを向いたまま答える

etc etcと次から次へと出るクラスメイトの証言。まあそれはクラスの皆全員がグルだからなんだけどね♪

「とまあこの通り私にはアリバイがあるわ。大方うちの弟に見事に嵌められたんじゃないの?」

「グッ……ところで何故このクラス全員俺の方を見て話さない？」

「「そつちに向くことだけは断固断る!!」」

この時Aクラスは一つになっていた。まあ誰もあんな酷いもの見たくはないしね…

「く、くそ。BクラスはAクラスに対して戦争の用意がある!!それだけ代表に伝えておけ！」

そう言うと根本君は一目散に教室を出ていった

「やれやれ、やっと悪夢のような時間が終わったか」

サングラスを外して正常な視界に戻ると約三分の一のクラスメイトが凹んでいた。どうやら見てしまったようだ

「……そんなに酷かったのか？」

「ああ、ありや例もないくらいの酷いものだった……オエ……」

「ううう……今夜は魔されるよ（泣）」

「……ドンマイ」

見てしまったクラスメイトに対して慰めの言葉を書ける仲間達

今この状態で試召戦争されたら……うち負けるかも……

第23話

Aクラスに恐ろしい悪魔が訪れ、そして去ってからしばらくして坂本君達がうちのクラスにやってきた

「お邪魔するぞ、って何かあった、よな?……やっぱアレは少し破壊力有りすぎたか」

凹んでいるうちのクラスメイトを見回して坂本君が何か思い当たることがあったのか納得した様子でそう呟いていた

「ええ、かなり酷いモノが来たものでね。ところでFクラスを中心メンバー引き連れてうちに一体何か用? 坂本君」

「秀吉姉か。Bクラス戦では世話になったな」

「……一体何のことを言っているのか分からないわ。私はあの時教室内にいたんだか

ら」

「そうなのか。いや実はなうちのクラスの奴が秀吉にそっくりな奴を見たって言うてな。しかもそいつのおかげでBクラス戦に勝てた訳なんだが違うのか」

「この世には自分にそっくりなのが三人は居るっていう話らしいからきつとそっくりさんでも見たんでしょ」

「……まあそういうことにはしておこう。それで本題なんだが俺達FクラスはAクラスに對して決闘での試召戦争を申し込む！」

やはり原作通りそういう話になったか。さてこれをどう対応すべきか、だな……

「決闘、ね。それは一体誰と誰がやるのかしら？」

「姫路が出ると警戒しているのだろうか？安心してくれ出るのは俺だ。そして相手はAクラス代表だ！」

「ふうん、姫路さんではなくわざわざ代表である坂本君が？　しかも相手をうちの代表にえらぶとはね。うちの代表が学年トップの成績の持ち主であることを知らないはずないし……、代表に勝てる教科でもあるのかしら？　「確実に」勝てる奴を……」

「！……まあな」

一瞬だけど表情が険しくなったわね。となるとやはり原作と同じ歴史の年号か……

どうする？　このまま話を飲むか？　だが本当にその通りだとはまだ分からないし……

「……うちの代表が負けるなんて思えないけど万が一ということもあるから安易にはその案には乗れないわね」

「偉く慎重だな？　たかがFクラスの代表だぞ俺は」

「そのFクラスの代表だからこそ慎重になるのよ。Fクラスを格上のクラスを相手に勝

利に導いてきた貴方の計略と策謀にはFクラスだからという観念を捨てて警戒すべき人物だと私は思っているわ」

「そいつはまた過大評価どうも。……少し話が変わるがCクラスと戦ったんだろう？ どうだったんだ？」

「見ての通り設備は変わらずよ。まあ開始して30分くらいで終わったし」

データを取るためという建前からこの一戦の発端は非公式の扱いとなっているので噂ではCクラスがAクラスに挑んだということになっている

「そうか、やはりCクラスじゃ相手にならなかったか。……だったらBクラスならどうだ？」

「……そういう事。Bクラスに戦争の用意があると私達に知らせ私達が要件を飲まない場合はBクラスに攻めさせ私達が消耗したところにFクラスが攻めて来るって訳ね」

「さあそいつはどうかな？ チャンスがあれはうち以外にも狙ってくるクラスがあるかもな？」

それはDクラスそしてEクラスも参戦するかもしれないと言うわけか、……さすが神童と言われていただけの事はあるわね。つたくその才能をもっと違うことに使いなさいよね!!

「……一騎打ちの提案は飲めない。だけど五対五の代表戦だったら受けてもいいわ」

「代表戦か。ならその代わりにハンデとして教科はこちらで選ばせてもらう」

「う、うーん。それは……」

そのハンデに中々答えが出ないそんな時だった

「……その条件飲んでもいい」

振り返るといつの間にか代表が帰ってきていた

「代表帰ってきてたんだ。でもいいの？」

「うん。ただし条件がある」

「条件？」

「そう。それは……」

代表はうちのクラスに来ていた姫路さんを値踏みするように観察すると

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞くこと」

そう言うとFクラス側がいきなり騒ぎ始めた。まあ恐らく代表が同性愛者と言う噂を信じてその代表が姫路さんを見ていたものだから勘違いしたんでしょうね

「はあく、……じゃあこうしましょう？勝負内容は五つの内三つはそっちで決めて残り二つはこっちで決めさせて。それでどう？」

「まあそれが妥当だな。……わかった交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんの了承をとってないじゃないか！」

いや吉井君、うちの代表にその気ないから……

「心配するな。絶対に姫路には迷惑はかけない」

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「………わかった」

代表はそう言うのと坂本君に背を向けるとそのまま自分の席に戻っていった、何かを改めて決意した強い目をしたまま

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

交渉を終えFクラスがうちのクラスを後にした。Fクラスとの決戦がもうすぐ始まろうとしていた

第24話

Fクラスとの決戦がもう間もなく始まろうとしていた。そんな時私はとあるお願いを代表に頼んでいた

「……と言う訳だから難しいとは思うけど何とかかなりそう？代表」

「……うん、時間ぎりぎりまでやれば何とかかなる」

「本当?! なら代表は時間ぎりぎりまでそれに専念して。それまでは私が代表の代わりに指揮を取っておくから」

「……分かった。お願い優子」

そして時間が流れ決戦の時を迎えた

戦いの場はAクラスの教室で行われることになった。まあFクラスの教室では教室が余りにもオンボロなのでそこで戦えば旧校舎自体を破壊しかねないからだ

教室内を二つに分けAクラスとFクラスに対峙していた。そして中央には今回の戦いの見届け役として高橋先生がいた

「ではこれよりAクラスとFクラスの五対五の代表戦を行います。一回戦を始めます、選手前に」

「ではワシが出ようかの」

Fクラスからは秀吉が出てきた

「佐藤さん、お願いできる？」

「わかりました！」

そう言つて前に出ようとする佐藤さんを「佐藤さん！ ちょっと待つて！」と途中で呼び止めた

「ど、どうかしましたか？ 木下さん」

「あのね？ ちょっと頼みがあるんだけどいいかな？ 選択教科で英語をチョイスして欲しいんだけどいいかな？」

「はあ……？ 別に構いませんけど？」

「ごめん！ 今度美味しいケーキ奢るから！」

私は手を合わせて頭を下げた

「あはは、楽しみにしてますね。……では行つてきます！」

そう言つて真剣な眼差しで前が出る佐藤さん

A, Fの代表が教室中央に対峙し戦いの準備が出来た

「では戦いの選択科目は何にしますか？」

「英語をお願いします」

「よろしいですか？木下君」

「異存はないのじゃ」

「わかりました。では対戦科目「英語」了承します！」

高橋先生がそう宣言すると教室内に召喚獣を召喚するフィールドが発生した

「試獣召喚（サモン）！」

Aクラス 佐藤美穂

362点

V S

Fクラス 木下秀吉

84点

「では一回戦はじー」

「ちよつと待つて貰つても宜しいですか？ 高橋先生」

「どうかしましたか？ 優子さん」

「はい。ちよつと姉弟で話すことが出来ましたのですぐ済みますので宜しいですか？」
ニコニコ

「わかりました。ですが手短にお願いしますね」

「はい♪ ありがとうございます」

そう言うと笑顔で秀吉に向かう優子

「ひでよし♪ ちよくと聞きたいことがあるんだけどなく♪」ニコニコ

「な、なんじゃ？ あ、姉上」

「私新学期始まるとき言ったよね？ いくつかの教科Dクラスぐらいにしときなさいって。なのにこの点数は一体どういう事なのかな？ かな？」ニコニコ

（oooooooooooooooooooo
!!!!!!

ニコニコしているはずなのに圧倒的威圧感で迫る優子。それはこれで鈍など持つていればとある村にいる少女の風格十分なほどだったという

「あ、姉上……、これには、そ、その、色々ありまして……」ガタガタガタガタ
!!!!!!

「ひでよろしく♪ そこに正座なさい……」ギロリ!!

「ひゃ、ひゃいい!!!」すぐさま正座する秀吉

「全くもう〜!! 佐藤さんに頼んで対戦科目英語にしてもらってアンタの点数見てみればなんなのあの点数は」

「い、いやそれは、それに姉上はいくつかの教科とっておったし……。英語は良いかと」

「英語は必修科目じゃないの! それに演劇でも英語力は必要でしょうが! だから普段から努力を……」くどくどくどくどくどくどく

「は、はい……」シヨボくん

召喚獣を召喚した状態なので召喚獣も召喚者と同じくリンクして正座してシヨボく

んとしているといふシユールな光景になつていた

「……あのさ瑞希」

「な、なんですか？　美波ちゃん」

「うちら代表戦とは言え試召戦争してるのよね？」

「ええ……、そのはずですけど……」

「うちらが今までやってきた試召戦争ってさなんか殺伐とした空気でやってきたじゃない

い？　でもこの空気はさ……」

「ええ……、なんか隠してあった悪い点数のテストを見つかつてお母さんに怒られている図みたいで木下君には悪いですけどなんか和んじやいますよね」

「あ、あの優子さん？　そろそろいいですか？」

「あ、すみません高橋先生。そう言うことだからもう少し頑張るように！　いいわね？」
そう言つてAクラス陣内に戻る優子

「では改めて……、一回戦はじめ!!」

「はあく（しよんぼり）」

「え、えくと、攻撃してもいいのかな？ これ」

くどくどと説教を受けた直後に戦えと言われても秀吉のモチベーションが上がるはずも無くこの戦いはAクラスの勝利で終わった

Fクラス陣内

「皆、すまぬ。負けてしまったのじゃ……」

「き、気にしなくてもいいよ秀吉。ねえ？雄二」

「あ、ああ。あれはちよつとな……。まあその……。ドンマイだ秀吉」

「姉上に怒られてしまったのじゃ……。 (しょんぼり)」

「大丈夫よ木下。アンタのお姉さんもう怒ってないって」

「そうですよ木下君」

「……そうじゃろうか？」

その頃Aクラス陣内

「はあく、ちよつと強く叱りすぎたかな。でも強く言わないとアイツの為にもならな
いし！ でも言いすぎたかもしれなしいし……（しよんぼり）」

「あ、あはは。そんなに気にするんだつたら強く言わなきやいいのに」

実は姉のほうもしよんぼりしてたり

第25話

一回戦はAクラスが勝利し続いて二回戦が行われた

「二回戦を行います。各代表前に！」

高橋先生がそう言うとなそれぞれの代表が前に出た

「待つてて秀吉！ 秀吉の仇は僕が打つよ！」

そう言うて前に出たのは観察処分者であり学園一のバカ、吉井明久

そんな彼の対戦相手はと言うと

「君の相手はこの僕だ。吉井君♪」

久保利光、二年の学年次席である

「え？ 何これ……」

「お、おい！ もう久保が出てきたぞ!!」

「Aクラスの奴ら確実に勝ちを取りに来やがった!!」

いきなりの事に唾然とする吉井君と騒ぎ始めるFクラス。まあ二回戦でもう学年次席が出るとは誰も思っていないなかつただろう。無理もない、だって……

「な、なんで久保君が出てるの!？」

「久保は終盤に出すんじゃないのか!？」

Aクラスの面々も知らなかつたから（泣!!!）

「ちよ、ちよつと優子!! もういきなり久保君が出るってどういう事なの!？」

「い、いや、そのね? 実は…」

それはFクラスが交渉を終えAクラスを後にした直後まで遡る

「木下さん!!」

「うわ!?! ど、どうしたの? 久保君」

Fクラスが帰った途端もの凄い勢いで久保君が私の下にやってきた。そりやもう椅

子から転げ落ちそうな位に……

「代表戦でもし吉井君が出てきたら僕と当たらせて欲しいんだ！」

「ご、ごめんね久保君。久保君には重要な終盤当たりでお願いしたー」

「お願いだ木下さん！僕にとって重要な一戦なんだ！」

「で、でもね？ 久保君程の強力な戦力を序盤で出すというのは」

「木下さん!!」

目が本気だ……。そうだった。久保君、吉井君にほの字だったのすっかり忘れてた。うくん序盤で久保君を投入するのは原作とは異なる展開になるしそれは痛い点になる。ただけどこの様子じゃ説得は無理みたいだし……

「え、えくと。そ、それじゃあお願いできるかな？久保君」

「ありがとう木下さん！吉井君……、他の誰かの手によつて散らされる位なら僕の手で！」

最後に何やら危ないことを呟きながら久保君は戻つていった

「……とまあこんな事あつてね」

「な、なるほどね。でも何で久保君そこまで吉井君にこだわるんだろうね？」

愛にも色んな形があるつて事だよ愛子……

「では二回戦の選択科目は何にしますか？」

「吉井君、君は何がいいんだい？ 君の望む教科を選んであげるよ」

「……随分余裕だね久保君。でも今回はその提案に甘えさせてもらうよ！」

これでうちのクラスの選択権は無くなるわけか。この選択が後で響かなければいいけど……

「それじゃあ、日本史でお願いするよ」

「分かったよ。高橋先生！ こちらの希望で日本史でお願いします！」

「分かりました。対戦科目「日本史」了承します！」

「「試獣召喚（サモン）！」」

Aクラス 久保利光

396点

V S

Fクラス 吉井明久

68点

この点数の差を見てAクラスの面々は久保君の勝利を確信していた

だが……

「おい!? なんだ!? この泥仕合は!?!」

「何やってるんだ! 久保! 早くケリをつけちまえ!」

直ぐに決着が着くと思われていた勝負はAクラスの予想を裏切り長期戦に入っていた

Aクラスの大半は久保君が遊んでいると思っ
ているのだろうが当の本人からはそんな
様子は一切見られなかった

「ハッ!!」

「おっと!」

鋭い一撃を繰り出すも紙一重で避けられてしま
う久保君。そんな久保君を遊んでい
るどころか焦っている様に私には見えた。け
して久保君の召喚獣の攻撃が遅いわけ
はない、それを上回るくらいに吉井君の召
喚獣の動きが早いのだ

これが観察処分によって鍛えられた召喚
獣の速さなのか。これは不味いことになる
かもしれない……

それからしばらくする頃にはあんだけあ
った差は見る影もなかった

Aクラス 久保利光

89点

V S

Fクラス 吉井明久

68点

久保君は吉井君の今までの攻撃パターンを解析し何とか反撃に転じようとするがそれでも吉井君の召喚獣のスピードに付いて来れずついに……

「くっ！そこだ!!」

「甘っ!!」

「っ、しまっ」

攻撃を読まれ逆にカウンターを貰ってしまった久保君の召喚獣は大きく飛ばされそして点数が0になり消滅した

「……、ハッ！　こ、この勝負、勝者Fクラス」

目の前で起こった事に戸惑いながら高橋先生がそう宣言すると教室内で響めきと歓声が鳴り響いた

Fクラスにとっては奇跡が、Aクラスにとっては悪夢が起こった瞬間だった

第26話

二回戦は久保の敗北というまさかの結果にAクラスに動揺が広がっていた

「学年次席の久保が負けるなんて……。もしかしたら俺達ヤバイんじゃない？」

「観察処分者が勝つなんて、そんなの事あっていいのか……」

「まさかこのまま負ける、なんて事ない……。よね？」

目の前で起きたことを受け入れない者、不安を抱く者と動揺は様々であった

「やっぱり皆かなり動揺してるみたいだね。……。まあボクもその一人なんだけどね」

クラスの皆と同様に不安の色を隠せない愛子が隣の優子を見ると皆とは違い冷静にこの状況を見ていた

そしてパン!!と手を鳴らし皆の視線を集めた

「はい！ 起こってしまった事を今更嘆いても始まらないわ。それに今回の敗戦はある意味仕方なかったと思う」

「仕方なかった？ どういう事？」

「まず第一に操作性の熟練度。こちらはCクラス戦で操作性を磨けたけれど毎日教師の雑用で召喚獣の操作性を飛躍的に上げた向こうとでは差がありすぎた事。もう一つは……、その……、なんとというか個人の相性の問題？」

「個人の相性？」

「え、えくと、その、一方的な愛情故に？ みたいな？」

「「??？」」

「と、とにかく！ この敗戦は相手の力を甘く見ていた私にも責任があるわ。ごめんなさい。でもこれで私達が負けた訳じゃないわ！ 次の戦いこそが重要だしね」

「どういう事？ 優子」

「恐らくだけど二回戦までの戦い、坂本君は勝負を捨てて私達が持つてる選択権を消費させることが目的だったと思う。勝てれば儲けもの程度にね」

「そして今、坂本君の読み通りに事は動いていると……。次はどう出ると読んでいるんだい？ 木下さん」

勝利に湧くFクラスを横目で見ながら久保君が尋ねてきた

「恐らく次に出てきそうなのは、一人目は皆も知ってる姫路さん。彼女は事実上Fクラスの最高戦力な訳だしね。そしてもう一人は土屋君、彼は殆どの教科は私達の足元にも及ばないけどただ一つだけ保健体育に関しては私達と同じもしくはそれ以上の点数の

持ってるわ」

「へえ、噂には聞いていたけどそんなに凄いな。ムツツリー二君。でもボクには及ばないと思うけどな。なんせボクは実践派だからさ」

「……召喚獣対決に実践も何もありません。後あまり自信過剰になっちゃダメよ？見たでしょう？二回戦の戦いを」

「……そうだね。うん、分かった。相手を甘く見ず対等それかそれ以上と考えて当たるよ」

「ええ、お願いよ。あ、それと女の子が実践とかあまり言わないの。勘違いして変なのが来たりとかしたらどうするのよ？分かった？」

「えへへ。ごめんなさい、気をつけるよお母さん♪」

「お母さん言うな」

そう言って愛子の頭を軽く叩く優子。こんな二人のやりとりに笑いが起こり周りの空気が穏やかなものになり最初にあった悲愴感のようなものはもうなかった

第27話

「それでは三回戦を行います。各代表前へ!!」

高橋先生がそう言うのとFクラスからは土屋が出てきた。どうやら原作通りに事は動いているようだ

「さて、それじゃあそろそろボクの出番かな」

「ちよい待ち。愛子、もそつと」

そうやって私は手招きして前に出ようとする愛子を呼び止めた

「ん？ どうしたの？ 優子」

「ちよつとアドバイスがあるのよ」

「アドバイス？」

「では選択科目は保健体育で構いませんか？二人とも」

「……異議なし」

「ボクも問題ありません」

「それでは三回戦、対戦科目保健体育始め!!」

愛子Side

（全く、優子も無茶なこと言ってくれよね。しばらく防戦に徹しろってこっちは直撃食らわないようにするのがやつとなのにさ）

三回戦が始まる前に優子が愛子にアドバイスしたのは一つは最初は防戦に徹し相手の召喚獣の動きを見ること。愛子は最初は土屋は自分と同じ位と警戒をしその考えには賛同していたのだが……

「試獣召喚（サモン）!!」

「なっ!?!」

A クラス工藤愛子 4 4 6 点

V S

Fクラス土屋康太572点

これを表示された途端愛子に動揺が走ってしまった

そんな動揺している所を突かれる形で土屋の猛攻をうけた。土屋の召喚獣のスピードは自身の予測を大きく上回るもので苦戦強いられていた

愛子は何度か土屋の召喚獣の攻撃に合わせカウンターを試みてはみたが自身の武器が大きい斧がために動きが大振りになり回避されやすく、すぐ後ろに飛んで間合いを取られていた

(このままだとこっちの動きに慣れられて不味いことになるね……。しかも今まで一度も腕輪を使ってきてないし、相変わらず攻撃のスピード落ないと状況は悪くなる一方なんだけど。えーと、確か優子の二つ目のアドバイスは確か……)

「いい？ 防戦に徹していれば必ず向こうは腕輪を使って決着を着けようとしてくるはずよ」

「腕輪？　ムッツリーニ君の保健体育の点数は高い点数とはボクも予想してたけどまさか腕輪が付く位なモノとはね。まあ当然か、Bクラスの代表倒す位なんだしそれくらいないとボクも張り合えないしね。それでどんな能力なの？　ムッツリーニ君の」

「「加速」よ。とんでもないスピードで移動して敵を倒す、まあスピードに特化した召喚獣なら予想できるモノではあるけどね」

「ふくんそんな能力なんだ。しかしよくそんな情報知ってたね優子」

「え!?　そ、それはほら？　あれよ。DクラスやBクラスの時にそんなの見たって言う目撃情報があったのよ！うん」

「そ、そうなの？」

「そうなの!!」

「わ、分かったよ。それでもう一つのアドバイスのほうは何なの？」

「もう一つは土屋君の召喚獣に付いている腕輪、その腕輪が光ったら即武器を盾代わりに前に構える事。上手く防ぐ事ができればその瞬間勝機が生まれるはずよ。まあ愛子ならその時になればどうすればいいか分かるはずだから」

(……なくんてなこと言ってたっけ。まるで事前にムツツリーニ君が腕輪使うところ見てるようなアドバイスだったけど優子も無茶言うよね。相手の腕輪が光ったら即武器を盾として構えろってそれってあの早い攻撃を防ぎながら尚且つ腕輪の反応にも着目しておけって事でしょ?)

ガン!!ガガガガ!!

重なり合う刃、飛び交う斬撃音

「クッ!!」

（ホント無茶言ってくるよね。……でもまあ防戦に徹していたおかげでこっちも向こうの動きに目が慣れてきたし、それにこのままだといずれジリ貧になってやられちゃうし……ならば！）

グツと武器の大斧を短く持ち直して構えを取る愛子の召喚獣

（一か八か賭けてみますか!!）

そして再び訪れる刃が交じ合う音のみが支配する刻

そんな中で放たれた愛子のとある一撃が事態を急速に展開させる

それは反撃で放たれた一撃であったがその一撃は今まで放ったものとは一回り大振りですりで相手につけ入れられるモノだった

そんな隙を土屋が見逃すはずも無く後ろに回避した瞬間、付けていた腕輪が光ると一瞬召喚獣の姿がブレたと思った次の瞬間には愛子の召喚獣の懐に迫らんとする鋭き刃

と化していた

愛子との距離がゼロになった瞬間大きな衝撃音と共に強い突風が教室内を駆け回った

「ど、どうなったんだ!?! 決まったのか?」

「決まったに決まってるだろう!! 俺達Fクラスの二連勝だ!!」

「おおおおおおお!!!」

勝利を確信するFクラスの面々

だが……

「やだなく、まだ決め付けてもらっちゃ困るよ?」

!!!!!!!

その声を聞き視線を声がした方に向けるとその先にはぎりぎりのところで土屋の刃を大斧で防いでいる愛子の召喚獣の姿がそこにあつた

「結構無茶な体勢からだつたけど何とか間に合つて良かったよ♪」

「クッ!」

土屋は奇襲を防がれてしまったので一度間合を開こうと召喚獣を動かそうとするが

「なっ!?! う、動かない!?!」

「あく、そういえばまだ言つてなかつたよね? ボクの腕輪の効果」

この勝負の勝者が決した瞬間だった

第28話

「勝者！Aクラス 工藤愛子！」

おおおおおおお！！！！

高橋先生がそう宣言するとAクラスから歓声が上がった

「やったね！工藤さん！！」

「まさかあの点数差の上での劣勢から逆転するなんて凄いよ！」

「ナイスだよ！工藤さん！」

「愛してます！工藤さん！」

「あ、あはは。どうもどうも♪ まあちよつと運が良かったただけだよ」

クラスの下に戻るとクラスメイト一斉に送られる賞賛の声に少し照れながらこう答

える愛子

「これでうちのクラスが大手だな！　次で決まりだぜ！」

「ああ！　もう貰ったも同然だな！」

愛子の勝利に浮き足立つAクラスの面々、だが……

「うーん。でもそう簡単には行かないかもしれないよ？」

「え？」

愛子が見ている方角にクラスの皆がその方角に視線を移すとそこには

真剣な面持ちでこちらを見ている姫路さんの姿がそこにあった

「姫路……。そうかFクラスにはまだ姫路がいたんだよな……」

そのことを再確認するとさつきまでの歓声はピタリとやんだ

そうなるのも仕方がないのかもしれない。なんせ入学して最初のテストで学年二位の成績を叩き出し尚且つ常に上位一桁台にいる常連のそんな彼女相手に勝つのはかなり難しい事を誰もが知っているからだ

「後うちのメンバーで残っているのは大将の霧島さんと後は……」

「木下さんだけだよな？」

「でも霧島さんは大将で出れないから実情出れるのは木下さん……」

クラスの中からそんな会話がでてクラスの面々が優子の姿を探してみると代表の霧島となにやら話し込んでいる優子の姿を見つけた

「代表、今どのくらいまで進んでる？」

「……今のところ八割位は終わってる。あと少し時間が欲しい」

「あと二割か……。わかった！ 何とかして時間稼いで見るから代表はこのまま続けて」

「………わかった。何とか間に合うようやってみる」

「頼んだわよ！ 代表！」

そう言うと優子はクラスの皆の下に戻り、翔子は静かに目を閉じた

「あ、お帰り優子。代表と何話してたの？」

「うん？ああ、ちよつと頼みことをね。ところでどうしたの？　なんかクラスの雰囲気重いんだけど？」

「ああ、あれだよあれ」

クラスの一人にそう言われて視線を向けるとそこにはFクラス最高戦力はいる訳で

「……なるほど。まあ愛子の相手が土屋君と分かった時点で判りきったことだったから驚かなかったけどね」

「とこころでさ。……現実、姫路さん相手に勝算あるの？」

クラスの女子が不安そうに聞いてきた

「そうだね、うくん結構厳しいかもね」

「そう、やっぱり厳しいよね……」

「皆暗くなってるみたいだけど私が負けてもまだ負けた訳じゃないのよ？ それに私の後に控えている人物忘れちゃったの？」

「え？ 後って……」

そうやって皆の視線が一点に集中した

「代表!!!」

「そういうこと。例えば私が負けたとしても代表が勝てば問題なし。代表が負けるなんて

これぼっちも思っていないわ。みんなだつてそうでしょ？」

「そうだよな！　こっちにはまだ代表がいるもんな！」

「ええ！うちのクラスの勝利は確實よね！」

再び歓喜に沸き立つクラス一同。そんな中……

（皆にはああ言ったけどどけどど負けるつもりは更々ないわ。入学して初めてのテストで完膚なきに見せつけられたあの点数差、私の目標の中の一人。あれからかなり努力したつもりだけど果たして何処まで迫ることができたのか……。　試させてもらおうわよ！姫路さん!!）

優子は一人静かに闘志を燃やしていた

木下姉弟の日常（休日編） その2

「にや、にやにいいいいいいいい!?!」

とある休日の朝一番に木下家の中を優子の叫びが轟いた

「な、何事なのじゃ姉上!?!」

突然の叫び声に二階に居た秀吉は驚き一階に居た姉の下に駆けつけた

「これよ!　これ!」

来てみると叫びの主は一枚の広告を指差していた

「チラシ?　ふむ。これはよく姉上が買い物に行っておるデパートのチラシじゃのう。
えーとなになに?　店舗リニューアルの為本日限りの半額セール実施中?」

そのチラシに載っていたのはデパートの中にある洋服店が店舗をリニューアルする為しばらく休みに入るのでリニューアル前に半額セールを実施したのだ

「ここ可愛いのが一杯あったんだけど値段が少し厳しくてね。だからこんなチャンスは滅多にないのよ！」

「は、はあ」

「秀吉！ 今日予定ないわよね？」

「え？ 今日演技の参考にと劇のDVDを見ようかー」

「な・い・わ・よ・ね？」（ニッコリだけどとつもない威圧感）

「は、はい！」

「よろしい♪じゃあ急いで支度するわよ♪」

「とほほ……」

デパート内

「よ、良かった〜♪ まだあまり人が来てないわね♪」

「はあはあはあ……。そ、そりゃあれだけ早く急いでくれば少ないじやろうに」

急いで支度しバスでデパート近くに着くと後は猛スピードでここまで走ってきたのだ

「仕方ないじゃない。急がないと可愛いのはすぐなくなるんだから！」

「あ、あはは。まあ姉上は行つてくると良いのじゃ、ワシは店の外で待つておるのじゃ」

「何言つてるのよ？ アンタも一緒に来てよ？ 色々と感想聞きたいしき、ダメ？」

上目使いでお願いする優子。まあそうされては男心にWEAK！する訳で……

「う……。ま、まあワシの感想で良いのなら」

「えへへ、ありがとう♪それじゃ行きましようか！」

そうして二人は店内に入った

「じゃーん！　こんなのはどうかな？」

さつそく何点か選び試着室に行き着替えた一着目は背中が大胆にレースでデザインされたセクシーなタンクトップだった

原作とは違いこの優子は女性の象徴が、その、大きい訳で。まあ山と山に間が出来るわけで……

「い、いかんのじゃ!!　破廉恥なのじゃ!?!」

「え？　確かに背中がセクシーな所もあるけどそんな破廉恥だなんて」

「と、とにかくダメなものはダメなのじゃ!　却下なのじゃ!」

「わ、分かったわよ。それじゃ次のやつ着るわね」

そう言うと優子は試着室に戻った

「こういうのだったらどうかかな？」

しばらくして次に出てきたのは上は来た時のやつだが下がちよつと短めのショートパンツになっていた

「なっ!?」 短すぎなのじゃ!! そんなの履いて外に出たら他の男共の視線の的になるのじゃ!! だから却下じゃ!!」

「い、いやこれ位普通でしょう?」

「それでもダメなものはダメなのじゃ!」

「これもダメなの？ はあく、分かったわよ。それじゃあまた別の奴着てくるわね」

澁々ながら試着室に戻りしばらくして再び試着室のカーテンが開いた

「今度はどうよ？」

次に優子が着てきたのはさつきほどの二点とは違い露出を控えた白のワンピースだった

「……………」

「秀吉？」

「!! よ、良いのではないかのう？」

「何で顔真っ赤になつてんのアンタ？」

「な、なんでもないのでしょ！」

「ふうん、まあいいや。それじゃコレを買おうとしますか」

「え？ それで良かったのかの？ 自分で言うのも何じゃが服のセンスなぞワシはわからないのじゃが？」

「別にセンスがないとかそういうのは別にいいのよ。アンタが選んでくれたのがポイントなんだから」

「!! (再び顔真っ赤)」

「どうしたのよ？ また真っ赤になって？ 風邪でもひいたの？」

「だ、大丈夫じゃ!! それより早くレジ行って清算してくるのじゃ」

「う、うん。分かった」

秀吉のおかしな態度に首を傾げながら優子はレジへと向かっていった

レジで清算を済ませ二人はブラブラとデパート内を見て歩いているとふいに後ろから声を掛けられた

「キミ達ちよつといいかな？」

「はい？」

振り返るとそこには40代位の困った表情をしているカメラマンらしき男性と20代位の若い女性がいた

「えーと、私達に何か御用でしょうか？」

「驚かせてすまない。キミ達これから何か予定とかあるかな？」

「い、いえ。適当にブラブラしていただけですけど？」

「そうか！……突然こんなことを言っけて申し訳ないんだがお二人にモデルを頼めないだろうか？」

「モデル!？」

いきなりの事に驚いていると隣にいた若い女性が申し訳なさそうに話しかけてきた

「私達はデパートの商品カタログの写真を撮っている者なのですが今日夏の商戦に向けて姉妹の浴衣の写真を取る予定だったのでモデルの姉妹が突然体調崩してしまつて来れなくなつてしまつて。今日中に撮らないといけないのと途方にくれていた時に」

「私達を見かけた、と？」

「そう！ ちゃんとお給料も出すから助けると思ってた引き受けてくれないかね？ この通り！」

そう言うのと二人は手を合わせて頭を下げてきた

「……だつてさ。どうする秀吉？」

「ここまでお願いされて見捨てる事ようなことは出来んしもう」

「そ、それじゃあ!!」

「ええ、いいですよ」

「おおお!! ありがとう!! 本当にありがとう!!」

そう言うのと私達の手を握り頭を下げまくるカメラマンのおじさん。相当焦ってたんだな……

その後私達はデパート内にあるスタジオで浴衣の撮影を行なった。浴衣と言っても何種類もあり撮影が終わる頃には外は夜になっていた

「突然のことですらどうなることやらと思ったけど何とか撮影上手くいって良かったわね」
「そうじゃのう。お給料貰えた上に浴衣まで貰えたからのう」

撮影が終わった時に丁度デパートの関係者の人が来て依頼を受けてくれたお礼にと浴衣を一着ずつプレゼントしてくれたのだ。その為今私達の服装は浴衣のままである

「そういえばカメラマンの人達や関係者の人達アンタが男だって知った時かなり驚いたわね」

あれはかなりの驚きぶりだった。まあ無理はないわね……

「ううう……。やはり少しでも早く男らしくなりたいのじゃ」

「あはは。ところでさ今日は無理して付いてきて貰って悪かったわね」

「ん？別にいいのじゃ。楽しかったしの♪」

「そつか……。よし！ 今晚はお礼にお給料も貰ったし私が奢るから何か食べに行くわよー！」

「え!?! この格好で？」

「今日はちよつと暑いし丁度いいじゃない！ それに今日一日は私達は「姉妹」なんだから！ それじゃあ行くわよ！ 付いてきなさい！ 妹よ！」

「ワシは弟じゃ！ つて待つのじゃ姉上〜!!」

こうして「姉妹」は街の中へと消えて行ったのだつた

第30話

「これより第四回戦を始めます！ 各代表は前に！」

「Fクラスから私、姫路瑞希が出ます！」

「Aクラス、木下優子出ます」

高橋先生にそう言われると後がないFクラスは切り札の姫路さんが、Aクラスからは私が出た

私の前方にいる真剣な表情の彼女の目から死に物狂いで勝ちに行くという強い意思の現れのようなものを感じた

その目に思わず後ずさりしてしまいそうになったが何とか心を落ち着かせ再び彼女に視線を合わせた

落ち着いてよく見ると彼女が何だか気負い立ってるように見えた

まあこうなるのも無理はないと思った。自分が負けたら後がない上にクラスの周りから自分に掛けられた期待、そんな状況でこうなるなと言うのが無茶というものだ

「対戦科目は何にしますか？」

「総合科目でお願いします！」

「木下さん宜しいですか？」

「構いません」

「では対戦科目 総合科目、始め！」

「試獣召喚!!」

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4409点

V
S

Aクラス 木下優子

総合科目 4102点

おおおおお!!!

歓声は両クラスから上がったものだった

「ま、マジかよ?」

「二人揃って4000点超えてって姫路は凄いのは知ってたけど秀吉の姉って実は凄かったのか?」

「だがそれでも姫路との差は約300点差。やはり厳しいか……」

沸いてくる驚愕、歓声、溜息

しかし優子本人は自身と姫路との差が約300点付けられた事実を突きつけられても一切動揺の素振りすら見せなかった

「行きますよ！ 木下さん!!」

「ええ！ 最初から飛ばすわよ!!」

自分達の周りで起きている喧騒を他所に教室中央で二人は対峙した

ここで二人の召喚獣の武装を説明しておこう

姫路の召喚獣の武装は西洋鎧に背丈の倍くらいの大剣を装備していた

一方の優子の召喚獣は蒼色のチャイナドレスを動きやすいように加工した服に武器は少し大きめのピストルクロスボウが握られていた

「ハッ！」

素早い攻撃で仕掛ける姫路

大剣と言うと重量級な武器に思えるこれを軽々と扱う姫路の召喚獣

一方優子の召喚獣はその攻撃を素早く後ろに飛んで回避しながら姫路の召喚獣目掛けて矢を数発撃ち込んだ

姫路はそれを大剣でひと振りでそれらを防いだ

いきなり始まった攻防に周りは静まり返っていた

そして……

おおおおおおお
!!!!!!

再び巻き起こる歓声

こうして勝負を決するかもしれない第四回戦のスタートが切つて落とされた

おおおおおお
!!!!

いきなり始まった攻防に周りから再び歓声が巻き起こった

そんな歓声の中何事も無かつたかのように武器を構える両者。だが既に変化は起こっていた

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4379点

V S

Aクラス 木下優子

総合科目 4052点

無傷と思われたあの攻防の中お互いにダメージを受けていたのだ

姫路 S i e d

全部防いだと思ったのに被弾してたなんて……

姫路はこちらに飛んできた矢を全て弾き飛ばし防ぎ切ったと思っていた。しかし
実は優子は撃ち込んだ数発の矢それぞれを少しずつ軌道を変えて撃っていた為そのう
ちの一つが大剣の死角に隠れて姫路の召喚獣に被弾していたのだ

もつと集中しなくちゃ！ 少しでも気を抜くとやられる！

姫路はそう自分に言い聞かせると更に気合を入れて召喚獣に武器を構えさせた

一方優子のほうはと言うと

優子 Side

避けたと思ったんだけどまさかダメージ貰ってたとはね

完璧なタイミングで後方に回避したと優子は思っていた。だが実際は姫路の大剣の先が僅かに優子の召喚獣を捉えていたのだ

僅かに当たただけで50点持っていくってどんだけの威力なのよあの太剣……。とにかくアレを真面に受けたらシヤレにはならないって訳か。……全くトンでもないのを相手に戦ってるわね私

改めて相手の攻撃力の大きさを再認識した優子は視線を相手の召喚獣に合わせると静かに武器を構えさせた

対峙してお互い相手を見たまましばらく動かなかったが今度は優子が仕掛けた

「いつけええええ!!」

姫路の召喚獣に矢を打ち込みながら姫路の召喚獣に向かって優子の召喚獣が走り出す!

「えええ!? 姫路さん相手に接近戦挑むの!? 無茶だつて! 優子!!」

優子のこの行動に愛子が思わず声を上げた。本来遠距離で戦う武器で接近戦を行うおうとしているのだから無理もなかった

迎え撃つ姫路は今度は振り払う事はせず大剣を盾にその攻撃を防ぐ事に集中し一歩も動けなかった

「……………」

だが目線は鋭く優子の召喚獣を捉えていた

そして相手が十分に自分の間合いに入り込んだ瞬間

「そっ!!」

大剣を横にし切り込んだ

が……

そこには優子の召喚獣の姿はなかった

「えっ!?! いない!?!」

何処に行ったか探していると地面に黒い影が

慌てて上を向くと上に逃げていた優子の召喚獣が横になっていて大剣の上に着地すると今度はそれを踏み台代わりにし後ろに回り込むように飛び空中から空きの姫路の

召喚獣の背中に矢を数発撃ち込んだ

「クッ!？」

無理な体勢から何とか防御しようとするが間に合わず真面にダメージを貰ってしまつた姫路

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4207点

VS

Aクラス 木下優子

総合科目 4052点

「木下さん、強いです。でも……」

そう言つて武器を構えなおすと

「私はFクラスの皆の為にも負けられないんです！」

優子の召喚獣目掛けて一直線に迫った

「は、速い!?!」

いきなりのスピードに優子は慌てて矢で迎撃しようとしたその時だった

ドオオオオオン
!!!!!!!

「なっ!?!」

姫路が地面に向かって大剣を振り下ろしたのだ。そのせいで優子の前方は煙幕が起き狙いが定まらなくなってしまった

「上? 右? 左? どっち!?! …… ええい! 上!?!」

やぶれかぶれで上をみるがそこには姫路の召喚獣の姿はなく

「貰いました!!!」

振り替えると大剣が優子の召喚獣に迫っていた

第31話

「貰いました!!!
!!!」

振り替えると大剣が優子の召喚獣に迫っていた

「クッ!!」

回避は無理と判断した優子は召喚獣にピストルクロスボウを縦に持ち変えさせ盾代わりにしたが……

ドオオオオオンンン
!!!!!!

物凄い衝撃音と共に優子の召喚獣が吹き飛ばさせていた。しかも

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4207点

V S

Aクラス 木下優子

総合科目 3841点

ガードしたにも関わらずダメージを受けていたのだ

「ガードしたのにそれでもダメージ貰ったの!? ったく!! ホント相性が悪いっいたらありやしない!」

何とか自分の召喚獣の得意な間合いまで離れようとするがそうさせまいと姫路の召喚獣が間合いを狭めながら猛攻を仕掛けてきた

ガードしてはダメと重い極力回避に努めこれ以上離されまいとする優子だがやはり所々回避が間に合わずガードしては飛ばされる場面が何度か続き……

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4207点

V S

Aクラス 木下優子

総合科目 3168点

ついに千点差付けられてしまった

「やはり姫路相手じゃ分が悪いか……」

「よくやったよ木下さんは。もうここは負けて代表に任せようよ」

などとAクラス内からこんな発言が飛び出し始めAクラスに諦めムードが流れようとしていた

「諦めるにはまだ早いんじゃないかな？」

「工藤さん？」

「ああ見えて優子結構負けず嫌いな子なんだよ？ よく見てみてよ優子の目」

愛子に言われた方向に視線を向けるとそこには千点差付けられても戦意を失わずにしっかりと相手を見ている目をした優子の姿があつた

「あの目、何か考えている時の目だよ。 まだ優子はこの勝負終わらせる気はないみたいだよ？」

愛子は自信満々にそう言った。 自信満々に言われた本人はと言うと……

優子 Side

攻撃早っ!? ああ……もう諦めようかな…… (泣)

実は結構泣きそうだったりする……

ああ、でも時間稼がないといけないし腕輪も使わずに負けるのも何か癪だし。……
それにやっとなと遠くて見えなかった背中が手の届くところをまできたんだからこのままや
られっぱなしじゃ嫌だしね!

となるとこの状況を変えるにはやっぱり相手に強力な一撃を入れて流れを変えるし
かないか……

でもこっちは今防戦一方の手一杯で離れて攻撃させてくれないときてる。そうなる
と離れずに攻撃となるとカウンター、しかも必ず当たる必中のやつを……

だが相手は速いから当てるとなると相手の意表を付くようなやつじゃないと。でもそんなのあるの？ ええい！ 何か在るはずよ！ 考えろ！私！

何か手はないかと思案していて集中力が欠けてしまったのか姫路の召喚獣から一瞬目を離してしまった

それが最大の危機を迎えるハメになった

「優子!!!」

「!!」

愛子の声に気が付くと大剣が自身の召喚獣の目の前に迫っていた

「くっ!?、あ、あれ!?」バタン!!

「ハッ!!」

「う、うわわ!!」

横から迫る刃に何とか頭一つ後ろに急いで下げた為体勢を崩して転んでしまい大剣で上から串刺しになりそうになったが横に転がり急いで立ち上がった

危ない危ない、考えてたらやられる所だったわ。でも今の感じ確か以前秀吉の部屋にあつた漫画に……

ん？ あ！ あつた！ とびっきりのカウンター！ 正直成功率メチャクチャ低い練習なし、本番一発勝負だけこのままずるずる行けばどちらにしる負けるんだし……

一か八か賭けてみますか！

そう決めると優子は召喚獣に武器を姫路の召喚獣に向けたまま後ろ歩きで離れる動きを見せた

「やっせません!!」

それを阻止しようと迫る姫路の召喚獣。それを迎撃するべく一斉に数発の矢を打ち込むが回避されその距離はどんどん狭まっていく

そしてもう一度優子が矢を放つがそれを横に回避し遂に目の前まで接近し

「もう逃しません!!」

回避した勢いそのまま大剣を横にし切りかかりそれは優子の召喚獣の首元に迫っていた

このタイミングならガードは無理、姫路はそう思いこの一撃に勝利を確信していた。次の瞬間には自分の武器が相手を捉え消し去る瞬間を

だが……

「え？」

次に姫路の目に移った光景は大剣が虚しく空を斬るものだった。それは自身にはスローモーションに見えた

なら相手は何処に!? そう考えた姫路の目が下を向き捉えたのはこちらをギロりと

捉える視線

それを見た次の瞬間だった

二体の召喚獣の間で爆風と爆音が起き自身の召喚獣が後方に吹き飛ばされる光景が映ったのは

第32話

ドオオオオオオオンンン
!!!!

教室内に爆音が響き渡った

その瞬間優子の召喚獣の腕輪が光を放っていた

優子の腕輪の効果は放つ矢に爆薬物を付け相手を吹き飛ばす物だった

攻撃を受けた姫路の召喚獣は教室の壁際に一気に飛ばされていた

FクラスSide

「なっ!? 姫路の召喚獣が吹き飛ばされたぞ!!」

「決まったと思つたのに一体何が起こつたんだ!!」

後ろから見ていた面々には一体何が起こつたのか判らないでいた

「ほんと決まったと思つたんだがな。全く何をしでかすか予測できないなお前の姉貴は。なあ秀吉?」

「あ、あはは。まあ思いつきりの良さが姉上の良い所でもあるのじやがな」

目の前で起こつたことに慌てている他のクラスメイトを他所にこの二人は落ち着いていた

「まさかここに來て土壇場で上体そらしなんかやってのけるなんてな」

「そうあの時優子が急遽思いついた策は秀吉の部屋においてあつた漫画にあつた上体そらしで攻撃をよける一幕を再現することを実行したのだ

しかも練習なしの本番一発勝負にかけるところは弟の秀吉が言うように思いつきりの良さを持つ優子ならではの策であつた

秀吉は自分がよく知る姉がこのままズルズル負けのを良しとは思っていない事を知っているから何か仕掛けてくると確信していたのでそう慌てていなかったが雄二の場合は違つていた

(まさかこんな事になるなんてな。だが代表である俺が顔に出したらクラス全体に動揺が広がっちゃうしな。だが……)

「どうやら姫路を倒すには火力不足だったらしいな」

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 3201点

V S

Aクラス 木下優子

総合科目 2768点

Fクラス Side end

やっぱりそこまでの威力はなかったか……

優子はあらかじめこの結果を予想していた

優子の腕輪の攻撃の範囲は爆発が起きた時に生じる爆風にも入り防御されても相手との距離を離すことができるものだがその分攻撃力が分散されやすく元々直撃させても相手に大打撃を与えられる物ではなかった

だが優子が重要視したのはダメージではなくこの攻撃によって得られた相手との「距離」

この「距離」こそ遠距離タイプの召喚獣を生かせるモノ

「例え一発一発が弱くても……」

狙いを姫路の召喚獣に合せ

「これならどうよ!!」

優子は残りの点数を僅かに残しその他全てを腕輪に回し無数の矢を放った

攻撃を受けて倒れていた姫路の召喚獣が立ち上がった時には無数の爆薬物を付けた矢が迫っていた

(このタイミングじゃ避けることは不可能!もらったわよ姫路さん!)

この攻撃に自分の勝利を確信していた優子

しかし

姫路の召喚獣の腕から赤い光が出ると無数の矢は姫路の召喚獣に当たるよりもつと前で爆発した

「えっ？」

いきなり自分のまえで起こった出来事に何が起こったのか理解できないでいる中、気が付くとあの赤い光が優子の召喚獣真ん前まで迫った

その時ようやく優子は気が付いた

(そうだった……、姫路さんにはまだこれが……)

この赤い光こそ姫路最強の武器「熱線」であった

「熱線」に触れた瞬間、優子の召喚獣は消滅した。この勝負が決した瞬間だった

第33話

「勝者、Fクラス！」

おおおおおおおお!!!

「ごめん、負けちゃった・・・」

Fクラスの歓声を背に優子とはとほとほとAクラスの元に戻った

「仕方ないよ。なんせ相手はあの姫路さんだったんだからさ」

「そうだよ！姫路さん相手に十分善戦したって！気にする事ないよ」

「そうそう♪」

Aクラスの誰ひとり負けたことに責めるものはいなかった

「そう言ってもらえると助かるわ。はあ・・・勝てるとおもったんだけどなく。・・・
(まあ近づけたと分かっただけでも良しとするかな・・・)」

「?優子?どうかしたの?」

「え?ううん、何でもない」

「しかし驚いたよ、木下さんの点数があれ程のモノだったなんてね。僕もこれを機に気合を入れて頑張らないと」

「久保君。まあたまたまかもしれないけどね。・・・それじゃあ今度姫路さんを相手にするのは久保君に任せようかな♪私は勉強に励むのはしばらくお休みにするわ」

「ん?それはどういう意味だい?」

「私ってさ一年の頃からねプライベートの時間削って勉強してたの。まあそれは自分が勝手にライバル視してた人に勝つためだけになんだけどね。でもそれはバイトやってみたいとか友達と遊びに行きたいとか色んなこと我慢してやってた部分とか多くてね、だから今度はそっちの方に時間かけて見ようかなってね。あ、だからと言って諦めたわけじゃないから。あくまでしばらくの間、ね」

「なるほどね。まあ確かに試召戦争だけが学校生活じゃないからね」

「でしょ?・・・まあそれはこの後の最終戦に勝てば、の話だけどね」

そう言うのと優子は今だ歓声が鳴り止まない様子の姫路を中心に輪になっているFクラス、の外にいて何やら考え事をしている雄二に目をやっていた

さてこのまま原作通りに事は動くのか、それとも・・・

「・・・大丈夫、私達は勝つ」

「そう声を掛けられ後ろを振り向くと代表が居た。表情は普段と余り変わらないが目から強い決意のようなものが感じられた」

「代表、どうだった？・・・間に合った？」

「優子にそう聞かれると翔子は何も語らなかつたがぐつと親指を立て高橋先生の元へと向かつていった」

「高橋先生、早く五回戦を始めて貰っても構いませんか？」

「分かりました。では五回戦を行います！代表前に！」

「さてと。俺の出番だな」

「そう言つて坂本君が前に出てきた。遂にこの戦争の勝敗が決まる最終戦が始まる」

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ!!」

ざわ・・・!!!

「上限ありだつて?」

「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか」

「これはもう注意力と集中力の勝負になるぞ・・・」

「ひよつとしたら万が一何て事も起こるんじゃない?」

坂本君のこの宣言でAクラスに動揺が走った。負けるはずがないと思っていたのがいきなりそれが揺らぐものに変わってしまったのだから無理もなかった

「分かりました。そうなると問題を用意しないといけませんね。少しこのまま待っていてください」

そう言う和高橋先生は問題作成のため教室を出ていった

「ねえ？優子。．．．代表勝つよね？」

珍しく愛子が不安そうな顔で私に聞いてきた

「当たり前よ！私達はただ代表が勝つことだけを信じるだけよ」

それはもしかしたら愛子だけでなく自分自身にも言い聞かせて言ったものだったのかもしれない

それからしばらくして高橋先生が戻ってきて作成した問題を行う為に代表と坂本君を視聴覚室に連れて行った

私達は教室のモニターから見守ることになった

「ではこれより問題を配ります。制限時間は五十分。満点は百点満点です。もちろん不正行為は即失格になります。いいですね？」

「・・・はい」

「分かっているさ」

「では始めてください」

二人の手によって問題用紙が表にされる

「ついに始まったね・・・」

「ええ。これで勝負が決まるわ・・・」

周りが静寂に包まれる中モニターに問題を解いていく二人を映すと共に二人が解いている問題が映されていた

『次の（ ）に正しい年号を記入しなさい』

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

（ ）年 鎌倉幕府成立

（ ）年 大化の改新

.....

おおおおおおおおお
!!!!!!

大化の改新、この問題が出た途端いきなりFクラスが騒ぎ始めた

「ね、ねえ？優子。大化の改新が問題に出た途端向こういきなり凄い事になってるんだけど一体どうしたのかな？」

「狙っていた問題が出た、つて所でしょ」

「狙っていた？」

「そう、勝負を決するような・・・ね」

大化の改新、この勝負でキーポイントになる問題だ。原作なら例えこれを外しても坂本君が小学生問題と油断して点数があまり取れず代表の圧勝で終わるけどこの世界じゃ吉井君が久保君に勝つという原作とは違う流れが起こっている

そうなればこの勝負もどうなるか分からない

50分の制限時間はあつという間に経ち、そして採点結果は・・・

気味のものだった

「大化の改新が出れば霧島は間違えて俺達の勝ちじゃなかったのかよ？」

「霧島正解してるじゃないか！どういうことだよ!？」

Fクラスの皆々が動揺していた。だが一番この結果に動揺を隠せないのはこの勝負を申し込んできた坂本君本人だ

それはモニターごしでもわかるくらいだった

「しよ、翔子！お前この大化の改新聞違つて覚えたままじゃ」

「・・・雄二」

「？」

「まだ勝負は終わってない。テスト中は私語を謹んで」

「くっ……」

そう言われ渋々席に戻る坂本君

その時だった。代表が少し苦しそうな顔で少し頭を手で抑える仕草をした

え？

もう一度代表を見るといつもの代表に戻ってはいたが……

代表、もしかして……

そんな中延長戦が行われたが先の結果で坂本君が動揺したのか

Aクラス 霧島翔子

100点

V S

Fクラス 坂本雄二

86点

坂本君は百点を取ることが出来ず代表が勝利した

この結果がモニターに映るとFクラスが視聴覚室に向かって走り出したので私達も急いで後を追った

「良い覚悟だ！殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君！落ち着いて下さい！」

「アキ！落ち着きなさい！アンタ百点どころか三十点も取れないでしょが!!」

急いで視聴覚室に行つてみると吉井君が姫路さんと島田さんに抱きつかれて止めら

れていた。あれは恐らく制裁を加えようとして止められたな

「雄二！どういう事だよ!?!大化の改新が出たら勝てるんじゃないの!?!」

「うるせえ！俺だってなんでこうなったのか訳がわからねえんだよ！翔子、お前大化の改新間違えて覚えていたんじゃないのか?」

「うん、私は雄二に教えられた通り625年（無事故）で覚えてる」

「ならなんでさつきは正解したんだ?」

「確かに私は雄二に教えてもらった事は絶対に消えない。けど短時間ならその上から上書きが出来る。短時間で消えちゃう付け焼刃程度のものだけだ」

「上書き!?!」

「そう、代表に無理言ってやってもらったのよ」

「秀吉姉！それじゃあ今まで翔子の奴が奥に引っ込んでいたのは」

「貴方との対戦に備えて代表の番が来るまで上書きの作業をやってもらっていたの。まあそのせいで代表に痛い思いもさせちゃたけど・・・」

「・・・気づいてた？・・・大丈夫、優子。今はもう平気」

「平気な訳ないじゃない。ごめんね代表。こうなるまで気がついてあげられなくて・・・」

「だからもう大丈夫と言ってる。・・・うちのお母さんは心配症」

「なっ！だ、だから！お母さん言うな！」

代表とこんなやり取りをしてるとうちのクラスはなんかニヤニヤしてるし！そこ笑うな!!

「つてことはこつちの手も読まれていたつて事か？」

「全てを読んでいた訳ではないわ。通常の戦争形式ではなく五人の代表戦に教科の選択権、この事を考えれば貴方が代表に勝てる何かを知つてると思うのが自然な訳だしね。（まあ原作読んで知つてました、なんて言える訳ないしね）」

「まあそれでも読まれていた時点で俺らは負けが決まっていたという訳か・・・」

「・・・ところで雄二」

床に膝をついている坂本君の前に出る代表

「約束・・・」

代表がそう言う・・・

カチャカチャカチャカチャカチャ
!!!!

土屋君と吉井君が慌てて何か用意し始めた。あーそういえば代表に変な噂流れたまんまだったか

「わかつてる。何でも言え」

「それじゃ……、私と付き合って雄二」

『……はい?』

代表のその一言にFクラスだけでなくAクラスからも出た言葉だった

「え?ええ?霧島さんって女の子が好きじゃなかったの?」

それらを代表していったかのように吉井君が状況が理解できないまま愛子に尋ねた

「それは単なるデマだよ吉井君。代表はずっと坂本君一筋だったからね♪ねえ優子?」

「ええ。でも坂本君素直じゃないみたいだったから今までは聞いてはもらえなかったみたいだけど」

「ちよ、ちよつと待て!? 誰が素直じゃないだど!? 俺は—」

「やっと想いが叶ったね! 良かったね代表♪」

「おめでとう♪代表」

「うん、ありがとう愛子、優子」

「人の話を聞け!? 俺は一言もなるとは、あああああああ!!!」

「・・・約束」

グギギギギギギ
!!!!

拒もうとした途端に代表にアイアンクローを喰らう坂本君。南無……、恋する乙女は強いのだよ……

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

周りが唾然としている中いきなり野太い声が後ろから聞こえた。振り替えるとそこにいたのは西村先生だった

「あれ？西村先生。何か僕らに用事ですか？」

「ああ。今から『我がFクラス』に補習についての説明をしようと思ってな」

「え？『我がFクラス』……」

西村先生のその一言に吉井君を始めFクラスの男子一同の表情が青ざめていった

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担当が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強ができるぞ」

『嫌じゃあああああ!!!』

Fクラスの男子全員が悲鳴を上げた

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。だがいくら『学力だけが全てではない』と言っても、人生を渡って行く上で強力な『武器』の一つだ。全てではないからと言ってもないがしろにしているものではない」

「こっちは原作通りになるのか。まあ・・・その・・・頑張れFクラス男子一同（。――
△――）」

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

多くのFクラスの男子達が膝をついてガクリとしている中、西村先生はそう言う教

室を後にした

「さあくて、アキ？補習は明日からみたいだし今日は約束通りクレープでも食べに行きましようか？」

「え？美波、それは週末って話―」

「だ、ダメです！吉井君は週末私と映画を見る約束なんです！」

「ええ!? 姫路さん、それは話題にも上がってないんですけど!？」

「・・・雄二、映画で思い出した。週末これ見に行くから」

「なんだ？ええと何々、地獄の黙示録完全版!?!おい！これ三時間二十三分もあるぞ!?!」

「・・・二回分」

「一日の授業より長いじゃねえか!!」

やれやれ。やっと試召戦争が終わったというのに・・・

目の前で起きているドタバタに呆れつつふと優子は学校の外に目を向けていた

外は桜が満開か

うん、桜か・・・。そくだ(？▽？)

優子は何やら思いつくとニヤニヤしながらピンチに陥っている哀れな男二人の前に
出た

「ねえ？吉井君、坂本君。・・・助けて欲しい？」(ニヤニヤ)

「助けてください!!!」

「そ、即答かい……。えーと週末代表達と一緒に私に付き合ってくれば長時間の拘束と大量の出費をせずに済むけど？」

「行きます!!」

「え、えーとそれじゃあ……」

お花見でも行かない？皆で」

第34話

「お弁当よし、水筒よし、シートよし、つと。もう忘れ物はない？」

「うむ、全部持ったぞい」

「それじゃあそろそろ出ますか」

家の外に出ると空は雲ひとつもない晴天だった

如月中央公園

公園内に入るとそこはもう桜一色に染まっていた

「桜は学園前の坂で見慣れたと思っておったがここの桜は段違いじゃのう」

「そうね、何か見とれちゃうわね」

華麗に咲き誇っている桜を見ながら奥に進むとひと足先に待ち人達が来ていた

「もう来てたんだ、吉井君、姫路さん、島田さん、それに代表達も」

一際大きな桜の下にはFクラスのメンバーらに愛子達がそこにいた

昨日の試召戦争の後でふと外で咲いている桜を見て優子が代表達や吉井君達を花見に誘ったためだったからだ

「あ、木下さん！それに秀吉！こっちこっち」

「ごめんね、待たせちゃって」

「僕は早く来すぎただけだから気にしなくていいよ。それに木下さんは僕らの為にお

弁当まで作ってくれたんだから」

そうあらかじめ全員にお弁当を作って行くからと伝えておいたのだ

「実はねお弁当作ってきたのは私だけじゃないのよ？ね？姫路さん、島田さん、代表」

「え？……姫路さんが？」

姫路さんが作ってきたと聞いて一瞬硬直するFクラス男子メンバー。まああの恐怖のお弁当事件があつたから無理もないが

「大丈夫よ吉井君。ね？姫路さん」

「はっ、」

そう言つて姫路さんが持つてきたお弁当箱を開けるとそこには厚焼き玉子が箱一杯に入っていた

懸命の努力のおかげでただの卵焼きから厚焼き玉子にクラスチェンジしていたのだ！…まあ卵しか焼けないのは変わらないが。味はまだ少し塩辛いこともあるけどそれでも最初の頃に比べれば大きな進歩だと私は思う

「その厚焼き玉子は私も何度か味見してるから大丈夫よ。姫路さん皆に食べてもらうんだって結構練習したんだから食べてあげてね♪」

「き、木下さん!？」

練習していたことを言われなくなかったのか顔を真っ赤にして姫路さんが慌てていた

「そうだったんだ。ありがとう姫路さん！」

「よ、吉井君。エへへ…」

吉井君にそう言われて嬉しかったのか顔がニヤける姫路さん。まあ好きな人にそう言われればそうなるわよね

「むー。ずるいわよ瑞希。ウチだってお弁当作って来たのに・・・」

姫路さんに面白くなさそうに小声で言う島田さん

「島田さんも作ってきたんだよね？・・・吉井君「だけ」に、さよニヤニヤ」

「工藤さん!?!な、何言ってるのよ!そんなこと・・・」

「だけ」と愛子が強調して言う顔と顔を真っ赤にさせる島田さん

「そうだよ!皆のためならまだしも僕だけに作ってくるなんてそんなことあるわけないじゃないか。こんなに顔を赤くさせる位なんだから」

……そう捉えますか。ここまで鈍感だとはこりゃあ苦勞するわけだ

「島田……。お前が改めて言い直さないとこのバカはきつと理解しないぞ?」

「そうじゃぞ? 明久だけに作ってきたと言うのじゃ」

「ええ〜ツ!」

坂本君と秀吉にこう言われ更に真つ赤になる島田さん。なるほどこういういじり方をすればいいのか覚えておこう

「ところで優子」

「ん? なに? 愛子」

「今日のメンツはこれで全部?」

「あ、そうだった。実はあともう一人来る事になってるからもうちよつと待っていてくれ

ないかな」

「もう一人？」

「もうすぐ来るとおもうんだけどな」

そう言つて時計を見ていると

「す、すみませ〜ん!!遅れました〜!!」

後ろを振り替えると全力疾走でこつちに向かつてくる小柄な女の子が一人

「ハアハアハア・・・、す、すみません・・・、ちよつと準備に手間取っちゃつて・・・」

「だ、大丈夫？永姫ちゃん？」

「は、はい。すみません、遅れちゃつて」

「いいよ。こつちこそごめんね。昨日の今日だから」

「優子、誰？その子」

「なんか可愛い子だね♪」

「ああ、愛子はまだ会ったことなかったか。この子は一年の前田永姫（まえだはるき）ちゃん。紹介するね、こつちは私のクラスメイトの工藤愛子、そしてこつちは私のクラス代表の霧島翔子」

「ま、前田永姫です！よ、よろしくお願いします！」

そう言つてペコペコする永姫ちゃん。そこまでしなくてもいいのに

「あはは、まあまあ落ち着いてよ。永姫ちゃんか、うん♪よろしくね。工藤愛子です、こつちこそよろしく」

お互いに自己紹介すると二人で仲良く握手を交わした。うんうん、よきかなよきかな

「私は霧島翔子。よろしー」

「あ、はい。こちらこそよろー」

互いに顔を見て挨拶をしようとした時だった

時が止まったのは……

この時初顔合わせだったがこの瞬間に互いに認識したのだ。目の前にいる人物は自分の大切な人を巡って戦う敵だと……

「よろしく」 ニコッ

「はい♪よろしくお願いしますね♪霧島先輩」 ニコッ

それはお互いのにこやかに握手をしている穏やかな一面に見えるだろう

グ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
!!!!!!

握手をしているところからこんなトンデモない効果音が流れなければ……

「ね、ねえ？ 優子。なんかあつちえらい事になっちゃってるんだけどもしかして永姫ちゃんも坂本君のことが？」

「あー、うん。そうみたい」

二人のやり取りに不味ったかなくと頭を掻く優子

こうしてドタバタの花見が始まった

第35話

ちよつとした波乱の顔合わせがあつたがなんとか二人を落ち着かせ桜が見事に満開に咲いている一本の桜の下にシートを広げて花見の準備を始めた

「ふう、まあシートはこんなもんでいいかな。後は各自持ってきたお弁当を広げて、……ん?」

ごオオオオオオ!!!

なんか凄い殺気を感じて横を見ると凄いオーラを放つ姫路さんと島田さんがそこに居た

なんで二人がこんな事になっているんだらうと二人の視線の先を見るとそこには女子大生だらうか若いお姉さんにカメラのシャッターを頼まれてデレっとしている吉井君がいた

「アキの奴!! 美人だからってあんなにデレデレしちゃって!!」

「これはお仕置きですね。美波ちゃん……」

「ハイハイ。ストップストップ」

なんか二人が戦闘モードに入りやっつて吉井君を襲おうとしていたので止めに入るとにした

「何で止めるのよ!!」

「吉井君にお仕置きしないといけないんです!!」

「まあ二人の気持ちも分からなくはないんだけどさ……。一つ聞きたいんだけど二人のどちらか吉井君と付き合ってたりするの?」

私がそう聞くと二人は同時に顔を真っ赤にさせた

「な、何言ってるのよ!! ウ、ウチはそんな……」

「え、え〜と。その……」

「……その様子だと違うみたいね。だとしたら二人に吉井君に制裁を下す権利はないわね」

「なんでよ!?!」

「どうしてですか!?! 悪いのは吉井君なのに!?!」

「彼の彼女でもないのに彼の行動についてとやかく言う権利はないって言ってるの」

「うっ、そ、それは……」

「二人とも彼に対して好意を抱いているから焼きもちを焼くのもわかるけどさ。だからって彼に暴力してもいいってのはちよつと違うんじゃない?」

「で、でも!!」

「今はいいかもしれないけどやりすぎると本当に彼に嫌われるかもしれないわよ? 自分に暴力を振るう人を好きになるなんてDMでもない限りいるわけ無いでしょ? 二人は彼に嫌われてもいいの?」

私にそう言われるとしゅんとする二人

「彼に好意を抱いてほしいのなら暴力じゃなくもつと彼とスキンシップしなきゃ。どれだけ想われてるか教えてあげないと。……こう言っちゃわるいけど彼の手の事は凄く鈍感じゃない?」

私がそう尋ねると

「そう！　 そうなの！　 普通ここまですれば流石に気づく所気がつかないのよ!？」

「少しくらい気づいてくれてもいいはずなんですけど……」

……どうやらかなり手を焼いているようだ

「それなら尚更暴力はダメ。気づかせるためにもまず行動を起こさなきゃ」

「……そうね！　 行動あるのみよね！　 行くわよ瑞希！」

「はい！　 美波ちゃん！」

そう言うのと二人は物凄い勢いで吉井君の下に行くとお姉さんから引き離すように彼を連れ何処かに行ってしまった

なんか火に油注いでしまったような気がするけど。まあ、暴力を振るわれるよりかはマシでしょ……多分

やれやれと思っていると今度はさきほど敷いたシートから

「……はい、雄二。あ〜ん」

「な、なあ？ 翔子。拘束されて食べさせられ続けて俺は苦しい一方なんだが……。お、お前も食べたらどうだ？」

「……大丈夫。これは雄二専用につつたやつだから気にしなくていい」

「なら先輩♪お口直しに私のお弁当をどうぞー！」

「え、えーと、前田だったか？ お口直しのそれで更に苦しいんだが……。そ、そうだ！ 俺ばっかりじゃあ悪いから他の奴らにも食わせて」

「それは大丈夫ですよ♪これは坂本先輩だけにつつたやつで。他の皆さんの分は別にありますからー！」

「……………」

……さつきからすごく助けて目線で坂本君がこつちを見ている。う、うくん。これは……まあ……あれだ……

「え、えーと……。ちよつと別の桜でも見てこようかな」（汗）

「!?」ガーン

これは愛ゆえにだから仕方がない。決して関わって面倒な事になるのが嫌だからではない。……うん。

逃げるようにその場を離れると私は公園の中央にある一本の桜に向かった

その桜はこの公園で一番大きい桜だった

その桜を見ながら私はこれまでの事を振り返った

死んでこっちの世界に来て色々あったけどようやく一巻の内容が終わった訳か。そして私知っていた事は全て消化されこれからは全くの未知の領域か……

でも全く知らないからこそ本当の意味でここから始まるのかもしれないわね

木下優子としての第二の人生が……

「姉上!! 大変なのじゃ!?!」

気が付くと後ろで秀吉が大声を上げていた。どうやら少し思いに耽っていたようだ

「どうしたのよ? そんな大声あげて」

「工藤の奴がまたムツツリーニを揶揄ったせいで噴水のように鼻血を上げておるのじゃ!」

秀吉が指差す方向に視線を向けるとそこには秀吉が言っていたように鼻から噴水のよう血を出す土屋君と苦笑いする愛子。そしてそれを見て慌てる他のメンバー

「……やれやれ。もう少しくらい感傷に浸る時間くらいもらえないのかしらね。この世界は……」

「姉上？」

「なんでもないわよ。ほら！行くわよ！せつかくのお花見に救急車を呼ぶ騒ぎ起こしたくないでしょ！」

「あ、姉上！」

私はそう言うのと駆け出した

一体この先どのように進んでいくか分からない。でもそれでも進んでみようと思う

この道を、木下優子としての人生を……

木下姉弟の日常（学校編）

やつほく♪読者の皆元気してる？工藤愛子だよ♪今回のお話はボクがたまたま目撃した今だにそれは本当にあつたことなのか分からない出来事を紹介するよ♪

え？優子達の日常じゃないのかつて？ごめんね、作者が「ネタが、ネタが出ない!!」てことになってこうなつたんだ。

それじゃあ始めるよ♪

あれはとある放課後の出来事

ボクが優子と何気ない雑談をしていると代表が何やら便箋を持って現れた

「代表それ何？」

「…靴箱の中に入ってた」

そう言つて代表が便箋を開くとそこには手紙が入っており手紙の内容は代表に宛てたラブレターだった

「相変わらず男子にモテモテだね♪代表♪それでどうするの？」

「…雄二以外の人には興味ないから断つてくる」

そう言つて代表は教室を出ていった

実は代表はずっと前からFクラスの坂本君に想いを寄せているのだ。でもこの事はボクと優子の二人しか知らないこと

時たま流れてくる代表が同性愛者じゃないかと言う噂は坂本君に興味を持った女の子がいなか見ている所から出たデマなのだが…

「本当に坂本君以外全然興味ないよね代表」

「でもそこが一途で可愛い所じゃない♪」

「そういえば優子は靴箱にラブレターとかなかったの？結構もらってそうだけどなく？」

「そんなの全然ないわよ。一度だってそんなのなかったわ」

「ええ!!それは予想外だなく、てつきり貰ってる物かと思った。あwもしかしたら弟くんが…」

妄想

「ムツ！また姉上の靴箱の中にどこの馬の骨とも分からぬ男からラブレターが入って
おる！しかもまたこんなな！全くけしからんのじゃ！これはワシが丁重に処分しようか
のう」

妄想終了

「……なうんて弟くんが密かに処分してたり、ね♪」

「なうにバカな事なってるのよ、アイツがそんなことするわけ無いでしょ」

「アハハ、だよね♪」

そんな風に話していると

「すまぬ！待たせたのじゃ姉上」と秀吉君がやってきた

「もう遅いじゃない！今日は食材が安い日だから早く行くって行ったじゃない」

「すまぬのじゃ、ちと帰る準備に手間取ったのう」

「もう、ほら急ぐわよ！それじゃあまた明日ね愛子」

「うん♪またね」

ボクはそう言って急いで出ていく優子達を見送っているとふと弟君のポケットから破かれたような数枚の紙切れが落ちたのは見つけた

「うん？何だろうこれ」

その紙切れには

「優子様」

「……好きです」

「付き合って」

と辛うじてこの三つの文字だけ読み取れるものだった

「え!? こ、これって、…まさか?」

するとこつちを見る視線が! 振り向くとそこには

急いで出たはずの弟くんが立ち止まりニヤリと笑っていた……

「何してるのよ! 秀吉! 急ぐわよ!」

「分かったから待つ のじゃ姉上」

何もなかったかの様に受け答えして去っていく弟君

「え!?! えええ!?! ま、まさか本当に? …… ま、まさか、ね? あ、あはは、あははは ……」

その同時刻に使われていない焼却炉の中に沢山の便箋が燃やされていたという ……

第37話

金がなくて困っていることを病気になぞらえていう語、金欠

誰しもが一度は掛かってしまうこの病気はこの人物にとつても例外ではなかった

「うう……。なんでこのタイミングで来るかな……」

木下優子。彼女は今すごく困っていた

それはとある同人誌即売会とアニメショップの限定フェアが見事に同じ日に被ってしまったからである

「……軍資金が圧倒的に足りない」

どちらも手に入れておきたい。だけどお金がない。

「……うう。背に腹はかえられないか」

そう言つて彼女は二枚のチラシを机の前に置いた

それらはどれもアルバイト募集のものだった

「えーと、確かこの辺だよな？」

翌日優子は学校帰りに候補の二つの下見に訪れていた

一つ目は結構美味しいと評判の文月学園の生徒御用達のお店。駅前にある「ラ・ペ
デイス」というお店

「あーあつた！ここね。おしゃれな店作りじゃない。これは当たりかな♪」

時給が応募していたお店の中で一番高く場所も近くその上このおしゃれな店作り。

「…お帰りなさいませ。旦那様、奥様」

「お、おか、帰りなさいませ！ あう…。囁んだ…」

元気タイプのメイドさん、クールな感じのメガネのメイドさん、緊張しているのかがチガちなメイドさんといった色んなタイプのメイドさんが出迎えていた

髪型はカツラなどで変装や偽名で他人にバレないようにするシステムを取っているお店

「では行ってらっしゃいませ、お嬢様方。お帰りをお待ちしております♪」

笑顔で客を見送るお姉さん。遠目からなので名前はわからないがプレートに店長と書かれているのでこの人がこの店の店長さんなのだろう。何故かこの人もメイド服を着ていたのだが……

家に帰り自分の部屋に戻ると優子は再び検討に入った

十分な軍資金を得たいならラ　・　ペデイス。だけど……

「な、なんか私の第六感が危険を告げているような気がするんだよね……。あの店」

とにかくなんか危険がいつぱいな感じ

一方変装や偽名などで分かりにくくなっているメイド喫茶だが……

「客層の中にうちの学生もいたからなく。……秀吉や愛子達にバレたら面倒な事になり
そんなフラグの予感も感じるしな」

知り合いと合えばバレる危険性もありこちらもある意味で危険なメイド喫茶……

「ううう、どっちを取るか……」

第38話

「……………ここにするか。出来るかどうか分からないけど」

そう言って優子は二枚のチラシのうちの一枚を手にとるとそこに書かれていた電話番号に電話した

「あ、すみません。バイト募集のチラシを見てお電話させてもらったんですが……」

翌日、学校を終えるとその足で優子とはある店に向かった

その店はメイド喫茶「ひだまりポケット」

変装や偽名を使って本人とバレないようにするシステムを取っているお店である

店の中に入ると中は洋風のアンティークショップのような内装だった

「すみません。昨日バイトの面接で電話した者なんですが」

レジ付近にいたメイドのお姉さんに声をかけた

「ああ。昨日電話を頂いた木下さんですね。こちらにどうぞ」

そう言って店の奥へと案内された

「あの店長さんは？」

「ん？店長はわたしですよ」

「え？でも髪型が」

お姉さんの髪型はショートヘア。でもこの前見たときは確かロングヘアのお姉さんだったはずだけど？

「それはきつとその時ロングウイング、ロングヘアのカツラを付けていたからだと思いますよ。ここは髪型なども変えますからね。さあ、こちらにお掛けになつて楽しんでください」

案内された席に座ると店長さんは向かい側の席に座つた

「では改めて自己紹介させてもらいますね。私はここのお店の店長をさせてもらつています渡瀬茜（わたせあかね）と申します。（ニコ）」

「わ、私は木下優子つて言います。ほ、本日はよろしく願ひします……（汗）」

いきなりの笑顔につい見とれてしまつていた。これがプロの仕事か……恐るべし

……

「さて、では早速ですが面接を始めますね。木下さんはどうして今回うちのバイトに？」

「はい。理由はそのく色々あるんですがまずはお店が自宅からも学校からも近くにあるという点です」

「そういえば木下さんのその制服、確か文月学園の制服ですよね？」

「はい。ご存知なんですか？」

「ええ。うちのお店に何人か文月学園の子がいますから。それで他にも何か？」

「は、はい。えーと、その、実は私メイドさんについてあまり知らないんですけどメイドさんのあのひらひらした服が可愛いなと思ひまして。どうせ働くならこんな可愛い服着てバイト」

してみたいたいと言おうとした時だった。店長の渡瀬さんがいきなり私の手を両手

で掴むと

「そうやる？このメイドさんの服可愛いやろ♪　メイドさんの服は参考にするタイプが
ぎょうさんあつてうちの制服作るの大変やったけんね♪」

「……………（呆然）」

「あ……………。こ、これはどうも失礼しました（汗）」（赤面）

「え、えーと。さつきほどの話し方によると店長さんは関西の方なんですか？」

「あー、やっぱりそう思われますか。よくそう言われるんですけど私四国出身なんです
よ。あれは伊予弁なんですよ」

「伊予弁？」

「ええ。普段は話すときは標準語を心がけているのですがテンションが上がるとつい出

ちやう時がありまして……。今みたいに」（赤面）

「さっきのことが余程恥ずかしかったのかまた赤面する渡瀬さん。なんか可愛いなこの人

「こほん。えーと、とりあえすうちの制服に興味を持ってもらえて嬉しいです。木下さんはバイト経験とかがありますか？」

「いえ。その、今回が初めてのバイトなもので……」

「そうですか」

そう言うとき渡瀬さんはじーと私の顔を見つめてきた

あれ？なんか評価下がる所だったんだらうか。うーんやっぱりバイト経験ないとだめだったのだらうか？

そんな風に考えていると

「……。よし！ 採用します」

「え？ 採用……。採用?!」

「ええ。そうですね?」

「えーとさつきも言ったんですが私バイトの経験ないんですけど一体私のどこを評価して決めたんですか?」

「それはですね。えーと……。勘ですかね」

「勘!? 勘なんかで決めちゃっていいんですか? 私が言うのもなんですが」

「はい。木下さんはいい子だなとビビツときましたから。それでも私の勘結構当たるんですよ? 今うちの店にいる子も全員これで採用してきましたから」

いいのかな？それで（汗

「それに商売の神様もちゃんと見守って下さってますから」

そう言うのと渡瀬さんは上を見上げ私もそれにつられて見上げるとそこには

「関羽？ あれ三国志の関羽ですか？」

「ええ。商売の神様ですから」

「それはそうですけど…。日本なら七福神とかじゃ？」

「まあそうなんですけどね。でもこのお仕事が一番大事なのは信頼ですから」

「はあ」

確かに関羽は義の人つまり約束を守るといふ象徴的な人物だからお客との信頼を守るという点ではあつてゐるのかな？

まあ取り敢えずここで働けることが決まったのでした

第39話

「では早速ですが制服のサイズ合わせをしようと思います。クリスちゃん、雅ちゃん、ちよつと来てもらえますか？」

「はいはい。何か用ですか？ 店長」

「……面接は終わったのですか？ 店長」

茜さんに呼ばれてやって来たのはメイド服を着た金髪の美少女とクールな感じのメ
ガネのお姉さんだった

「ええ。こちらが新しく入る木下優子さんです」

「こ、こちらで働くことになりました木下優子です！ よ、よろしくお願いします！」

「あはは。中々元気な子が入ってきたね。初めまして！ 私は上城（かみしろ）クリスマスだよ、よろしくね！」

「……私は松嶋雅（まつしまみやび）と申します。よろしく」

「上城……クリスマス？という事はハーフの方なんですか？」

「そうだよ。お父さんは日本人でお母さんはイギリス人だよ」

「へへ。しかしまさか外国の方がいたとは驚きです。日本語お上手なんですね」

「いや〜でもここまで上手くなるまで結構大変だったんだよ。ねえ？ミヤビ？」

「ええ。最初の頃のクリスマスはカタごとの日本語を少し話せるくらいでしたからね」

「最初の頃？」

「クリスがこっちに転入してきたのが高1の時です。あの頃が懐かしいですね」ウン

その頃を思い出している様子の雅さん

「あの頃って……。お二人は今何？」

そう聞くとクリスさんがフフフと自信ありげに

「聞いて驚かないですよ！　なんと！　花も恥じらう女子大生なんだよ!!」

「え………?」

じーーーーー

クリス（140cm前半くらい）

じーーーーー

雅 (170cm後半くらい)

いやいや雅さんはわかるけどクリスマスさんはちよつとな〜と思つていると

「どうしたの？ そんなにこっち見つめちゃつて？」

不思議そうにこっちを見るクリスマスさん。 言えない。 小さいのに大学生なんですね、
なんて言えない……

そんな風に私が苦悩していると

「クリス。彼女の気持ちを察してあげてください」

「？ どういう事？ ミヤビ」

「花も恥じらうってほどでもねえだろう！ つとツツコミを入れたくて入れたくて堪らないと思っっているのです」

「ガーン!? そ、そうだよ。現役女子高生の前では女子大生は敵わないよね。ゴメンネ、ぐすん」

「いやいやいや!? そんな事思っけませんしそんなツツコミ考えてませんから!?!」

雅さんのトンデモないボケにアタフタしていると

パンパン!! (手を叩く音)

「はいはい。二人とも木下さんをおもちやにしないように」

へ? おもちや?

店長の茜さんにそう言われ二人の方を向くと

「ニコツ」(とつてもいい笑顔)

「なっ!?!ガクリ……………」

ううう、何故私の周りには私をいじるキャラが多いのだろうか……………

……………

それから制服のサイズ合せをし試着することに

「ユーコ、どう? 制服きつくない?」

「今ちようど着替え終わったので出ますね」

私は慣れない服に苦戦しながらなんとか試着室から出た

「ど、どうですか?」

私が着ている制服はワンピース、エプロン、リボンといった白のメイド服

「おお、可愛いよユーコ。すごく似合ってるよ」

「ええ本当に。よく似合ってますよ木下さん」

クリスさんや茜さんに褒められてた。　なんか恥ずかしいな……

「確かに似合いです。　しかし木下さんの魅力をもっと引き出すにはやはり前のやつを」

「いえ、この制服でいいです(きつぱり)」

雅さんが推してきたのは何故か胸部を主張しているやつで雅さんが言うには

「木下さんには立派な武器を持っているのですからそれを活かす制服でない」と

「あ、あの雅ちゃん？　うちのお店いやらしいお店じゃないのよ？」

これってセクハラ発言だよね？　茜さんも困ってるし

「・・・どうかもうちよつと胸が大きくなりますように」

「……………」

クリスさんは私の胸に向かって両手を合わせて拝んでるし……

とにかく雅さんの提案を跳ね除けなんとか露出の少ない大人しい目の制服に決まっ
た

「制服も決まったので次は接客についてですがまずは木下さんなりにやってみてください」

「ええ!?! いいんですか!?! 私接客なんて初めてなんですよ!?!」

「大丈夫ですよ。研修中のプレートを付けますし何かあればクリスちゃんや雅ちゃんがフォローしますし」

「そうだよ。安心してユーコ」

「一般的な接客のマニユアルを教えるのもいざ予想外の事が起こると対処できないことがありますから。なので最初は貴方なりのやり方でやってみて間違いがあれば私達がそれを教え直していけば自然と接客できるようになりますから大丈夫ですよ」

「わ、わかりました。ちよつと不安だけどやってみます」



丁度そんな時だった。お店の入口のドアに付いているベルがなったのは

どうやらお客様が入られたようだ

「それじゃあ早速ですが今来られたお客様達の接客をお願いします木下さん」

「は、はい！ えーとどんなお客さんなんだ・・・、げ!？」

優子の視線の先にいた客は

「ここなんだよ代表。ラ・ペデイスに張り合えるくらい美味しいケーキと可愛いメイドさんがいるって噂のお店は」

「・・・それは楽しみ」

今一番会いたくないとか来るんじゃないかと思ってた人物だった

第40話

「げ!? 何でこういう時に限ってやってくるのよ。あの二人は」

なるべくなら来て欲しくなかった来客に私は焦っていた

「どうしたの? ユーコ。そんなに慌てて」

クリスさんが明らかに様子がおかしい私の視線の先を見ると理由を察したようで

「ああ。あの子達文月学園の生徒さんだね。……もしかして友達?」

……コクリ

「あくなるほどね。アルバイト初日を知り合いに見られたくなかったと。大丈夫! そんな時の為にウチのお店には変装出来るシステムがあるんだから」

「そうでした！ あ、でも私そういうのやったことなくて……」

「……最初のうちは私達がやりますので。慣れてくれば木下さん一人でもできるようになるので安心してください」

雅さんはそう言うと言くとメイク室にある沢山あるカツラの中からロングヘアーのカツラを取り出した

「シヨートヘアーの木下さんには逆にロングでどうでしょうか？ クリス」

「そうだね。その上にリボンを二つ左右に付けてツインテールなんてどうかな？」

あれよあれよと二人にメイクなどされしばらくして二人の手が止まった時ふと鏡をみるとそこには

「……誰？（驚）」

見知らぬもう一人の自分が映っていた

「凄いでしょ☒ いつもとは違う自分になった感想は？」

「えーと、なんというか凄いです」

私だって女の子なんだから化粧とか少しはするけどなんかそれとは次元が違っていた

なんというか他人になった気分だ

「これならお友達にバレずに済みそうですか？」

「あ、はい。……たぶん」

「木下さん？」

「あ!?! いや、なんでもないです。アハハ……」

一人はバレずに済みそうなのだが問題なのはもう一人のほう

普段はぼーつとしてるのにここぞという時の勘の良さは凄いのよね。 代表は……

「それではあのお客様達のオーダー、お願いできますか?」

「は、はい。 行つて来ます……」

うう、やっぱり行かないとダメよね。 もう! 女は度胸だ!!

私は覚悟を決めると二人が座っている席に向かった

店長さん達 side

「ユーコやっぱり緊張してるんだね。足元ガタガタしながら行っちゃったよ」

「それは仕方ないと思いますよ。初めてのバイトだと言っていましたからね」

「何だか初々しいですね」

三人は初めてのバイトで緊張気味の後輩の後ろ姿をこっそり観察していた

「まあ何かあればいつでもサポート出来るようにしておきましょうか、クリス」

「そうだね！ せっかく出来た可愛い後輩のためにガンバルよ！」

そんな時だった

☒〜☒〜☒〜
お帰りなさいませ！お嬢様！

「頼みましたよ二人とも。 ……あら？」

他の店員が新たに来店してきたお客の対応の様子見していると何かを発見する店長

「どうかしたんですか店長？」

「何かあったの？」

「いえ、そうじゃないんですけど。」

木下さん、下に妹さんでもいるのかしら？」

店長さん達
s i d e
e n d

「ご、ご注文はお決まりでしょうか？ お、お嬢様方」

じーーーーーと視線が突き刺さる。前から、そして後ろからも……

じーーーーー

どうしてこうなった!?

それは今から数分前のこと。いざ覚悟を決め友人達が座っている席に向かう途中のことだった

店の入口に付いているベルが来店を知らせる音を鳴らせ、他の店員さん達が出迎えたのだが

「わ、わしは女ではないのじゃ!! 男じゃ!!」

ものすごく聞き覚えのある声が聞こえたので思わず振り向くとそこにはやはりうちの弟がいる訳で

「……ん?」

「あ……」

しかもその上目が合っちゃやし。それ以降ずーとこつちを監視するかのように見てるし……

こつちはこつちで何か感じ取る所でもあったのかオーダー聞きに来たときからずっと代表こつち見てるし

バイト初日にいきなり一人で接客やるわ、友達来るわ、身内来るわとここまで有り得ない偶然が重なるともはやこれはこうなる運命だったと思わず……に……

運命?……まさか……

運命というフレーズに優子の頭の中にある人物が浮かび上がってきた

それは自分がこの世界に転生することになった原因のあの天使

あの紙袋の仕業か!?

同時刻 とある場所にて

「うわ………またやつちやつたよ。で、でもこれは本気の失敗だから価値のある失敗。決して無駄じゃない、うん」

優子の予想が的中してたりする

「うわ〜どれも美味しそうで迷っちゃうね。 代表はどれにするか決まった？」

「……………私もまだ迷ってる」じーーーー

「愛子はメニューを見ながら迷っているが代表はメニューそつちのけでこつち見てるし……………」

秀吉の方は先ほど注文したのかコーヒーを飲みながらこつちを凝視してるし……………」

視線突き刺さりまくりでもう逃げたい！と思つた時だった

「お母さんお母さん!! 早く！ 早く！ ケーキ☒ ケーキ☒」

「はいはい。そんなに慌てないの。足元気を付けないと転ぶわよ?」

小さい女の子とお母さんの親子が来店した

女の子はケーキがすごく楽しみなのか母親に早く席に着こうと足を速めるが母親の忠告通り転けてしまう

「う、ううう、うわあああああ
!!!!!!」

「だから言ったじゃない。いい子だから泣き止んで、ね?」

店の中で大泣きしてしまった女の子にお母さんは泣き止むようになだめようとするが泣き止まずおろおろしていた

それを店の奥で見ていた雅達は收拾をつけるため出ようとするが二人より先に動いた者がいた

「大丈夫だよ。もう痛くないよ」

優子だった。優子はやさしく声を掛けると女の子に目線を合わせるように座り込んだ

「泣かないで。泣いてばかりだとせつかくのケーキも美味しく食べてもらえないって
ケーキ屋さんが泣いちゃうの」

女の子の涙をハンカチで拭いながら女の子の目を見ながら話しかけた

「…ケーキやさん、ないっちゃうの?」

「うん。ケーキ屋さんはね食べてくれるみんなに喜んでほしいと心を込めて作ってるの。だからほら笑って笑って☑ 女の子は笑顔が一番!」

ね?と笑顔でそう言うと女の子もつられて泣き顔から笑顔になった

「……うん！」

その後その子の母親からお礼を言われ恥ずかしくなってその場を離れるとオーダーを取っている途中だったことを思い出す

「す、すみません!! お客様!! あの……オーダーはお決まりでしょうか？」

優子は慌てて愛子達がいる席に戻り恐る恐る聞いた

「それじゃあ私はこのモンブランとコーヒーのセットで。代表は？」

「……私はチーズケーキと紅茶のセットでいい」

そうオーダーを取っているとき優子はこちらに向かっていた視線が変わっていたことに気が付いた

先程まであんなにじつところちらを見ていた翔子の目が少し優しい目になっていった

一方秀吉のほうは言うところちも優しい感じにはなっているのだがやれやれと思っ
ているようにも感じられる物だった

その後は注文した品を持って行っても問い詰められる事もなく淡々と時間が過ぎて
いき代表達と秀吉は会計を済ませ店を出ていった

色々ドタバタが起きたが何とかバイト初日が終了した

「あ、茜さん。お疲れ様でした」

「ああ、木下さん。お疲れ様でした。まだ慣れなくて色々大変だと思えますが頑張っ
て下さいね」

「は、はい！ありがとうございます！」

従業員用の出口から出ると周りはすっかり暗くなっていた

「やば!? 早く帰って晩御飯作らないと!」

「ただいま!!」

「お帰りなのじゃ、姉上」

「ごめん、帰るの遅くなっちゃって。秀吉晩御飯どうしたの?」

「それなら今日は外で済ませてきたから問題ないのじゃ」

「そっか。なら良かった」

「ところで姉上」

「ん？」

「次のシフトはいつじや？」

……ええ？

第41話

慌ただしいバイト初日が終わって数日が経つと今度は学校行事で忙しくなってきた
学年最初の行事、清涼祭の準備のためである

各学年、各クラスがそれぞれの出し物の準備に活気になっていた

それは私がいるクラス、Aクラスとて例外ではなかった

ただこのAクラス、清涼祭にかけるお金がハンパじゃなかった

うちのクラスの出し物はこれまた何のイタズラか知らないがメイド喫茶をすること
になった

「メイド喫茶なんてどうかな？ きつと面白いよ〜」

そう言つて愛子が強く提案するのが原因なのだが……

何故かニヤニヤとこつち見ながら言つてたのが気になるどころなのだが……

とまあそんな感じで出し物が決まったのだが準備のため最初に始めたのが教室の内装工事だった

それは有名な内装の設計士が手がけるもののようにだ

たかが学校行事の為にここまでするのは文月学園を置いて他にはないだろう

「Aクラスになって度々思うんだけど力の入れようハンパないわね」

「そうだよね。さつき先生と話したんだけど喫茶店に必要な設備やら食器やらも頼んでるらしいよ。」

一体文月学園はどんな経営してるんだらうか……

「ところでさ、本当に手伝わなくていいの？」

「いいよいいよ。優子には内装工事の視察や備品の発注の確認とかやつてもらったし
これ位はボクらに任せてよ」

「どういう訳か喫茶店の制服に関して手伝わせてくれないのだ。ここは素直に任せ
たいのだが……」

(愛) ニヤニヤリ

(翔) ニヤニヤリ

全くもって嫌な予感しかしないのはきつと気のせいではないだろう……

だがバイトとかの関係で愛子達に任せるしかないのが現状なのだ

「はあ……、取り敢えず任せるけど変なことしないでよ？」

「大丈夫！ 僕達を信じて！」

「……女同士の友情を優子は信じるべき」

……真顔で言われると余計疑いたくなる私は変なのだろうか

仕方なくその日は愛子達に任せバイト先に向かうことにした

バイト先に向かうと以前バイトの下見できた時に雅さん達と一緒に接客をしていた子が雅さん達と何やら話していた

「雅さん、お疲れ様です。 その子は？」

「ああ、木下さん。 この子は貴方より少し前から入った子ですよ。 そういえば木下

さんとは今日が初対面でしたか」

「は、初めまして。 あ、秋山小町（あきやまこまち）です……」

ガチガチで顔を真っ赤にさせながらその子が話しかけてきた

「初めまして、木下優子です。 秋山さんは今何年生？」

「は、はい。 文月学園の一年生です」

「あ、そうなんだ！ 私の後輩なんだ。 私は同じく文月学園の二年生だよ」

「先輩だったんですね。 よ、よろしくお願いします（ぺこり）」

「ああ、そんな畏まなくてもいいから。 気軽に呼んでくれていいからさ（ニコ）」

「あ…、はい！」

なんとか秋山さんの緊張を解くことができたようだ

「小町ちゃん、準備もう大丈夫なの？」

私達の会話を聞こえたのか店の奥から茜さんがやって来た

「あ、茜さん。はい。何とかある程度準備ができたのでまた出られると思います。

すみません、何日も休んじやって……」

「気にしないで下さい。なにせ清涼祭は年に一度の大きなイベントですからね」

ああ、なるほど。清涼祭の準備で休んでいたから今日が顔合わせになったのか

「お帰りなさいませ！ ぐ主人サマ〜☒」

クリスさんの元気な出迎えの声が聞こえた

「おっとお客様が来られたようですね。今回は木下さんと秋山さんがペアになってお互いをフォローしながらやってみてください。何かあれば私達がフォローしますから慌てずに」

「わ、分かりました！　が、頑張ろう！　秋山さん！」

「は、はい！　あ、あと秋山じゃなくて小町と呼んでもらっていいですか？　なんだか落ち着かなくて」

「分かった。それじゃあ私も優子と呼んでね？」

「はい！　優子先輩！」

「お、落ち着いていこ〜！」

「お、お〜！」

少し緊張地味になりながら私達二人は接客に向かった

「……清涼祭、ですか」

「あらあら。懐かしい？雅ちゃん」

「ええ。卒業してから行ってませんから」

「なら今度行って見たら？」

「……そうですね」

第42話

雅さん達の他に新たに秋山小町ちゃんとの出会いからしばらく時が流れた

清涼祭の準備もそろそろ完了間近までになっていた

まあ、ひとクラスだけ他のクラスが準備している中野球とかしていたおかげで他のクラスと比べてかなり慌てて準備していたようだが何とかなったらしい

私のクラスのAクラスは店の内装工事は完了し後はテーブルにクロスをかけたたり、容器の数の確認、制服のサイズをチェックするくらいなものなだけけど：

「さうて？これは一体どういう事なのか詳しく説明してもらいましょうか？」 ぴこぴこ

制服のサイズを確認するために試着した時に問題が発生した

まあ……問題が起きたのは何故か私の制服だけなんだけど……

問題は二点。まず第一に他の制服に比べてスカートの丈が短いこと

そして二点目。これが大いに目立つことなのだが何故か私の制服には猫ミミと
しっぽが付いていた

しかも人の音声に反応してびびること動く無駄な機能付きの……

「あれ〜？何でこうなっちゃったんだろうね？」（棒）

「……世の中には不思議がいっぱい」（棒）

「明らかにあんたらの仕業でしょうが!？」

「でもその割にはきちんと付けてるよね？」ニヤニヤ

「こ、これは制服と一緒にあつたから付けただけよ！」

「……怪しいと思えば付けなければいいのに。私の事をちゃんと理解していてくれる優子のような友人を持てて私は嬉しい」

「ううう!! ……一体誰がこんなの持ってきたのよ?」

「学園長」

あの人か!? なんつつう物をこの二人に渡してるんだ!!

「なんで学園長がこんなもの持ってきてるのよ?」

「ほら? 前にCクラスとの試召戦争の時のご褒美で清涼祭の時少し大目に見てもらえるって奴で」

あーそういえばそんな約束あったような……

「それで優子を可愛く萌える子に出来るアイテムを要求したんだよ！」

「要求しないで!!」 (泣)

こんなの付けて接客なんてしたら新たな黒歴史の誕生よ！

「と、とにかく！ 当日はこんな猫ミミは付けないしスカートが短い制服も着ませんからね！」

「えー、着てよ！すごく可愛いよ？ ねえ？」

愛子が周りにいるクラスの女の子達にそう尋ねると皆がうんうんと首を縦に降つていた

「なっ!?!」

「……試召戦争の時、優子の為に一生懸命戦ったのにな」

うっ！ ↑グサ

「Cクラス戦の時、私達も頑張ったんだけどな」

ううっ!! ↑↑グサ

「……私も頭痛いの堪えて頑張った」

うううっ!!! ↑↑↑グサ

「わ、分かった！ 分かりました！ 着ます！ 付けます！」

「いや、優子ならきつと分かって貰えると思ったよ」

「…計画通り」

「やった〜」

ううう、愛子や代表ならまだしもまさかクラスの女の子達までグルだったなんて……。なんて計画的犯行だ、トホホ……

私が愛子達の悪しき（？）計画にガクつとしていたそんな時だった

ブルブル〜

私の携帯が鳴り出した。私は急いで携帯を取り掛けてきた相手を画面で確認する
と

そこには学園長と表示されていた

この時私は本日最大級の嫌な予感をひしひしと感じ取っていた

第43話

ブルブルと振動している携帯の画面には学園長と表示されていた

な、なんか今これ取りたくないな。　　すゝごく嫌な予感がする……

でもこれ取らないと後で学園長になんて言われるか分からないしな……。　　はあゝ

私は恐る恐る「通話」のボタンを押した

「あ、はい。も、もしもし？学園長先生、あのゝなんででしょうか？」

「私だと分かっているならすぐに取りな。アンタに用がある、すぐに学園長室に来るよ
うに。以上」

そう言うと電話を切った

「誰からだったの？」

「ん？あ、ああ、ちよつとね。みんなごめん。ちよつと用ができたから少し外すね……」

「？う、うん。でも大丈夫？なんかすごく疲れた顔してるけど？」

「あ、あはは。大丈夫。……ホントはすごく行きたくないけど行かなかつたらもつと大変な事になりそうだから……」

「え、えーと、……がんばれ」

クラスメイトに見送られながら私はトボトボと学園長室へと向かった

「一体どんなことやらさせられるんだろう……」

色んな事を想定しながら歩いていると

「おや？これは木下さん。こんなところで何をしているのかな？」

そう言われて振り替えるとそこにいたのは教頭の竹原先生だった

「あ、はい。ちよつと学園長先生に呼ばれて」

「ほう・・・学園長に、ね・・・」

そう言うところちを見ながら何か考え事をする竹原先生

「あ、あの～？何か？」

「あ、ああ。すまない、少し考え事をしてしまった。そうそう高橋先生から聞いています。なんでも喫茶店をするみたいだね」

「は、はい」

「きつと素晴らしい喫茶店になるよ。なにせキミ達「A」クラスが作ったんだ。間違いない」

「・・・ありがとうございます。きつとクラスの皆も喜びますよ」

そう言ってくる教頭に私は笑顔で答えた

しかし心は全く逆だった

この竹原先生は一部の女子生徒に鋭い目つきとクールな態度で人気の先生らしいのだが私はこの先生は好きになれない

上位のクラス、それも教師の言うことをきく生徒、いわゆる「優等生」には友好的な態度をとるが下位のクラスに対しては全く逆の先生だからだ

特にFクラスに対するものは酷いものだ

前に一度体育館で演劇の練習に励む秀吉達を見かけたときふと体育館入口近くでそれを見ている教頭先生を見かけた

その時私は用事があったので教頭先生の後ろを通過しようとしたその時だった。それが聞こえたのは

「学力はクズだが猿真似は上手いじゃないか。さすがFクラスか？ははは・・・」

それを聞いた時から私はこの先生には嫌な感情しか抱けなくなっていた

「・・・すみません。急いでいますので」

「ああ、時間を取らせて済まなかったね」

「・・・失礼します」

私はそう言おうと少し早足でその場を去った

少しでもこの嫌悪感から離れたくて・・・

第44話

「木下です。失礼します」

学園長室のドアを数回ノックして部屋に入ると学園長先生が片手を下の方にかざしたまま部屋中を移動していた

「遅かったじゃないか。うん？　どうかしたのかい？　そんな不機嫌そうな顔して」

「……別になんでもないですよ。それにしても何してるんですか？」

「ん……。いや、ちよつと探し物してただけさ」

「はあ、そうなんですか」

にしても手をかざしながら室内を動きまわるのも怪しい光景に見えるな……

あ、部屋の端で止まった。何さがしてるんだろう？

よく見たらかざしてる手に何か持つてるような？……

あ！そんなことより言うことがあつたんだ!!

「学園長先生!! 愛子達になんて物を渡すんですか!!」

「うん？なんだったかね」

「猫耳ですよ！ ピコピコ動くやつ！」

「ああ、アレかい。そりや前に清涼祭の時に少しくらいなら大目に見るとの約束だったしね。それに」

「それに？」

「なかなか面白い事になりそうだしね」 ニヤニヤ

学園長がこんなんでも本当に大丈夫だろうか文月学園……

「…それはそうとアンタを呼んだ要件だが」

学園長はそう言うと言子に座り机の引き出しからメモ帳に何か書き込むとそれを見せながらこう切り出した

『はなしは簡単だよ。清涼祭で行われる召喚大会に出場しFクラスを叩き潰して欲しいのよ』

!?:……

『なぜFクラス限定なんですか?』

『しょうもない話なんだがね。 さつきFクラスのあのバカコンビがやってきてね。教室の設備の改善を要求してきたのさ』

『あたし達Aクラスがわざわざ出なくても他のクラスにやらせてはいいのでは？』

『わかってるさ。 だけどああいうバカ共にはもう一度圧倒的にそして徹底的に分からせないといけないのさ』

『せっかく試召戦争の時に実力の差を思い知らせてあげたというのに』

『ろくでもない奴らの集まりだからね。 Fクラスは。 まあそう言うことだから頼んだ

よ』

そうして会話は終了し学園長は背を向け、私は学園長室を去った

その頃Aクラスの教室はというと

「のう？工藤よ。清涼祭では姉上「だけ」猫耳で接客すると聞いたのだがどういう事か詳しく教えてもらえるかの？」ニコニコ♪

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
!!!!!!!

ガタガタガタガタガタ (クラス女子一同)

「え、えーと、これは、予想外だったな。だ、代表!?!どこいったの!?! 代表!?!」(泣

「……こちらの予測を上回るシスコン、と」↑既に避難していた

自分のクラスでえらい事になってることも知らずに優子は学園長に渡されたメモ帳の二枚目を見ながら歩いていった

全くメンドクさい事に巻き込まれちゃったな……

二枚目のメモにはこう書かれていた

「Fクラスのバカ二人を優勝出来るようにサポートすること」と

第45話

私は学園長室から出てとぼとぼとした足取りで自分の教室に向かっていた

しかしなんで学園長はあんなことをしたんだろう？

室内でのやり取りを思い出す

他の会話をしながらでの筆談。これは明らかに誰かに内容を知られないようにするため

から
そうするのは何故か？ 決まっている。あの部屋が盗聴されているかも知れない

そうでもなきやあの時私に「話し合わせろ」というメモなど見せないはずだ

学園長室に入った時に見せた学園長のあの行動

あれは盗聴器を探すためのものだったのだろう

仕掛けられていた場所はたぶん学園長がじっと見つめていた部屋の端付近

……なんにしろこの清涼祭の裏で何かが起ころうとしているらしい

私はそれにまんまと巻き込まれてしまったみたいだ

「ああ……。本当に災難続きだわ……」

「なかなか危なかったけど negotiation（ネゴシエーション）完了だね！」
ピ
シッ

「ありがとう！ 工藤さん!!」

「貴方は私たちの恩人だよ!!」

「こ、怖かった……（ガタガタ）」

憂鬱な気分で教室に戻ってみるとガタガタと震えるクラスメイトがいたり、愛子に涙ながらお礼を言うクラスメイトがいたりと訳の分からない状況になっていた

「え、えくと？ これは一体どういう事？」

「あ、優子。 お帰り〜」

「愛子、何かあったの？」

「え!? えーと、なんと言ったらいいか……。うーんしつと魂に燃え上がった優子
フアンの抗議? みたいなの？」

「……なにそれ」

「ま、まあそれは何とかなったから気にしないで」

「すごく怪しかったが清涼祭を翌日に控えているので今日はそのことに追求はせず
明日に備えて各自帰ることになった」

「あー、召喚大会か」

「うん? 召喚大会に出るの? 優子」

「まあ、ちよつと出るようになってね。愛子が出るの?」

「うん。 こういう面白そうなイベントは見逃す訳にはいかないからね♪」

あちやく、坂本君達を優勝させないといけないのにもういきなり強敵登場確定とは。 どうしよう

「代表はどうするんだらうね？ 出るのかな？」

「どうなのかしらね？ 聞こうと思って一緒に帰ろうと思ったんだけど……」

一緒に帰ろうと誘おうと探したのだけれど何故か教室に代表の姿はもうなかった

「ボクの予想じゃ出ると思うよ？ なんかチラシみて凄い目つき変わってたし」

「目つきが、変わった……？」

なんだろうスゴく、いやかな〜り嫌な予感がする……

「あ、あのさ？　ちなみにどんな目つきになってたのかな？」

「うーん、そうだね。あえて言うなら……魔王さえも屈服させちゃうくらい？」

「今すぐチラシ見せて!?　今すぐ!!」

優子がカバンからそのチラシを出してもらい見せてもらい召喚大会の事が書かれてある部分に目を通すと

えーと？景品が賞状とトロフィーと白銀の腕輪？どんな腕輪か知らないけどこれはまあほつといてもよしと。えーと最後が…

「如月ハイランド…プレオープン…プレミアムチケット？」

「あ、そこ知ってるよ。今建設中の巨大テーマパークだよ。日本一高い観覧車や世界で三番目に速いジェットコースターできるとかで今話題になってるよ」

「ふうん。それでこのプレミアムチケットに何か特典とかある?」

「そりゃあグラウンドオープン前に遊べるから人混みとか気にしないで良い所じゃないかな?他に何か書いてないかな?」

愛子にそう言われてチラシを注意深く見てみると

カップルで行くと結婚式が体験できます♪ と楽しげに書いてあった

ガクツ!?

「ど、どうしたの優子!? いきなり落ち込んだじゃって」

これが狙いか? (泣) 日頃坂本君との結婚を目論む? 代表にとって願ってもないチャンスに違いない

入手すればすぐにでも行くだろう。その場の勢いで本当に式を挙げる事も考えられる。……恐らく半強制的に

そんな闘志?をあげる代表に召喚大会辞退してくれなんて言える訳がない。……私だって命は惜しい(汗)

とにかくこれで二年で一番敵に回してはいけない人物を敵に回すことに……

学園長の頼まれごとの難しさに痛感しながら家路につき、そして清涼祭当日を迎えるのだった

木下家のクリスマス

これは優子、秀吉が高校一年の時のクリスマスのお話

木下家では毎年クリスマスは家族で過ごす事が風習になっていた

それは共働きの中々家族揃って集まる事が少ないのでクリスマスくらいは家族団欒で過ごすという訳だ

「お母さん。 ローストチキンこんなもんでいい？」

「おお♪ 上出来、上出来。 こつちもサラダ完成♪」

「シャンパンの準備OKだよ」

「グラス、取り分け用の皿、フォーク……、うむ。完璧じゃ」

テーブルには色んな料理、飲み物、食器などが運ばれ準備は万端となった

そして各自がクラッカーを持ち

「それじゃあ、始めますか！　せーの！」

「Merry Christmas♪」

同時にパパン!!とクラッカーが鳴り家族揃ってのクリスマスが始まった

「いや〜しかしこうやって家族揃って食卓を囲むのも久々ね」

「ごめんな、父さん達が早く帰って来ればいいんだが……」

済まなそうに言うお父さん。　お母さんも申し訳なさそうな顔をしていた

「仕方ないよ。それに私たちの為に頑張ってくれてるんだし。だからこそこういう時は楽しまないよ」

「姉上の言うとおりにじゃ」

そう言うと二人に笑顔が戻った

美味しい料理を食べたり、お父さんが買ってきたシャンパンを飲んだり、学校であった事を話したりなど穏やかな時間が流れた

「ところで優子。いつ彼氏さん紹介してくれるのかな？」

「何言ってるのよお母さん。そんなのいないわよ」

「えー？気になる子とかいないの？お母さんいつ来るのかたの…」

ドス!!

なんか凄い音がしたので音がしたほうに視線を向けると

「姉上に近づくと悪い虫は……ワシが斬る!!」

頬を赤くして秀吉がナイフを刀を小刀を持つように持ってテーブルに突き刺していた

「……お母さん。あいつ酔ってる?」

「……ええ。間違いなく酔ってるわね。そしてお母さん、優子に彼氏出来る前になんとかしないといけない問題に酔いが覚めちゃった」

「あれ? ……もしかしてまだ秀吉には飲ませちゃだめだったか?」

「お父さんが飲ませたの!? アルコール入ってたのこれ!?」

「た、確かに入っているがほんの少し入っている程度のやつだぞ？」

「こいつ、相当弱いのだよ！ ああ、こら！ また刺そうとしない!!」

ZZZZ……ZZZZ……

「やっと寝たか」

あれからしばらくして酔いが回ったのか秀吉はすうすうと寝てしまった

そんな秀吉をお父さんは愛おしそうに秀吉の頭を撫でながら私の方を見ていた

「そっか……、もう高校生になんたんだよな。こいつら」

「ええ、本当に。子供の成長つて早いと言うけど本当ね」

そんな様子を見てお母さんも微笑んでいた

「小さい頃は人見知りでよく優子の後ろに隠れてたあの秀吉がいまや役者目指してるもんな」

小さい時に両親に連れられて見た演劇に感激し恐らくその時からだろう、役者になると決めたのは

幼少の頃の秀吉は今とは違い自分の意見を強く言える子じゃなかった

でもあの演劇を見たあと両親に

「役者…やってみたい。ううん、役者になりたい！」

いつもとは違って大きな声でハッキリとそう言った

かなり勇気を出して言った発言だったのだろう。そう言った秀吉の足がガタガタと震えていた

多分両親に「何をバカなことを」とか「やめておけ」と却下されると考えていたのだろう

しかしお父さんが言った一言は

“ やれるところまでやってみろ ”

だった

次の日から秀吉はテレビのドラマの役者のセリフやアニメのヒーローの真似を始めた

最初はただ同じセリフを言うだけだったがその内その役者の声の大きさ、発音、アクセントを

ヒーローのほうは必殺技のポーズや仕草を少しずつ取り入れ、みるみるうちに上達し気づいたときに本物そっくりな所までできていた

それらが終わると今度は舞台のビデオを見たり、生のお芝居などを見に行ったりなどして少しずつ経験を積み今の秀吉へと形づけていった

「優子のほうは小さい頃から妙に落ち着いていたから逆に少し心配だったけど良い娘に育ってくれて良かったよ」

「あ、あはは……。どうもありがとう」

「まあ子供の成長を見るのは親として嬉しいもの。なんだけど……な？」

「ええ。嬉しいのだけどその分少し、そう少しずつだけど私達の手から離れて行っちゃ

うのは少し寂しいかな」

来るであろうその時を考えたのか少し寂しそうな顔をする二人

「……大丈夫だよ、お父さん、お母さん。どんなことがあっても私達はお父さん達の子供だよ？」

「……ふふ。まあ、まだまだ二人を嫁にくれてやる気はないからな♪」

「お、お父さん……」

「あのね？お父さん？ あれでも「一応」秀吉は男の子なのよ？」

あれでもって……お母さんなにげにひどい……

「ははは。女優デビューしちゃったりしてな？あははは」

「……………」
「……………」

「ははは……はは……。あ、あれ？ど、どうした？二人とも？」

お父さん、それ全然笑えないから……

第47話

ちゅんちゅん……

カーテンの間から光が差し、スズメが鳴き、朝が訪れたことを知る

「はあ……」

来ちゃいました。 ええ、来ちゃいましたよ、清涼祭が……

どうにもならない現実にはため息を零しながらベッドからおり、リビングへと向かった

「はあ……」

「朝一番からため息とはどうしたのじゃ？ 姉上？」

「ん？ああ…たいしたことじゃないわよ」

「ふむ。ところで姉上は今日の清涼祭はどうするのじゃ？」

「二日目はクラスの出し物に専念して、二日目には召喚大会に出ないといけないから忙しい行事になるわね」

「召喚大会にでるのかの。ところで相方は誰なのじゃ？」

ん？相方？

「相方って？」

「……もしかと思うが姉上。召喚大会は二人ペアでないと参加できんぞ？」

……

「……え？」

「ま、まさか相方まだ決まっておらんのか？」

し、しまったああああああ

!!!!!!!!!!

昨日は色んなことがあつて召喚大会の参加条件聞いてなかった!!

「まずい、まずい（汗）。と、とりあえず愛子達に相方決まっているか聞かないと」

急いで携帯で二人の所に電話をかけたが……

「二人とも相方決まってた……。え、えーと大会参加応募は清涼祭一日目終了までに
出さないといけない、か。ど、どうしよ（泣）」

「……………」

そんなこんなで少し時が過ぎ、いよいよ清涼祭開始十分前と迫っていた

「優子、召喚大会の相方決まった？　なんか朝すぐく焦ってる感じで電話かけてきたから気になっちゃって」

「え!?　あ、あー、アレね。　うん。とりあえずなんとかかなりそう。　……それよりも今はこれの羞恥心に耐えないと……」ぴこぴこ

「大丈夫だって♪　よく似合ってるって」

「……自信を持って優子。　今の優子はマスコットとして輝いてるから」

「似合っていないし自信なんて無理だから……、　って!!　今マスコット言った!？」

ピンポンパンポーン♪

い
只今より清涼祭を開催いたします。各クラスは各自の出し物の配置についてくださ

「さあ、始まるよ!! みんな!! 張り切っていこ〜!!」

「おーー!!!」

「お、おー(泣……)」

開催してから暫くしてとある校内

「久々に来たけど清涼祭はやっぱ賑やかで楽しいよね〜ミヤビ♪」

「そうですね。お店お休み貰ってきた甲斐がありましたね」

「じゃあどこから回る？」

「そうですね……。是非行ってみたい所があるのですが」

「行ってみたい所？ どこどこ？」

「はい。ここなんですけど……」

校内で渡された清涼祭のマップに指差した所は

2—Aの教室だった

ちょこちょこ気になるあの日の出来事

これは二年に上がる日より前の出来事

それは新たな年が来て正月が去り冬休みが終わった次の月にくる一大イベント、バレンタインの前日から始まる

「そういえば明日バレンタインだよね？」

「あ、そういえばそうね。なんかついこの前まで正月だったのにいきなり来た！って感じね」

「・・・今年こそ雄二に渡してみせる」

「お♪代表気合入ってるね♪どんなの作るの？」

いつものように昼休みに優子、愛子、翔子は机をくつつけてお昼を取っていた

「・・・秘密。当日のお楽しみ」

「それは楽しみだね♪ボクは買って済ませるかな。優子はどうするの?」

「うち? ちは作るわよ? 買うより作ったほうが安いし。うくんでもなく」

「どつたの? 優子」

「作るときすごくく邪魔するやつがいるのよね・・・」

「???」

この日学校が終わると優子はチョコの材料を買って家に帰ると服を着替え、いざチョコの製作に取り掛かろうとすると毎年必ず決まって・・・

(優) 「―。―。；。・。・。・。」 チョココ製作中

(秀) 「(？^？) じーーーーー」

チョココを作っている隣で秀吉がじーと見てくるのだ

「あ、あのさ秀吉？なんか用？」

「いや、なんでもないのじや。姉上は気にせず作業すると良いのじや」

「いやいやいや!! 気にするから! っていうかこれもう毎年やってる会話だから! ……毎
回言ってるじゃない、別に男の子にあげる用はないって」

「いや! もしかしたら今年はあるかもしれないのじや! 姉上は嘘がうまいからのう。
じーーーーー」

「(気になって集中できないし……うん?……ムッフ、よくしなら……)」

優子は冷蔵庫からあるものを見つけるとそれを包み丸め湯せんして溶かしてあったチョコをコーティングし表面をココアでまぶした

「ほれ、アンタの為に一個作ってあげたからこれ食べたらあっち行きなさい」

「おおお、なんか急かして作らせたみたいで悪いのう。では頂きます」

ぱくつとそれを口に入れる秀吉

「うんうん。チョコレートの甘味のあとに強烈な酸味が、つてすば——!!!」

秀吉に渡したそれは梅干をチョコでコーティングした物だった

「これに懲りたら邪魔しないように。またやったらまたこれ食わせるから」

「ううう．．．」

そんなこんなで時間が経ち、そしてバレンタイン当日

の放課後

「さーとと．．．この後どうすつかなー。もうちよつと学校にいるけど、どうすつかなー。

（棒読み）

「か、帰ってもする事ないしなー。屋上でも行ってみようかなー俺。（棒読み）」

「お、俺も特に意味はないけど校舎裏にでも行こうかなー。（棒読み）」

「あからさまなアピールだね、あれ．．．」

「ええ．．．、女子ほとんど帰った後だけど」

放課後、私と愛子が見たのは

放課後の廊下を聞こえるくらいの声でそう言って歩いていた男子達だった。必死だな……

そんなメンツも入ればこちらでは……

「女子からチョコを貰った者は異端者だ!!刈り取れ!!」

「オオオオオオオオオオ!!!」

「ひええええええ!!!」

覆面を被った怪しい集団が武器を持って一人の男子生徒を追い掛け回していた。まあそれ吉井君なんだけど彼のことだし何とかするでしょう……

「それにしても優子が作ってきたトリュフ美味しかったよ♪」

「それだったら愛子が持ってきたあのチョコだって美味しかったじゃない♪」

「私達はその日のお昼休みにお互いが持ってきたチョコを交換していた。いわゆる友チョコである」

私はトリュフを、愛子は専門店で買ってきたチョコを、そして代表は・・・

「え、えーと、代表？それってウエディングケーキ？」

「うん。私の愛を形にした。これを雄二に渡すの」

それはハート型のチョコのウエディングケーキだった。・・・愛されてるな坂本君

そして今現在、代表はそれを渡すために校内を巡回している。あのケーキを持って

「さてと。それじゃそろそろ部活だからボク行くね。またね優子」

「ん。部活頑張ってる愛子」

そう言って愛子と別れ校内をでて校門の所まで行くと秀吉が誰かを待っている様子でそこに居た

「あれ？秀吉、アンタ部活は？」

「あ、姉上。今日は部活休みじゃったから一緒に帰ろうかと待っておったのじゃ」

「そうなんだ。じゃ、帰りますか」

「うむ」

そうしてふたりで帰ることになったのだが・・・

「ところであの手作りのチョコ誰に渡したのじゃ？」

「だから、友達に渡したただけだって言ってるじゃない」

帰る中何度もこう聞いてくるのである

「はあ……、全く仕方ないわね」

うんざりした顔で優子はカバンの中から何かを取り出した

「ほれ」

そうやって取り出したのは可愛いらしいリボンに封されたキャラクターが印刷されたある紙袋を渡した

「なんじゃこれは？」

そうやって秀吉がりボンを解き中身を見ているとそれはトリユフだった

「安心しなさい。梅干じゃないから。作りすぎたから家に帰ったらアンタにあげようと

思ってたね。でもしつこいから今あげとくわ」

「わしの分なのじゃな!?!・・えへへ」

そんな弟の顔をみてやれやれと思う姉であった

「ほら、帰るわよ。秀吉」

「うむ、分かったのじゃ♪」

「あ、言ってきましたけどそれ家族として渡すんだからね!」

「分かっておる♪分かっておる♪」

ちよこちよこ気になる日であった

第49話

何故あの時、私はあんな事をしてしまったのか……

私は数分前の自分の判断に後悔していた

そう、清涼祭の開始の合図が鳴りいよいよ開店しようとしている時に突然それは言い出したのだ……

「そうだよ！ にゃんだよよ！ にゃん！」

そう言って友人が訳の分からない事を言い出した

「なんなのよ？ 愛子。突然変なこと言い出して」

「せつかくその格好してるのに語尾に「にゃん」が付いてないのはおかしいよ!」

「……………」

何を言っているのだろうか、こいつは……。只でさえこんな格好をしてしまい私の黒歴史に新たなページが生まれてしまったというのに

私にまた新たなページ作れというのかアンタは!!

「えー絶対似合うって。 ねー? みんな」

愛子がそう皆に問うと、うんうんと首を縦に振るう人がいたり萌えくと言っていたりする奴まで現れた

「なっ?!? そ、そんな事やらないわよ!?!」

「そんな事言わずにやってよ。　ね？」

「クラスの売り上げのためにそこをなんとか!!」

「絶対可愛いから♪　お願い！」

な、なんかやらないといけない空気になりつつある。　な、なんとか回避せねば……。
もう増やすわけには!!

「……優子、今更一ページ増えたところで大差ないと思う」

「それ慰めになってないよね!!　　とか心読まないで!!」

とそうこうしていると

「お客さん来たよー！」

店の前で見張りしていたクラスメイトが慌てて入ってきた

「さあ、いよいよ開店だよ！ 頼んだよ優子」

「え!?! ええ!?! い、いや、ちよつと!?!」

「いけ！ ゆーにゃん!!」

「ああ!! もう!!」

???
s i d e

「えーと、ここだよね？ 2—Aの教室って」

「うん……。　　ここのはずだけど」

2—Aの教室の前に二人の女子生徒が様子を伺っている

一人は小柄だが元氣溢れる様子で、もう一人のほうは長身だがおとなしそうな目の女子生徒

「さっそく入ってみようか！　小町ちゃん！」

「う、うん……。　でも何も言わなくていきなり来ちゃったら木下先輩の迷惑にならないかな？」

「大丈夫♪大丈夫♪　私達はお客としてきたんだからなんの問題もないよ。……それにライバルであるあの人の動向も監視しないと（ボソ）」

「永姫ちゃん？　どうかしたの？」

「ううん！ なんでも♪」 エヘッ

「？」

「じゃあいくよ？」

「うん」

「たのも〜!!」

二人が教室の扉を開け、目の前に広がった光景は

お、お、お帰りなさいませにゃん♪ お嬢様方♪……!? ぴこぴこ

「……………」

「……………」

物凄く見覚えのある人物がメイド服に猫耳猫しっぽが付いた服装でしかも語尾に
にゃんとしてつけて自分らを出迎える光景であった

今この場はなんと行っていいか分からない空気に包まれていた

「……………」ちらのお席にどうぞ……………ですにゃん」ぴこぴこ

「あ、は、はい………」

「……こちらがメニューです、にゃん」ぴこぴこ

「ど、どうも………」

「………」

「………」

「………」

（く、空気が重い……）

（ど、どうする？ 永姫ちゃん）

(ど、どうするって、もう適当に何か注文してこの場はどうにかするしかないよ)

(そ、そうだね)

「そ、それじゃあこの本日のおすすめケーキセットをお願いします!」

「わ、私もそれで」

「かしこまりました。しばらくお待ちください……にゃん」ぴこぴこ

そう言うのとぼとぼとした足取りで猫耳メイドはオーダーを伝えるとスタッフの控え室に入っていった

「あのさ、注文取ってる間、木下先輩の表情見えた?」

「ううん。なんか俯き加減だったからあまりよく見えなかったけど……」

「事前に来ること伝えておいたほうがよかったのかな？ 私的にはちよつとしたドツキリのつもりだったんだけど……」

「なんだかメンタルな部分をおもいつきし削り落としちやつた感じだったよね……」

「この後どうしようかと二人が悩んでいると

「……お嬢様方、オーダーはお決まりでしょうか？」

「あ、はい。今さつき係りの人にオーダーを頼みまし……」

「あつ……」

永姫が顔を合わせた人物は優子のメイド服とは少し違ったデザインのメイド服を着た翔子であった

目が合った瞬間、二人の顔が笑顔になった

それはもう不気味なくらいに……

「……何しに来たの？」

「先輩達が可愛いメイドさんのお店をやると聞いたので一番に駆けつけてみたんですよ」

「……そう」

「(おおおおおおおお……)

(あ、あわわ!?!二人とも笑顔なのになんなのこの地の底から聞こえてきそうな轟音は!?)

その時の光景を隣にいた秋山小町にはこう見えたという

にこやかに笑う二人の後ろで竜虎が相對する絵が見えたと……

第50話

(ど、どうしよう……)

秋山小町は目の前で起っている事に困惑していた

友人と自分のひとつ上の先輩の二人がなにやら重い空気を作っているからだ

しかもお互い笑顔で牽制しあっているので余計に怖い……

(だ、誰かこの状況なんとかして)

そう祈っているとそれが通じたのか店員の一人がこちらで頼んだ注文の品を持ってやってきた

「ご注文のケーキセットお持ちしました。　　ってもう！　なにやってるの？　代表」

「……愛子」

「お客さん達に怖い顔しちやダメだよ？」

「……怖い顔なんてしてない」

「じゃあ怖い笑顔になってました」

翔子はうっ……と気まずい顔になりそれを見ていた永姫はそうだそうだと言わんばかりにニヤニヤしていると

「…永姫ちゃんもうちの代表とおんなじ位怖い笑顔なつてたよ」

「えっ!?!　……な、なつてました？」

「うん。君の隣のお友達が怖がる位には。」

そう言われてサツとこつちを向くと

「……そんなに？」

「……うん」

私がこういうとなんか凄く頭を抱えて唸ってた

そんな時、ライトグリーンのショートヘアのメイドさんが話し掛けてきた

「そういえば君とは初めてだったよね？ 初めまして！ 二年の工藤愛子です。よろしくね」

「あ、は、はい！ 秋山小町です。よろしくお願いします」

「んで、こっちのさつきまで怖い笑顔振りまいてたメイドがうちのクラスの代表、霧島翔子」

「……怖い笑顔なんてしてない」ぷい

さつきのことを指摘されて拗ねているこの人が霧島翔子さん……

なんか可愛い代表さんだな……

「ところでさ、小町ちゃん達はどうやってうちのクラスの出し物知ってたの？」

「ああ。それはバイトの先輩から木下先輩がメイド喫茶やるみたいだよって教えてもらって」

「なるほどね、それでボクらのお店に来てくれた訳だね」

「はい。……あのつかぬことをお聞きするんですが」

「ん？」

「なんでこの二人は険悪なムードを作ってしまうんでしょうか？」

少し目を離しているとまた二人がバチバチと火花でも散ってるんじゃないかと思うくらい視線を交差しあっていた

「あ、あはは。これはなんとというか恋のライバル故につてやつかな」

二人の様子を見ながら工藤先輩は苦笑いでそう答えた

「恋のライバル、ですか」

「うん。　どうゆう経緯かは知らないけど同じ人を好きになっちゃったみたいで。　普段の代表は大人しいんだけど想い人のことになるとどうも暴走しちゃうタチで……」

「永姫ちゃんもそういう所ありますね……」

「でもまあ身内の暴走よりマシかもね。……姉思いの弟とか弟とか弟か」ガタガタ

「ど、どうしたんですか!? 工藤先輩!？」

「だ、大丈夫。ちよつと昔のことを思い出したただけだから」

「??？」

「くしゅっ」

「どうしたの？ 秀吉。風邪？」

「いや別に風邪はひいてはおらぬのじゃが」

「あゝ 誰かが噂でもしてるんじゃない？ ほら秀吉可愛いから」

「わしは嬉しくないのじゃ！」

「あはは。 あ、でももしかしたら秀吉のお姉さんのことかもね。 ムツツリー二の話じゃAクラスはメイド喫茶でしかも猫耳のメイドさんが出迎えて」

くれるみたいだよと明久が言おうとした時

何かがガシツと強い力で両肩を掴んだ

「アキヒサヨ、ソノハナシクワシク」

目の前には瞳をハイライトと化した友人が居た

第51話

「あ、あのう、ところで木下先輩は今どうしてるんですか？」

小町は話を変えようと気になっていた優子のことについて聞いてみた

「ん？ 優子？ ああ、なんかどこかのボクサーみたいに真っ白になってたね」

ああ……、やっぱり心の傷は大きかったか……

「小町ちゃんは優子のこと知ってるの？」

「あ、はい。 同じバイト先で知り合って」

「ふうん。そっかく♪」にやにやり

「え？ な、なんですか？」

「小町ちゃん。 ちよつとお願ひ、あるんだけどね？」

「あ、あはは……。 初っ端から知り合いに恥ずかしい所見られるあたしって一体……」

只今、木下優子は真っ白になっていた

それはマツチ棒が燃え尽きた如く……

友人にいきなり言われ、場の流れでやってみたら一発目から自分のよく知る後輩に見

られる

メンタルを削り落とされるには十分なくらいの失態である

コンコン……

控え室のドアからノック音が聞こえてくる

「は、は〜い？」

「やつほ〜♪ 復活した？ 優子」

私がこんなことになった元凶が何食わぬ顔で入ってきた

「だ、誰のせいでこんな事になってると思ってるのよ。ううう」

「ごめんごめん。まさかいきなり優子の知り合いがくるなんて思ってもなかったから

さ」

「う〜う〜。これじゃあ接客なんて無理」

「大丈夫♪ 解決策はもうあるから」

愛子の足元には大きな袋がひとつ置いてあった

「? なにそれ?」

「むふふ。すぐにわかるよ。代表、ちよつと手伝つて〜」

それから十分後……

「な、な、なんで……。これが……」

「むふふ」

「……愛子、いい仕事してる」グッジョブ！

「いや、演劇部に無理言っ借りてきた甲斐があつたよ」

今、目の前にある鏡に映つてある自分に戸惑っている

それは私自身すごく見覚えのあるものだった

ブラウンのカラーコンタクトに長い髪を後ろに束ねポニーテールにしている自分

それはお店で接客するときの現在の設定だった

「ね？ これなら優子だつてばれないし安心でしょ？」

「え、ええ……。そうね」

確かにこれなら知り合いに会ってもばれにくいだろ……

でも……

なんでアンタがバイト先のことまで知ってるの!? 愛子!!

「ふふふ、なんで知ってるって顔してるね。はい、こちら情報提供者さんです」

「ど、どうもです……」

こ、こまちちやああああんんんん!!!
なんてことを!! (泣)

「バイトの時と同じ容姿になればバレにくいからと工藤先輩に言われて。これなら大丈夫ですね!先輩!」

「う、うん。 そうだね」

この子は私のことを思っただけなんだ。この子は悪くない、うん……（泣

ええい！もうやけだ！考えるのは一旦置いておいて接客に集中しよう！

「そろそろ休憩やめて戻ることにするよ」

「頑張ってください！ 木下先輩」

「うん。ありがとう」

「今度は大丈夫だって。そうそうバレたりしないって」

「はあ……、そう願うわ」

ぴこぴこするアレをつけて私は控え室を出た

「次、女性二名のお客様が入店します！ だれかお願い！」

どうやら私が休んでいる間忙しくなっていたようだ

「OK！ 私がいくよ」

「よろしく！ つてあれ？ 誰？」

「うちのクラスにあんな子いたっけ？」

よし、とりあえずクラスのみんなにはバレてないみたいね

これなら知り合いにあっても今度こそ大丈夫よね！

「おかえりなさいませ、お嬢様方！」

しかし、悲しきかなこの世の中にはこんなことわざがある……

「おや？　これは思っていた以上ですね。クリス」

「うわ、猫耳に猫しっぽ！　あ、今動いた!!」

一度あることは二度ある、と……

第52話

「おや？ これは思っていた以上ですね。クリスマス」

「うわー、猫耳に猫しっぽ！ あ、今動いた!!」

「ッ!？」

優子は今日という日を呪った。なんで今日に限って連続で知り合いに会わねばならないのかと

「耳やしっぽがぴこぴこ動いて可愛いね。ねえユー」

「……お客様、名前はご法度、ですよ？」

クリスマスがユーコと呼ばうとした所をシーと人差し指を立てて、もう片方の手でクリスマス

の口を軽く塞いだ

前回とは違い、思考が踏みとどまり冷静な判断が出来ていた

「(こくこく) そうだったね。　ゴメンネ？」

「いえいえ。　ではお席にご案内しますね」

そう言い優子は教室でまだ客があまりいない端の席に案内した

「……なんで雅さん達がここにいますか？」

二人にメニューを渡す際、小声で尋ねてみた

「それは私達がここのOGですから。　たまには母校のお祭りにも行ってみたいと思
います」

「賑やかで楽しいよね、清涼祭」

「お二人ともこの卒業生だったんですか!？」

「ええ。そうですけど？ 言ってませんでしたか？」

「初耳ですよ！」

「それにしてもさっきのユークの驚いた顔面白かったよ♪」

「ううう、早急に忘れてくださいクリスマスさん」

「こうやってお店と同じように二人が優子をいじっていると

「おや？ 懐かしい顔がいるじゃないか」

振り返るとそこには海千山千、もとい学園長がいた

「木下、アンタさつき失礼なこと考えてなかったかい？」

「いいえ、とんでも御座いません」

ニツコリ営業スマイル。向こうで培ったスキルがこうやって生きてくる

「おや？ これは学園長。まだご存命でしたか」

「……つたく。相変わらず口が悪い餓鬼だねアンタは」

「いえいえ、学園長ほどでは」

「五月蠅いよ。で、アンタは少しも変わらないね？ 上城」

「そ、そんなことないよ！ これでもちゃんと成長してるよ！」

「ほう。 で？ どこが成長したんだい？」

「……身長が1cmほど」

「大して変わらないじゃないか」

学園長にそう言われてガーン!!とショックを受けるクリスさん

「大丈夫ですよクリス。 ここの根本まで彼果てたご老体に比べれば貴方はまだ無限の可能性を秘めています。 これからですよ」

「……どうやらアンタは法廷でアタシと戦う気なのかね」

あ、血管がびくびくさせてる。 これはやばいかも……

「あ、あの！　なんか学園長と雅さん達なんか親しい(?) 感じに話してるみたいですけど在学中の時もこんな感じだったんですか？」

話を変えようとふと疑問に思った事を聞いてみた

「ええ。私達はここに在学中は生徒会に入っていました。よく学園長の無理難題に手を焼いてましたよ」

「嘘言うんじゃないよ。あれは生徒が出した問題などを生徒会に解決するようにしただけじゃないか」

それって只単に押付けなんじゃと言いつうになつたがこの学園のボスがなんか睨んできたのでやめといた

「問題といえどアンタらも昔トンでもないことやらかした問題児じゃないか」

「……そんなことありましたか？」

「あ、あはは……」

学園長にいわれ目をそらす二人

「問題児？ え？ 雅さん達が、ですか？」

「ああ。Fクラスの吉井、坂本と同レベルだと思えばいいさ。松島、上城。久しぶりの清涼祭だからといって後輩に変なこと吹き込むんじゃないよ」

「善処します」

「は〜い」

二人にそう言う学園長は教室から出て行った

「木下さん。さつき学園長の会話に出てきた吉井、坂本と呼ばれる人物とはお知り合

いですか？」

「え、ええ。一応は」

「それでしたらよければその二人を紹介してもらえませんか？」

「いいですけど、どうしたんです？」

「いや少し興味を持ちまして。学園長に問題児と呼ばれる生徒がどんな人物かと思いまして」

「確かに。どんな子達なのか気になるねミヤビ！」

「……多分、予想されてるのは違うと思いますけどね」

あの後、愛子に尋ねてみるとお昼頃からなら休憩に入っても大丈夫と言っていたのでお昼頃にまた合流することになった

そしてどたばたと時間が過ぎ約束の時間になった

「すみません。お待たせしました」

「いいえ、お気になさらず。こちらがお願いしたことですから」

「あー!? ユーコ、着替えちゃったの?」

今の私の格好は通常の学生服に着替えていた

「残念です。 てつきり宣伝もかねてあの格好で来るものかと……」

「そんなことしたら私のハートが持ちませんよ! ほら行きますよ!」

二人をFクラスに案内しようとした時、横から声を掛けられた

「すみません、お姉さん。 ちよつと教えて欲しいことがあるんです」

振り向くとそこに小柄な女の子がいた

「ん？ 何かな？」

「あ、あの、お兄ちゃんを探しているんです！」

「お兄ちゃん？ お兄ちゃんの名前とかわかるかな？」

「あ、あう。名前わからないです……」

「そっか。 んんなら何かお兄ちゃんの特徴とかないかな？」

私はしやがみ、沈み込んでその子の目線に合わせ優しく問いかけてみた

するとうくと暫く考え込んでいたがなにやら思い出したのか表情がぱあつと明るくなりこう言った

「すつごいバカなお兄ちゃんです！」

第53話

「すつごいバカなお兄ちゃんです！」

「すつごいバカなお兄ちゃん？」

「はいです！」

すつごいバカなおにいちゃん、で検索

……

……

………検索終了。検索件数が多すぎます。

ダメ、ダメだ。私の中で検索してみたが該当者が多すぎて誰なのか分からない

でもまあ……

「そっか♪ なら私達と行き先は同じだね」

Fクラスにいけば居るでしょ。あそこはバカには困らないクラスだし

新たに小柄な女の子を加えてFクラスに向かうことになった

「へえ、葉月ちゃんはドイツから来たんだ」

「うん。家族一緒にこっちに来たです」

へー、この子葉月ちゃんっていうのか

Fクラスに向かう途中でお互いに通じるものがあつたのかクリスさんと葉月ちゃん

が話しこんでいた

それにしても……

「クリスちゃんはイギリスから来たんだ。日本語上手です」

「えへへ、ありがとう。こっちに来てから色々とミヤビに教えてもらったからね」

二人の仲睦ましい様子を見てやっぱりこう思ってしまう……

クリスさん、どうやっても葉月ちゃんと同級生もしくは下級生にしか見えません……

あれで女子大生ですとって一体どのくらいの人が信じてくれるのだろうか……

そんなことを考えているうちに旧校舎のFクラスの近くまで来ていた

普段はまるで廃屋のような教室だが清涼祭のためか綺麗に清掃され飾り立てられて

いた

お店の名前は中華喫茶ヨーロッパ

中華なのにヨーロッパ？

「ここはFクラスになったのですか。Eクラスは隣になったんですね」

「え？ 雅さん達の時は違うんですか？」

「ええ。私達が居たときはここはEクラスでしたから。年々入学者が増えたからクラスを増設したのでしょう」

「まあこの学園には他校比べて受験生を集めるネタが色々ありますもんね」

「……まあその反面問題も抱えています」

問題？ 一体なんの問題かと聞こうとしたがFクラスに入っただけだったので急いで後を追いかけたが入り口あたりで雅さんが足を止めた

「ど、どうしたんですか？ いきなり止まって」

「どうやら我々は悪い時に来てしまったようですね」

雅さんが向いている視線の先を追うと

「こんな店営業できなくしてやるぞ！」

「そんな！ そつちが勝手に食べたくせに！」

なにやら吉井君達と客が言い争いをしていた

確かに不味い。 店内に生徒や生徒の保護者が居る状況の中でこんな騒ぎを起こせば……

「なんだなんだ？トラブルか？」

「……お店変えようか？」

「こういうことになってしま……」

そんな中、ガタツと音を立て一人この場から離れようとしていた

あれは教頭先生……？

「……こんな時に何処に行かれるのですか？ 教頭先生」

出て行くこうとする先生を雅さんが呼び止めた

「お、お前は松島!!? なぜ此処に！」

「私もいるよ」

「上城までいるのか！」

二人の登場に驚きを隠せない教頭先生

しかしこの三人、過去に何かあったのだろうか

「私達はここの卒業生なんですから清涼祭に来ても何の問題もないはずですが？」

最初は驚いていた教頭先生だったが今は鋭い目つきで二人を睨んでいた

「それよりもあの通り学生同士のトラブルが起っているのにまさか何もせず黙認するおつもりじゃないですよ？ 保護者の方々が見ている中で」

保護者という部分を強調し周りに聞こえるように話す

そうなるのと周りの目がこちらに向くわけで……

「なっ!? そ、そんなことある訳ないじゃないか! これから彼らを止めに行こうと思っていた所なのだよ。勝手な推測は止めたまえ!」

「そうでしたか。それはすみませんでした。ではお願いできますか?」

怒りを露にする教頭先生に対し雅さんはお店と同じ、いやそれ以上の笑顔で対応していた

「ただどその笑顔はこちらの気のせいなのだろうかすごく怖いものを感じたのは何故だろうか……」

「常村君、夏川君。一体何をしているのだね! 君達三年生はこんなところで油を売っていいのかね!」

「え?」 「な、なんで!」

吉井君達と言ひ争いをしていた客はどうやら三年の上級生だったらしい

注意されて驚いた様子だったけどなんだろこの違和感

普通こんなトラブルを起こせば先生がくるのは予想できる筈なのに……

なんでこんなに驚いているんだろう

そう考えている間に教頭先生が二人を引き連れて教室から出て行つた

「さつきは一体なんの騒ぎだったの？ 吉井君」

「あ、木下さん。さつきの三年の上級生が勝手に食品サンプル二つも食べちゃつて」

「食品サンプル？」

テーブルの上には小さい皿と大きい目の皿がそれぞれ一枚ずつあり小さいほうは何も残ってなかったが大きいほうには食べかけのオムライス？らしき物が残されていた

「えーと、これは？」

「小さいほうの皿にはムツツリーニが作った胡麻団子があっただけ食べられちゃって」

「ふーん。で、大きいほうは？」

「え、えーと。その……」

その反応……、なんか嫌な予感がするんだけどもしかして……

「……姫路さん？」

「あ、あはは……うん」

やっぱり……

「で、これをさつきいたあの三年が食べてしまった、と?」

「うん。それで急いでAED使って心肺蘇生させたんだよ。いや、あの時は危なかったよ」

なぜこのクラスにはAEDが常備管理されているんだろう……

それにしてもやはりまだ無理だったか

「姫路さんの料理は木下さんの特訓でなんとかなったんじゃないの?」

「確かに薬品を使うのを止めさせたし、玉子料理はなんとか作れるようにはなった」

「それじゃあなんで」

「正確には玉子「単体」で作る料理は、ね」

「え？それじゃあ……」

そう、玉子「単体」で作る料理以外はまだ全然だめなのよね……

そもそも彼女の料理の考え方が料理≡科学なんてとんでもない考え方をしているの
でおかしなことになってる

恐らく好きな人の前でいい所見せようとして作ったのだろう。まあ出来上がったもの
のは最悪な物だが……

「とりあえずコレは下げておきなさい。 姫路さんが何か言って来たたら私が言っていた
と言えば文句は言わないはずだから」

「う、うん。 分かったよ」

しかし心肺蘇生とはね……。　　まだまだ特訓しなきゃだめか……

ふと見るとテーブルの横に紙切れがくっついていてのを見つけた。　それに書いてあったのは

超刺激的オムライス!!　　完食した方には豪華商品が!!　　と書かれてあった

……絶対無理だわなこれ

「ん?　　あいつら出て行ったのか?　　ったくこれからじっくり「交渉」しようと思ったんだが」

店の奥から蝶ネクタイをした坂本君が出てきた

「……蝶ネクタイなんかしてどうしたの?　　坂本君」

「ああ、秀吉の姉貴か。それは俺がここの店長だからな」

「ふーん。それでさつき言つてた「交渉」はどういうものなのかしら?」

「なぐにやたらとうちの店にいちやもん付けてくる先輩方に分かりやすいようにパンチから始まり、キック、そして最後にプロレス技で締める「交渉」をしようと思つただけさ」

それはなんとも過激な交渉術をお持ちのようで……

「あ、そうだ。坂本君と吉井君に」

今から紹介しようとした時、横からすうつと雅さんが前に出た

「すみません。貴方が坂本さんですか?」

「はい、私がこの店の店長の坂本で御座いますが」

坂本君は雅さんを客と認識したのかいつもと違う口調で対応した

うわ〜なんか凄く違和感を感じるんだけど……

「あ、いたいた。雄二！ どうしよう！ なんか客足が」

「おい明久、今接客中だぞ」

「で、そっちの君がアキヒサだね？」

いつの間にかクリスさんも前に出ていた

「ふえ？ だ、誰？」

こうしてこの文月学園のかつての問題児と今の問題児が出会うことになる

その頃……

「ガタツ!!」

「ど、どうしたの代表？」

「な、なにかあったの!? 永姫ちゃん」

「雄二（先輩）に女の影が!!」

第54話

「雄二。このお姉さん達、雄二のお知り合い？ だつたら不味いよ？こんな所霧島さんに見られでもしたら……」

「お、恐ろしい事を言うな!? それにこの二人は俺は何も知らん!!」

突然現れたお姉さま方に驚く二人

まあもし代表がこんな所みたら間違はなくO s i o k i が待っているだろう。意外と焼もち焼きだからなく代表 意

「おっと、これは失礼しました」

雅さんはさっと身なりを整え

「初めまして。 私はこの学校の卒業生の松島雅。 そしてこっちの連れが」

「上城クリスだよ！ よろしくね！ 後輩君たち」

「あ、ちなみにお二人とも同じ年の女子大生だから」

最後に私がこう付け加えると吉井君と坂本君は二人を交互に見ていた

「女子……」「大生……？」

うん、分かる。 分かるぞ、君達の思っていることが私には

だがこの世には我々の常識では測り知れないことは沢山あるのだよ

「……それでその先輩方が俺らに何か用なのか？ それと何で俺と明久の事を知っている？」

「ああ、それは学園長からお二人の事を聞きまして」

「あのババアが？」

情報の発信源が学園長だと知ると途端に警戒しだす坂本君

まあ無理もないかも。あの学園長だし

「ええ。実際こうして会ってみて分かりました。なるほど、学園長が気に入りそうな方々ですね」

「やめてくれ！ あのババアに気に入られるなんてろくな事がないぞ」

「そうですよ！ あんな戦国時代から生きてるような老婆に気に入られても嬉しくありませんよ！」

露骨に嫌そうな顔をする二人

ドドドドドドド
!!!!!!!

そんな中、一人突っ込んでくる人物が……

「バカなお兄ちゃん見つけたです！」

そう言って吉井君に抱きつく葉月ちゃん

「は、葉月ちゃん!? どうやってここに?」

「このお姉ちゃんに一番バカなお兄ちゃんは何処にいますか?」って聞いたたらここだと連れてきてくれたです♪」

葉月ちゃんが指差す私にじと目でこちらを見ている吉井君

私は嘘は言っていない。嘘は泥棒の始まりとも言おうし、教育上葉月ちゃんにも嘘は

よくないし……

だから私は悪くない。 うん

「さっきの音は何？ なんの騒ぎよ？」

「何かあったんですか？」

騒ぎを聞きつけたのか店の奥から島田さんと姫路さんが出てきた

二人はそれぞれ青と赤のチャイナドレスを着ていた

「あ！ お姉ちゃん！」

「は、葉月？ ど、どうしたの？なんで此処に？」

「お姉ちゃんがやってるお祭りがどんなのか気になって思い切ってきてしまったです！」

どうやら島田さんには内緒で来たようだ

そのおかげでこうやって島田さんが驚いているわけだけど行動力あるな葉月ちゃん

「美波、葉月ちゃんの事知ってるの？」

吉井君が不思議そうにそう尋ねると

「知ってるも何も葉月はウチの妹よ」

確かに似てる。特に元気そうな所とか勝気な所とか

そんな風に考えていると隣から

「どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか……。私はまだ両親とも会って貰ってないのに……。まさか、もう「お義兄ちゃん」になっちゃってる？」

なにやら小声でブツクサブツクサと何かを言っている姫路さんがいるわけだが。
……まあ気にしないでおこう

「あー！ あの時の綺麗なお姉ちゃん！」

そんな様子の子の姫路さんを見つけたのか声を掛ける葉月ちゃん

「ぬいぐるみありがとうございましたっ！」

「あ、ああ。こんにちわ葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいです！ 毎日一緒に寝てるです！」

へえ、葉月ちゃん姫路さんとも面識あるんだ。うん？……ぬいぐるみ……

「葉月ちゃん、ちょっと」

「ん？ なんですか？」

「ちよつと質問なんだけど一年くらい前にあのバカなお兄ちゃんに何かもらった？」

「どうして知ってるですか!？」

「うん、ちよつとね」

なるほど、ビンゴか

それを聞くと私はニヤニヤと吉井君のほうを見た

「え？ えーと何かな？」

「別に。今の葉月ちゃんを見て一年前にびしょ濡れになったかいはあったかなと思っただけだけど？」

「うっ。あの時はご迷惑をお掛けしまして……」

「いえいえ♪」

「ちよ、ちよつとアキ！今の何の話なのよ！」

「え!? あゝ、いや、なんでもないよ」

「なんでもなくないです！詳しい詳細を要求します！」

今のやり取りをみて二人が食らいついてきた

そんな二人の対応に吉井君が困っていると助け舟が現れた

「この方が葉月ちゃんのお姉さんですか。葉月ちゃんと同じで可愛い方ですね。お隣の友人もそうですが」

「なんか雰囲気とか似てるよね」

「アキ、この人達は？」

「ああ、この人達は文月学園の卒業生で僕らの先輩に当たる人で」

「松島雅です」

「上城クリスだよ」

そのあと、雅さんとクリスさんが同じ年だと知った時は二人とも驚いていたが暫くして落ち着きを取り戻すと雅さんとクリスさんを交互にみると雅さんのほうに視線を向けた。なにやら警戒しているようだが

そんな二人の視線に気がついたのか雅さんは二人に近づくと二人の耳元でなにかをつぶやいた

するとボン！つといいそうな位に二人の顔が真っ赤になった

「わ、私は、え、えーと、その…」ごによごによ

「う、ウチは、べ、別にそんなつもりは…」ごによごによ

雅さんのほうをみるとニコニコしていた。あーあれは人をオモチャにしているとき
の目だ。これは断言できる！ だって私は経験者なんだから！

……なんかすぐく泣きたくなってきた

「明久に報告を頼んで戻ってこんし島田や姫路まで戻らんと思ったらなんの騒ぎじゃ
？」

二人がなかなか戻ってこないのので様子を見に来たのか今度は奥から秀吉がやってき
たのだが……

なぜかコイツも白のチャイナ服を着ていた

「……秀吉、アンタいつも女扱い嫌だと言っておきながらそれ着てたら言われてもしようがないでしょうに」

「こ、これは違うのじゃ姉上!! ウェイトレスが足りぬと言われて仕方なく着ているだけであって」

「だったらウェイターでやればいいんじゃないや?」

「ぜひこれでやってくれと言われたのじゃ……。ところで、姉上よ」

「うん?」

「風の噂で聞いたのじゃがなにやら姉上のところは変わった服装で客を出迎えておるよ
うじゃな?」 ニコニコ

あ、あれ？　なんでだろう？　笑顔のはずなのになんか秀吉が怖い……

「う、うん。まあそうかな。あ、あはは……」

「それを企画したのは誰なのかの？　姉上」ニコニコ

ざわざわ……ざわざわ……

「い、いや、え、えーと、誰だったかな」

ニコニコニコニコ

「……愛子と代表です」

あの笑顔に歯向かえなくなった私は素直に答えた。　ごめん、二人とも。　なによりも命のほう重いのだよ

「ほう、なるほど。ならば後で二人とOhana siしないといかんのう」

なんかお話のニュアンスが違う意味に聞こえたような気がするのは私の気のせいだろうか……

「と、ところで吉井君に頼んでいた報告ってなんだったの？」

「おお、そうじゃった。明久よ、雄二には伝えてくれたかの？」

「あ、そうだった！ 忘れてたよ。雄二！ なんか変な噂が流れてるみたいで売上げが激減してるんだよ」

「まあ、そうだろうな。この有様だとな」

「教室内を見ると来たときは打って変わってまるで閑古鳥がなくなような有様だった

「その変な噂ってどんな噂なの？」

「うん。テーブルが腐ったダンボールで出来てるとかあそこは汚く衛生的にもダメだから行かない方がいいとか出てるみたい」

「そんな！ みんなで綺麗に掃除して飾り付けもしたのに！」

どうやら根も葉もない噂のせいでこのような状況になってしまっているようだ

それを聞いていた雅さんとクリスさんはなにやら考え込んでいた

「なぜそのような噂が流れたのかの。皆満足して帰ってもらった筈じゃ」

「……二人を除いてな」

「二人ってまさか」

「そうだ。あの常夏コンビが腹いせに悪い噂でも流しているんだろう」

「常夏コンビ？」

「常村と夏川の頭を取って常夏ということだ」

「なんだか暑苦しいコンビ名だな」

「すると坂本君は黒板にこう書き出した」

常夏コンビのデマの阻止 テーブルの確保

「俺達がやらなければならないのはこの二つだ。常夏コンビを大人しくさせてテーブルも確保しないと広まった噂は消えないだろうからな」

「テーブルの確保はどうするの？」

「学園の応接間から拝借すれば大丈夫だろ」

「ちよつと待つて」

なにやらとんでもないことを計画しようとしていたので思わず話しに割って入ってしまった

「どうした？ 木下姉」

「……Aクラスである私にはこの学園の治安と品格を守る義務があるの。そんなこと私の前で許すと思うの？」

「姉上……」

「……なんてね。友達が困ってる時にそんな堅苦しいこと言わないわよ」

「それじゃあ……」

「でも！ 学園の物を勝手に持つてくることは許しません」

「ならどうしたらいいの？」

「まあ、任せなさい」

私は携帯を取り出すと愛子に電話を掛けた

「ああ、愛子？ 私だけどちよつと頼みがあるんだけど……」

「ほら、ヤッヤッ」

あの電話をかけた後、私達はグラウンドの隅に停めてある中型のトラックの前に来ていた

「姉上、このトラックは何じゃ？」

「まあすぐに分かるわよ。それじゃあお願いします」

業者の方にお問い合わせするとトラックの荷台がまるで鳥の翼を広げたように開いた

荷台の中にあつたのはアンティーク風のテーブルやイスが多々置かれていた

「本来なら使う予定の物だったんだけど予定してたのよりスペースが取られて使うことが出来なかつたのをここにおいて置いたのよ」

「確かにこれなら大丈夫そうだけどいいの？ 僕らが使っちゃっても」

吉井君が心配そうに聞いてくる

この学校の方針に違反してないか心配なのだろう

「大丈夫よ。 レンタル料はすでに払ってる訳だから使わないと損だし。 それに」

「それに？」

「この清涼祭は私達、生徒が作るお祭りでしょ？ だったら困ってる同じ生徒である仲間を助けるのに理由いる？」

「木下さん……」

「あ、でもレンタルなんだから大事に使つてよ？ 壊してもしたら西村先生が飛んでくるからね？」

私がそういうと吉井君たちは苦笑いしながら領きテーブル等を運び始めた

「姉上。 すまぬ、恩にきるのじゃ」

「それは私じゃなく愛子に言いなさい。 先生達の許可をなんとか取ってくれたのは愛子なんだから」

「う、うむ」

「だからアンタは愛子に借りを作つたんだから問い詰めるとしてもほどほどにしときなさいよ?」

「う、うむむ。 分かつたのじゃ」

とりあえず友人を助けるために釘を打っておいた

しかし最近どうも秀吉のやつ暴走気味なのよね? やれやれ、一体何が原因なのやら

……

木下姉弟の日常 女子会編その1

とある休日

メイド喫茶ひだまりポケット

店内の一角にて数人の女性客が集まっていた

「え〜と皆、飲み物は行き届いた？」

「はい」

「では、かんぱ〜い♪」

「かんぱ〜い♪」

グラスが発する気持ちの良い音をスタートの合図のように女子会が始まった

「んん♪ このレアチーズケーキ美味しいです♪」

「いちごのクリームケーキもいけるわよ。葉月のお土産に買って帰ろうかしら」

席の右側には姫路、美波が

「へ〜、これが新作の栗のタルトなんだ？」

「はい。結構好評なんですよそれ」

左側には愛子、小町が居た。ちなみに小町は今日は非番である

「く、工藤よ」

「うん？　どうかした？　弟君」

中央の席には何故か秀吉が座っていた

「この集まりは女子会なのじゃろ？　ならワシはこの場にはいないほうがよくないかの？」

「ああ。それなら弟君ならなんの問題もないよ」

「それは一体どういう意味じゃ!？」

喫茶店の中に入るとたまたま(?)そこに秀吉がいたので強制参加させたのだった

最初のうちは最近身近にあった面白いことや今流行りの物の話などが話に上がっていったがそれが次第に気になる人に変わって行った

「ところでさ。 姫路さん、島田さん」

「なんですか？ 工藤さん」「ん？ 何？」

「……吉井君とは一体どうなの？」

そう聞かれると一斉にブツツ!!!と飲み物噴出す二人

「え!? ええっ!? え、えーと……」

「な、何を言ってるのよ!? べ、別にウチとアキは……」

「あ、うん。 なんとなく分かった」

そのリアクションを見れば聞かなくとも分かることであつた

「そ、そういう工藤さんはどうなのよ!？」

「どうって?」

「土屋君との関係について、です!!」

「なっ!?!」

予想外のことを聞かれたのか頬を赤くしながら驚く愛子

「ふうん。 うん、なんとなく分かったわ」「ですねぇ」

フフンとさっきの仕返しとばかりにドヤ顔する二人

「べ、べつにそんなんじゃないよ!? ムツツリーニ君とはライバルみたいなもんだよ!!」

このように女子会を始めていると

「あ、あの、お客様？ 他のお客様の迷惑になりますのでもうちよつと静かにしてもらえますか？ というか早く帰れ」

ポニーテールの髪型をしたメイドに注意を受けた

「えーと、いくらご友人といつてもそれは不味くないですか？……木下先輩」

そのメイドは優子だった。制服の胸の辺りにプレートが付けられておりそこには

「カガミ」と書かれていた

それはここで働く時に使う偽名である

雅は「識」 クリスは「アリス」 小町は「小春」といった感じである

「小町ちゃん、この店員さん態度悪いよ？」

「うっさい!! 愛子！ 何アタシの出勤日に女子会開くのよ！」

「そりや恥ずかしがりながらメイド服着て働く優子を見たいがために決まってるよ！」
きつぱり

「きつぱり言うな！」

「「カガミ」ちゃん、お友達が来て嬉しいのは分かるけどもう少し静かにね。 後あちらのお客様のオーダー取って来てね」

「す、すいません!! いますぐ行きます!!」

店長に注意され、覚えてなさいよろ!!と言わんばかりに愛子をムツと睨むと優子は急いでオーダーを取りに言った

「あちやく、ちよつとからかいすぎたかな？」

愛子は真つ赤になって急いでオーダーを取りに行く優子を見てちよつとやり過ぎた

かな?と思つていると

トントントントン
!!!!!!

「ん?」

振り返ると隣に居た小町が怯えた表情で自分の肩を叩きつつとある方向を指差して
いた

「どうしたの? 小町ちゃん。 一体何が……」

指差す方向に視線を向けるとそこには……

「イッタイナニヲヤツテオルノジャ? ノウ? クドウヨ?」

そこには鬼が居た

「すみませんでした!!!」

それを見た愛子は瞬間的に土下座した

近くに居た彼女達によると土下座するのに掛かった時間は一秒にも満たないほどの物だったらしい

木下姉弟の日常 女子会編その2

「あのさ、弟君に聞きたい事があるんだけどさ」

「なんじゃ？工藤よ」

愛子は接客中の優子を見ながらこう尋ねた

「優子ってさ自分のことかなり過小評価しすぎる部分があると思うふしがあるんだけど？」

「とーうとー？」

「うん。この前の休みの日のことなんだけどね」

そう言うと愛子は優子と二人で出掛けた時のことを思い出した

それは 店で買い物を済ませ、次の目的の場所に移動していた時の事だった
自分達より少し年上な感じの若い二人組みの男達に道を尋ねられたのだが

それはあくまで口実で所謂ナンパというやつだった

あまりの露骨さに苦笑いしながらどう対処しようかと愛子が思案していると

「ねえねえ。 これってナンパだよね？……愛子目当てかな？」

それを聞いたとき愛子は思わず「はあ？」と言いついそうになるのをなんとか堪えた

まあ確かにたまに。たまにはあるが町でそういう風に声を掛けられたことはある
が、今二人が声を掛けているのは優子のほう

こうして二人で居るときにナンパで声を掛けられる可能性が高いのは優子のほうが

多いのだ

なのにその本人ときたら全くそのことに気が付いていない有様

「……まあその時はなんとかボクが追い払ったけどさ。優子はなんとか異性の視線に対して鈍感というか無関心というか自分の女の子としての評価低く見てるようなふしがあるんだけど？」

愛子にそう尋ねられると秀吉は思わず頭を抱えていた

「ああ……やっぱりそんなことになっておったのか……」

「え？ 木下君何か知ってるんですか？」

「まあ姉上がそんな風になったのにはワシが原因なのかもしれないのじゃが……」

「？ どういうことよ？」

「姫路や美波には話したかもしれんが昔、ワシは虐められていた頃があつたという話をしたことがあつたじゃろ？」

虐められていたということがあつたことに驚きを隠せない愛子と小町だったが秀吉は話を進めた

「まあそんな時期もあつたのじゃが姉上のおかげで今こうしておられる訳じゃが。その頃の話なのじゃがワシを庇っている姉上に最初はいじめっ子達も噛み付いてきたのじゃがそれが次第に変わってきての」

ぶつきらばうな態度を取ったり、耳を赤くしながら「お、お前みたいな男女にカレシなんて永遠に無理だろうな！」とか言われたりと

「……ねえ？ 弟君。 それって……」

「うむ。 今にして思えばあれはただの照れ隠しだったのじゃろうな。 だが姉上はそ

れを鵜呑みにしてしまつての」

まああんな事言われても仕方ないわよね。 事実だし私あんまり女らしくないし、ね

え？ ハハハ

「と言つておつての」

「……まさかその時の自分の評価のまま今に至る、つてことなんですか？」

小町が恐る恐る聞くと秀吉は疲れたように頷いた

「なるほど。 だからああも鈍感というか無関心な訳だ」

「それは女の子として問題ですよね」

小町がそういうと女性一同は頷いていた

そんな様子とは露知らず渦中の人物がこのこやってきた

「皆でなに話してたの？ あ！ まさか変なこと企んでないでしょうね？」

そんなことを言っている優子に一同は深くいため息をついた

「??」

そんな皆に対して優子はただ首を傾げるのだった

第57話

トラックから余っていたテーブル等をもつてくるとそれらをテーブルクロスで綺麗に整えた

「雅先輩、上城先輩。手伝って下さって有難うございます！」

「さすが喫茶店で勤めてるだけあって手際がいいな」

私達も手伝いますよと雅とクリスもその手伝いをしたのだが、普段から喫茶店に勤めているからなのだろうかその出来は他のは全くの出来栄えだった

「そんなことないですよ。慣れれば誰にでも出来ますよ」

「そ、そうだよ」

そうは言うもののちよつと嬉しそうな二人

これでテーブル関係の問題は大丈夫、と。後はあの常夏先輩の問題かなと考えていると私の携帯が鳴り出した

携帯をみると呼び出し人は愛子だった

「愛子? どうし」「優子!! い、いますぐ戻ってきて〜!!」

なんか凄い焦っているのが伝わってくるのが分かる

「ど、どうしたの?」

「なんか変な上級生二人組がやってきたかと思つたら席に座つたとたんにまるで回りに聞こえるようにあそこの店は酷かったとか言い出してさ。あと坂本君のことも、つて!?! だ、代表!?! 包丁持って何処行くの!?! ダメだつて!?! ストップ!! ストップ!!!」

そう言つて電話が切れた。 うん。 なんか大変なことが起きているのは理解した

それは回りに居た皆にも聞こえていたようだ

「例の先輩達、私のクラスに来て色々やらかしてるみたい。 一緒に来てくれる？」

「ああ。 今度こそ「交渉」で片付けてやる」

「僕も行くよー！」 「ワシもじゃー！」

それじゃあ、と出発しようとする

「すみません。 ……私も同行しても宜しいですか？」

雅さんが同行を求めてきた

「雅さんも、ですか？」

「はい。それに私も一応このOGですから何かのお役に立てると思いますし。彼ら上級生にしても私のほうが先輩に当たりますから説得できるかもしれませぬし」

「あいつ等が素直に聞くとは思えないんだがな」

どうせ言っても無駄だと言わんばかりに坂本君がそういうと

「それでもやる価値はあると思います。やらないで出来ないと思うのはもつとも取ってはならない選択だと私は思います」

「……そうだな。確かにそれは一理あるわな」

何か思うところがあつたのだろうか、一瞬遠い目をしていたかのように見えたがすぐにいつも通りの坂本君に戻った

「構いませんか？ 優子さん」

「分かりました。行きましょう」

新たに雅さんも連れて急いでAクラスに戻るとクラスメイトが慌てたようすでこちらに駆け寄ってきた

「木下さん!! よかったら戻ってきてくれて」

「代表は？」

「控え室!! はやくはやく!!」

クラスメイトに急かされて控え室に行くところには

「どいて愛子。じゃないとあの人達をシメラレナイ……」

鬼が居た……

「優子!! (泣) 優子も代表止めるの手伝って!!」

「どうどう代表、落ち着いて。 何があつたのよ?」

「教室に入ってきてイスに座った途端にFクラスのお店の評判下げような言い出して仕舞の果てには雄二の悪口を何度も何度も言つて……。 もう私我慢できない」

「気持ちは分かるけどそこで手を出したらますます向こうの思う壺よ?」

「でも?」

「落ち着け、翔子。 あんなどうでもいい連中の口車に乗ってお前の所の評判まで下げようするんだ?」

「こちらを振り切つても出ようとする代表を坂本君が軽くチョップを食らわせて止めに入ってくれた」

「それでも……悔しい……」

「まあ、後はこつちに任せておけ。オレの交渉術で……」

「あそこ、ですね……」

「雅、さん？」

いまだ大声で話している常夏先輩達を見つけると雅さんは坂本君を無視して先輩達のほうへと向かって行った

「テーブルは腐ってるわ、変な匂いはするわ、店員はバカばかりと全くFクラスの行く奴の気が知れないな」

「全くだな！」

そう言つて笑つてしていると後ろから

「それが最上級生にもなつてやることですか？ 常村君、夏川君」

「ああ？ なん……だ……だ……」

二人は声を掛けられたほうに振り向くとさつきとは打つて変わつて驚きの表情を浮かばせていた

「ま、松嶋……」

「会長」？」

木下姉弟の日常

支え

生きていく中の途中で急に上手くいかなくなったり、立ち止まってしまうこと

世に言う壁に突き当たると

それは誰にでも訪れるもの

それはこの少年にとっても例外ではなかった

彼の名は木下秀吉

彼はその生まれ持った天賦の才と惜しみ無い努力で一年生でありながら大きな舞台の主役を任せられる

彼は最初その事に大いに喜んだ

しかし、それは舞台である会場と観客の数を聞いて一変する

それは今まで秀吉が経験してきた舞台とは遥かに大きい舞台に桁が違う観客の中で行われるものだった

その事に秀吉は大きく戸惑い、そして恐怖に近いものが現れる

それらが影響したのか舞台の稽古中ミスを連発し先生からの注意が多くなった

次第に秀吉から笑顔が少なくなっていく

それは自宅にいるときでも同じで姉の優子はそんな弟を見て心配になって声をかけた

「最近、なんかあったの？ 秀吉」

「え？ な、なんでそう思うのじゃ？ 姉上」

「なんか元氣無さそうだし、辛そうな顔してるから」

そう言われて秀吉は自身の抱えてる悩みを話そうかと思った

だが今まで自分を支えてくれた姉にこれ以上迷惑をかけたくないと思い、話すのを思い止まった

「大丈夫じゃ♪ 高校に上がって初めて任せてもらった主役じゃ。毎日の稽古が楽しくて仕方がないくらいじゃ♪」

「……そう。それならいいんだけどね」

そうじゃ。姉上にこれ以上迷惑をかけてどうするのじゃ！ このくらい男なら自分でなんとかせねばならんじゃろ

そう気合いを入れるものの現実には改善せず空回りが続き、ミスは続き……

そして主役の降板を検討される所まで来てしまっていた

その事に秀吉は大きくショックを受け、部活が終わった後、家に帰らず公園のブランコに座り込んでいた

ワシには演技の才能はなかったのじゃろうか？ 今までののは全て運がよかつただけ？

あれだけ姉上に支えられたのにワシはそれに応えることができないのじゃろうか

その事が余りに悔しかったのか自然と目から涙が溢れ出ていた

そんな時だった。ポケットの中にしまっていた携帯が震えだしたのは

慌てて携帯の画面を見るとそこには姉上という表示

でも秀吉は出ることが出来なかった

今こんな状態でどうやって話せと言うのだろうか

秀吉は電話を無視することにした

数回のコールがなり終わったかと思うとまたなり出したがそれでも秀吉は出なかった

数回続いた後それはピタリと止んだ。流石に諦めたかと思つた時だった

「……なんで電話に出ないかな、あんたは」

その声に驚いて後ろを振り向くとそこには携帯と小さい買い物袋を持って少し息を荒くしている姉の姿があつた

優子は何も言わず秀吉のもとまで近付くと隣の空いているブランコに力強く座った

それは私は怒っているんだぞと表現しているみたいだった

この後何を言われるとだろうとひやひやしていたが優子は何も喋らない

そんな沈黙が暫く続いた後、最初に動いたのは優子だった

持っていた買い物袋から何かを取り出すと黙って秀吉に渡した

渡されたのはまだ暖かさが残る缶コーヒーだった。飲むと冷え切った体だけでなく心まで温かくなっていく感じがした

飲んでしばらく無言のまま二人で夜空を見ていると優子が口を開いた

「……それで？何があったのよ？ まさかここまで来てまだ言わない、てことは無いわよね？」

「……怖いのじゃ」

「怖い？」

「部活で次の演劇でワシは主演を任せられることになってのう」

「凄いいじゃない！ ……でもそれがどうして怖いのか？」

「……次に行われる演劇の舞台会場は今までとは桁違いの大きさと観客数なのじゃ。その中でワシは上手く出来るのじゃろうかと」

「………」

「だから次の舞台、……上手くいく自信が全くしないのじゃ」

任された主演の責任の重さとプレッシャー

その二つが秀吉を大きく苦しめていることに優子は察した

「……なるほどね。　しかし演劇バカのアンタが怖がることがあるなんてねえ。
いや意外だわ」

「な、なんじゃと!?!」

真剣に話していたのにまるで無関心にそう言われて怒る秀吉を横目に優子はクスツ
と顔を緩ませたがすぐにそれは消えると星星が輝く夜空に視線を戻した

「……もし」

「?」

「もし、私があんたの立場だったらきつと上手い具合に言い訳作って逃げたと思う。
私だったら……」

「……」

「でも演劇一直線のアンタは迷っても最後の最後にはきつとやるんでしょね、そういう奴だからアンタは。 だって……」

「だって?」

「幼い頃に二人で見たあの舞台上、私がまだ見つけていない自分にとっての一番星を今も変わらず持ち続けることが出来る強い奴だから」

秀吉は目頭が熱くなるのを感じるのと同時に自分の中に失くしていたなにか熱いモノが戻ってくるのを感じた

「……さてと」

優子はブランコから立ち上がると飲み終えた缶コーヒーをゴミ箱に投げ入れた

「私は買い物してから帰るけど大丈夫?……帰って来れそう?」

「ああ。もう少ししたら戻るのじゃ」

そう、といい歩き出した優子だったが二、三步歩いたところで歩を止めた

「そうだ、秀吉」

「なんじゃ?」

「帰ったら小学生の時の卒業アルバムでも見てみたら? きつとあの頃のアンタが力を貸してくれるはずよ」

そういうと今度こそ優子は帰っていった

あの頃の自分? 一体どういう意味なのだろうかと思う秀吉は急いで家に戻ることに

にした

帰って自分の部屋に戻ると部屋の奥からアルバムを引っ張り出してきた

アルバムを開くとそこには幼い自分や同級生たちが写っており、ページを捲っている
とあるページに目が留まる

それは卒業式に歌を披露している自分だった

あの頃の自分は周りからどう思われるのか怖がっていた。しかしアルバムの中の
自分は楽しそうに歌っていた

心から楽しそうに

それを見た秀吉は思い出した。あの頃の自分といまの自分の状況が同じだということ
とに

そしてあの頃の自分は どうしてこんなにも笑顔になつていたかということにも……

「……全く。 姉上にはほんと敵わんな」

その後舞台はどうなったか

それはもちろん大成功で幕を下ろすことになる。 あの頃と同じ笑顔で……

第59話

「松嶋……会長？」

常夏先輩達は驚いた様子で雅さんを見ていた

「お久しぶりですね。常村君、夏川君」

「か、会長が何故ここに？」

「何故？ おかしな事を聞きますね。私はこのOGですよ？ 清涼祭に来て別に変な事ではないでしょ。後、私はもう会長ではありません」

「は、はい……」

そんなやりとりを後ろで見ていて気になることがあった

さつきまで我が物顔で回りに大きな声を上げていたあの二人が打って変わって今では緊張した面持ちで話をしている

あの二人をここまで変え、しかも会長と呼ばれている雅さん

一体何者なんだろう？ この人……

「ところで……」

そういうと眼つきが少し鋭くなって二人を見る雅さん

「さつきのアレは一体何なんですか？ あんな大声で下級生のクラスの出し物の非難する。上級生がやることではないと思えますが？」

「で、でもホントの事でしょ!?!」

「確かに店の一部に不具合があったのは確かですがそれはもう改善されています。衛生面にしても元の教室の状況から考えて綺麗な内装に仕上がっているとと思います」

「そしてなにより来店した方々に満足して帰ってもらっているという事。それはつまりどのようなにすればお客様に満足してもらえるかということを考えて行動していること。貴方達が言っているのとはずいぶん違うような気がしますか？」

「俺らあそこの店のサンプル食って死に掛けたツスよ!!」 「そうだそうだ!!」

「では聞きますが貴方達は普段からレストランに飾ってある食品サンプルを食べるのですか？」

「そ、それは……」

相手の抗議にそれを上回る正論で相手を完全に論破する雅さん

凄いな〜と思っていると

「ミヤビく、何かあったの〜?」

帰ってこないいで様子を見にきたのかクリスマスさんが店にやってきた

「か、か、上城先輩!?!」

坊主先輩がなにやらクリスマスさんを見つけると顔を真っ赤にさせてアタフタし始めた

この反応……坊主先輩……そういうことか

「あ! シュンペイにユウサクだ!」

「上城先輩まで来てたんツスカ!?!」

お〜い♪つと三人の下に駆け寄ろうとするクリスマスさんの頭上をビュン!!と何かが駆け抜け

ベチャ!!つと坊主先輩の頭に不時着した

「な、なんだこれ!? は、離れねえぞ!」

坊主先輩の頭にくっ付いたのは紫色の艶かしいブラだった。恐らく瞬間接着剤付きの

中にパットでも入っているのかモミモミとブラを揉むブラジャーせんば、あ、じゃなかった坊主先輩

端から見ると変態的なその行為に雅さんともう片方の先輩は突然のことに呆然として

「きゃー、あの人私の胸揉んでます!!」

振り返るとメイド姿の女の子が叫んでいた

よく見るとそれは女装した吉井君の姿だった。後ろには満足げなうちの弟が……

オマエノシワザカ……

いやいやしかしあれは揉んではないな、……いや？ 揉んでるから合ってる？

んん?? どっちだ？

などと変なことに頭を悩ましていると吉井君の大きい声が周辺の来客の視線を坊主先輩のほうに向けられていた

「え!! あ、いや! これはその!!」

テンパる坊主先輩。 そんな所に

「あのね? シュンペイ? 女の子のブラをそうやって遊ぶのはどうかと思うヨ?」

「なっ!?!」

いや〜クリスマスさんこの場面でそれはないかと。あーでもこの人たまに天然な所もあるし、まああながち間違いではないわな…端から見れば

そう言われると坊主先輩の顔がかああと真っ赤になっただけ

「つ、常村!! 逃げるぞ!! い、一時撤退だ!!」

「え!?! ちょ、ちょっと待ってよ!! 夏川!!」

凄いスピードで教室を後にする坊主先輩にそれを追う常村先輩

逃げたくもなるよね……

「待て!! 変質者め!!」

「追うぞ！ 明久!!」

先輩方を追う吉井君達。

……君も十分変な人ですよ？

吉井君

Aクラスのそんな騒ぎを外から見つめる一つの視線があつた

「ちっ、推薦状を餌に駒にしたのはいいが役にたたん奴らだ。
ンも動かせるようにしておくか」

……仕方ない、別のプラ

そうしてその視線は人ごみの中に消えていった

第60話

常夏先輩達がうちのクラスを飛び出した後も吉井君達とひと悶着あったらしい

そのひと悶着の間にうちのクラスの久保君が騒ぎに巻き込まれたらしいのだが……

「彼女は一体何者だったのだろうか？ ハッ!? いけない!? 僕には吉井君という心のmysイートハニーがいるじゃないか!? だが彼女のあの妖艶な美しさは……。しかし!! 僕には吉井君が!!」

……。何やら関わらないほうが良さそうなので声をかけないでおこう。後、吉井君の身の安全も祈っておこう

雅さん達はなにやら用事ができたようでもまた明日もくるところちらに伝えると教室を出て行った

その後は何事もなく時間が過ぎ清涼祭1日目は終了した

この日のお店の売り上げを計算していくと

「……なにこの売り上げ。 予想してたのやつを大きく上回る金額なんですけど?」

そう言つてクラスの皆を見ると視線を反らすのが約二名

「……おい、そのの学年主席に水泳部のエース。 一体何した?」

「いや〜なんかこの子の猫耳メイドがなかなかの人気だったからさ」

「……これで売り上げUP」

そして二人が出してきたのが

え〜となに? ……清涼祭限定謎の猫耳メイドさん特別プロマイド。 制作 ムツ

ツリーニ商会……

「まさかここまで売れるなんて思ってたなくてさ〜」

「……でもこれで打ち上げの予算も増えてちよつとは豪華になるかも」

どうやらこの清涼祭の終わりには打ち上げのパーティーを企画しているらしい

それを聞いたクラスメイト達は

「え!! 打ち上げのパーティー豪華になるの!? やったー♪」

「しかし本当にこの子一体誰なんだ?」

打ち上げが豪華になると聞いて喜ぶ子がいればこの謎の人物に対して興味をもつクラスメイトがいたりした

確かに打ち上げが豪華になるのは喜ばしい……喜ばしいのだけど……

それは!! あたしの黒歴史を生贄にして得られた資金なんですよ!?

…と言いたいけど言えるはずもなくぐぬぬと元凶の二人を見つめていると

「あ、そういうえばムツツリーニ君から謝礼として封筒預かってるよ」

「謝礼?……ところで分け前は?」

じと目でそう聞くと笑顔で

「……6対4」

「もちろんボクらが6だよ♪」

こ、こいつ等々、本人の知らないところでこんな商売しやがって(泣

泣きそうな思いで受け取った封筒を開けてみると入っていたのは

可愛らしいトラ耳の女の子がプリントされた紙切れが10枚

こ、これは!! と○のあなの商品券!!

来月欲しい新刊がたくさんあつて軍資金が厳しいこの状況でこれは手が出るほど欲しい!!

ぐっ!! だがコレを受け取るということは買収されるということとそれはそれでなにか悔しいし…

つつうか一体何処であたしの情報を掴んだのだろうか? 恐るべしムツツリーニ商会

などと考え込みうーんうーんと唸っていると

「どうしたの優子？ いらぬモノだった？ なんなら返してこようか？」

愛子がそう訪ねると

「いえ、有難く受け取っておくわ！」

反射的にそう答えていた

悲しいかな、人は欲望に正直な生き物である……

その後、教室である程度片付けをし、明日の準備を済ませ帰宅した

その日の夜

「秀吉のところのお店の売り上げどうだったの？ まあ姫路さんや島田さんみたいな可

愛い子達がウエイトレスやってればそれなりの売り上げはたたき出したと思うけど」

夕食を済ませゆつくりしているときにちよつと気になったので秀吉に聞いてみた

「うむ。凄い売り上げだったのじゃ。まさかあれほどの売り上げだったとはワシも驚いたのじゃ」

「へー。さすがはあの二人と言ったところかしら」

「い、いや、まあ、確かにあの二人のおかげでもあるのじゃが……」

「ん？ 違うの？」

「その……、売り上げに貢献した大部分が、その、明久の女装のプロマイドセットで」

女性陣はかなり複雑な心境でしょうねそれは……

そして吉井君。 貴方の気持ち、今なら痛いほど分かるわ！ 今のアタシなら！！

「明日は召喚大会か。 大変な一日になりそうじゃ」

そう言つて秀吉がしんどうそうな顔してるので何かあつたのかと聞いてみた

「……召喚大会でワシらのクラスから優勝者を出せねばならなくなつての」

「……訳ありな事情？」

「訳ありじゃな。 まあそこに関しては聞かないでくれると助かるのじゃ」

「まあそういう事情なら聞かないわ」

まあこつちも訳ありでその召喚大会でアンタの所の吉井君達を優勝させないといけないしね。 秘密だけど

「召喚大会で思い出したのじゃが姉上。今朝の件はどうかになったのかの？」

「今朝の件？」

「召喚大会のパートナーの件じゃ」

ああ……あの件か……

「ま、まあ、なんとかなった、つとていうかなってしまっただけか……」

「姉上？」

「大丈夫だから！ うん！……多分」

「そ、それならいいのじゃが」

そうして夜は更け、朝日が昇りいよいよ清涼祭は二日目に突入した

第61話

清涼祭、二日目

二日目のメインイベントは召喚大会なのだがそれだけでなく各クラスの出し物もまた継続している訳で……

「数多くのお客様から謎の猫耳メイドさん登場の要望が殺到してます!!」

「こちら受付係です!! これ以上は持ちませーん（泣） 救援を!! 救援を!!」

今、うちのクラスの入り口で大変なことになっております……

どうやらあのムツツリーニ協会が出したあのプロマイドがこの状況を作り出したよ
うだ

これを見てアタシの隣にいる緑髪の悪魔がこっちの肩に手をかけてこう言った

「さあ、優子。メイクアップの時間だよ（ニコッ）」

「アタシにまたアレをやれというのか!？」

出来ればアレはもう遠慮したいんだけど……アタシの黒歴史的にも

「出ないとこの状況を收拾できないと思うけど?」にやにや

コ、コイツ!? 分かって言ってるでしょ!?

でももう受付の所も限界みたいで涙目で助けを求めている

つまりアタシには選択肢が初めから無かった訳で……

……

.....

.....

「ありがとうございます」

バイトで鍛えられた営業スマイル全開でなんとかラッシュを乗り切ることが出来た

「どうにかなんとかなったみたいだね」

「もうへとへとだよ。……ところで工藤さん、この子一体何者なの？」

クラスメイトの視線がこちらに集まってきた。や、ヤバい……

内心焦っている

「ああ、この子は優子の知り合いで鏡ちゃん。この清涼祭に緊急のヘルプで来てもらうことになってたんだよ。まあ忙しい所に無理言つて来てもらつてるからランダムな助っ人だけど鏡ちゃん本物のメイド喫茶で働いてるから戦力になるでしょ？ 皆に伝えるの忘れてたよ、ごめんね」

そう言つて苦笑いで手を合わせて愛子がそう謝罪すると「なんだ、そういうことなら」と納得するクラスメイト達

即興で作つた嘘とは言えこんなにも簡単に皆を騙すとはこいつ、秀吉と同じくらいに役者の才能あるのではないだろうか

そんなことを考えていると

『まもなく召喚大会がスタートします。大会に出場する生徒は会場のほうに集合して下さい』

「もうそんな時間なの？ 全然気が付かなかつたよ」

「そういえばうちのクラスからも何名か出るんだったよね」

「そうだよ。代表の所にボクの所とあと優子の所も出るんじゃないかな？」

「へー。あ、その木下さんだけどさつきから姿見えないけど？」

ギクツ!?

「え、えーと、そ、そう！ 優子にはお店の宣伝に出て行ってもらってるんだよ!! 鏡ちゃん、悪いんだけどこのバックを優子に渡しに行ってもらえないかな？ 中には制服が入ってるから」

「わ、わかりました！ そ、それじゃあ皆さん！ 頑張ってくださいい〜」

そう言うときアタシは愛子からバックを預かると急いで教室を後にした

「はあはあ……、ま、間に合った……」

あの後、回りに誰も居ないことを確認しながら一階の使われていない実習室で大急ぎで着替え、ここまで走ってきた所である

ゆっくりと息を整えて周りを良く見ると全クラスから参加者が出ておりその編成は同じクラス同士だったり別々のクラスのコンビだったりと色々なペアがいた

そんな中アタシのパートナーはと言うと……

「木下さん!! こっちです!!」

そう呼ばれ声ができるほうに進むとその人がいた

「ごめんね? 待たせちゃった?」

「いいえ。こちらも今来た所です」

今回ペアーを組む事になったその人は

「さあ！ 行きましょう!! お姉さまに近づく豚共を殲滅し目指すは優勝です!!」

「あ、あはは。よ、宜しくね?……清水さん」

Dクラスが一人、清水美春その人である

第62話

初めて優子と美春が出会ったのは試召戦争でFクラスがBクラスに勝利した頃にまで遡る

学園の底辺と言ってもいいFクラスが格上のBクラスに勝利したことに全クラスが衝撃を受けている中、Fクラス勝利の為に行動を起していた優子は休む間もなく今度はその勝たせたFクラスの対策に思案に暮れていた

「やっとBクラス戦を終わらせたと思っただら次はウチのクラスの対策考えないと。あー、しんどい」

色々考えてはみるがなかなかいい案が出ず、机の上でぐったりしていた

「はあ……、いい案出てこないしちょっと気分転換でもしようかな」

備え付けてある冷蔵庫の中から缶コーヒーを一本取ると放課後の誰も居ない教室を出て中庭に向かった

文月学園にある中庭は日差しが気持ちよく風通しも良いため、そこにあるベンチは考え事を纏める時によく優子が使っている場所だった

目的の場所に着くと先客がいた。その先客というのが

「さあ！ 美春のあつゝいベレーゼを受け取って下さい！ お姉さま」

「だ、か、ら！ ウチにはその気ないんだってば!!」

ベンチの上に一人の女の子が押し倒され、もう片方の女の子が迫っているという状況だった

えーと、まずは状況を把握しよう。今押し倒されているのが島田さんで押し倒している女の子のほうは知らない子だ

00:01

そして島田さんは帰国子女。海外では同性愛が認められている国はある。確かド
イツも同性愛には寛容の国だったはず。……ならアタシが取るべき選択は

02

00:

「お、お邪魔しました〜」

わずか三秒の決断である

「ち、違う!! ウチはノーマル!! ノーマルだからあああああ!!!」

「うおお!!」

すごい剣幕で呼び止められた

「…という訳なの! 分かってくれた?」

「は、はい。勘違いしてごめんなさい」

あの後すごく、物凄く事の詳細を説明してくれた。どうやら一方的に迫られていた、らしい……

「そんな！ 美春とお姉さまは一心同体の恋仲なのに！」

「美春は黙ってなさい」

でも隣の女の子はどうやら納得はしてないみたいだけど

「ところでこの子は？」

「ああ、紹介がまだだったわね。この子は」

「二年Dクラス、清水美春です！ お姉さまの永遠の恋人です！」

「だから違うって言ってるでしょ!？」

なるほど、島田さんも苦労してるんだな。……うん？ Dクラス？

「Dクラスって確かFクラスが最初に戦ったクラスじゃ」

「そうです！ あの時、邪魔さえ入らなければ勝利し保健室でお姉さまとあんなことやこんなことに」

そういつて端からみても危ない想像をしているのが丸分かりの清水さん

「よ、良かった!! 本当に勝って良かったツ!!」

汗を掻き、はあはあと息を荒くしながら安堵する島田さん。 本当に危ない目に合いかけたんだろうな、あの反応は

「と、ところで木下さんはどうしてここに来たの？」

「ちよつと考え事を纏めようここにね。このベンチに座るといい案が良く出るから」

「その考え事というのは何なんですか？」

清水さんにそう問われるとちよつとした悪戯心が刺激されたのか島田さんを見ながらこう言った

「ええ。Aクラスに試召戦争を仕掛けてくるだろうクラスに対する、ねえ？」

「……それでその考え事は纏まりそうなの？」

あたしが言ったそれが何を意味するのか瞬時に理解したのかこちらの様子を伺う島田さん

「……………それがぜんぜん」

大きさに両手を上げお手上げのポーズを取ると予想してなかったのか「はあ？」という顔している彼女を見て思わず顔が緩んでしまった

「相手のクラスの代表が常識が通用しない相手でそんな相手に常識で考えても対策なんて事前に立てようがないしね」

それから後の事だが実際に優子がFクラス対策を思いついたのは対戦当日のことだった

「へく、それならその常識が通用しないクラスにも勝算はあるってことよね？」

「それは分からないけどこっちは負けるつもりはないから」

そう言って互いが不敵な笑みを浮かべていると

「き、木下さん。貴方、まさか……」

「ん？」

なんか隣にいた清水さんがわなわなと揺れながらこつちに指差すと

「貴方もお姉さまを狙ってるんですか!？」

「ないない」

思わず二人して手を横に振ってシンクロしていた。友人と仲がいいのは良いことだ、うん

この時はまだ優子と美春はお互いを知るきっかけに過ぎず、本格的に交流が生まれるのは試召戦争が終わりそれから少し経ったある日の休日のことである